平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報

1995年度

●奈良国立文化財研究所●

〒630 奈良市二条町二丁目九―一

TEL・0742―34―3931

1995年度平城概報正誤表

頁	行	誤	正
10	図4	SB2977	SB2997
20	24	主計	主税
60	18	奈良市立	(削除)
67	4	SG04	SX04
67	23	弾定院	禅定院
76	1	屋根要	屋根用
76	2	のは	(削除)
76	5	消失	焼失

表1・7（頁列に付加）

表1	頁	表7	頁
	4		
	4		45
	22		40
	30		*
	31		47
	*		40
			52
			52
			59
			53
			43
			*
			60
			68
			80
			60
			*

1995年度

平城宮跡発掘調査部

発掘調査概報

奈良国立文化財研究所

1996年

目　　次

Ⅰ　平城宮の調査 …… 3

1　造酒司の調査　第250・259次調査 …… 4

2　第二次朝堂院東第六堂の調査　第261次調査 …… 22

3　第一次大極殿の調査　第262次調査 …… 30

4　第二次朝堂院南門の調査　第265次調査 …… 31

Ⅱ　平城京・京内寺院等の調査 …… 39

1　市庭古墳東北部の調査　第258－3・258－7次調査 …… 40

2　木取山古墳周辺の調査　立会 …… 43

3　左京三条一坊七坪の調査（1）　第258－2次調査 …… 45

4　左京三条一坊七坪の調査（2）　第258－5次調査 …… 47

5　左京三条一坊八坪・東一坊坊間路の調査　第258－8・258－9次調査 …… 52

6　左京三条一坊十五坪の調査　第266次調査 …… 53

7　右京三条一坊十坪の調査　第258－10次調査 …… 59

8　大乗院庭園の調査　第260・268次調査 …… 60

9　薬師寺講堂の調査　第263次調査 …… 68

10　頭塔の調査　第264次調査 …… 80

その他の発掘調査一覧 …… 84

写　真　1　第259次調査区全景（東から） …… 85

2　第261次調査区全景（北西から）

3　第263次調査区全景（北東から）

4　第265次調査区全景（南から）

凡　　例

1．本書は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1995年度に実施した平城宮跡、平城京内遺跡等の発掘調査の概要報告である。調査報告の執筆は、各現場の発掘担当者による。

2．発掘遺構図に付した座標値は、平城宮内遺構、平城京内等遺構のいずれも国土方眼第Ⅳ座標系による座標値である。高さはすべて海抜高で示す。

3．遺構図には遺構ごとに一連の番号を付け、番号の前にＳＡ（築地・塀）、ＳＢ（建物）、ＳＣ（回廊）、ＳＤ（溝・濠）、ＳＥ（井戸）、ＳＦ（道路）、ＳＫ（土坑）、ＳＳ（足場）、ＳＸ（その他）などの分類記号を付した。なお、遺構番号の中には仮番号で示したものもある。

4．平城宮出土軒瓦・土器の編年は以下のようにあらわす（カッコ内は西暦による略年代）。平城京内等についても、この編年に準拠している。

軒瓦；平城宮出土軒瓦編年第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）

土器；平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（725）、Ⅲ（750）、Ⅳ（765）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

5．本文未収録調査については、「その他の発掘調査一覧」を参照されたい。

6．本書の編集は、部長町田章の指導のもとに、臼杵　勲が担当した。

I　平城宮の調査

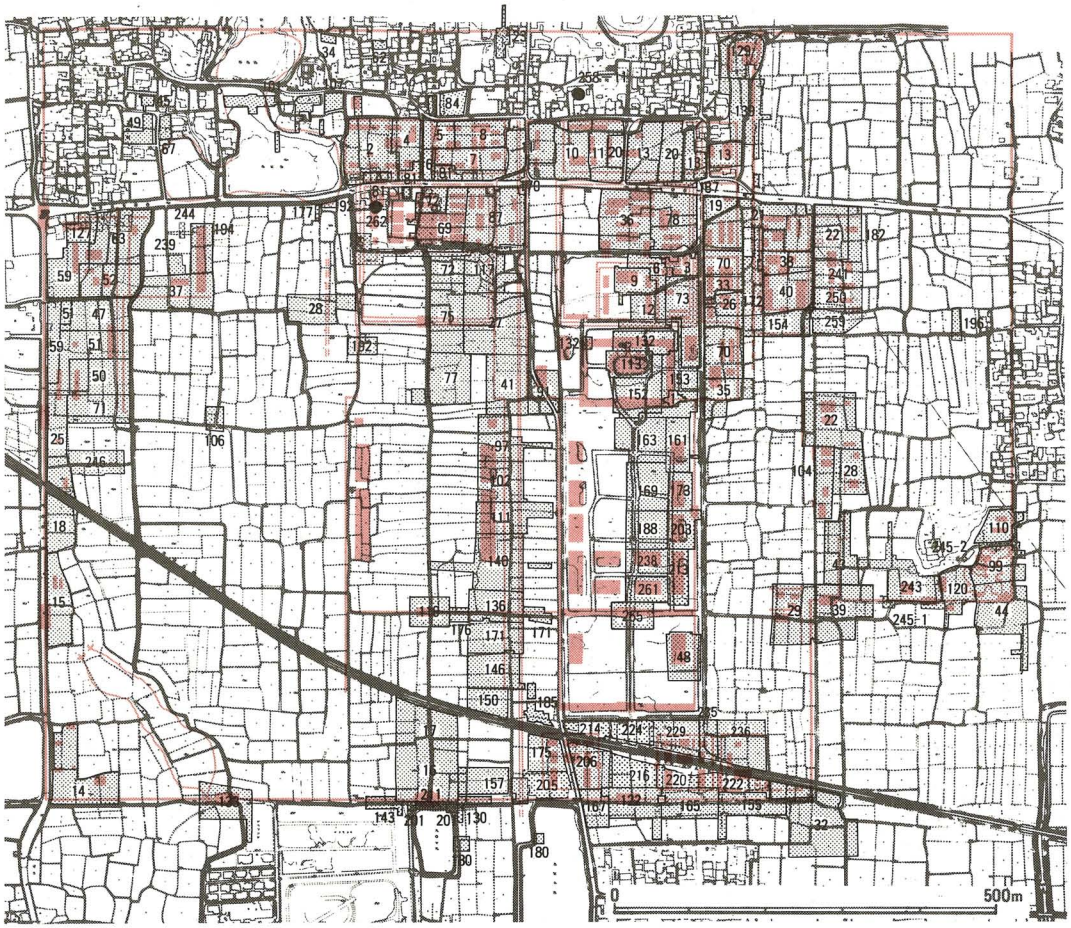


図1　1995年度　平城宮内発掘調査位置図　1:10000

表1　1995年度平城宮内発掘調査遺跡一覧（＊印は巻末表11に概要を掲載）

次数	遺跡名	地区	発掘期間	面積(㎡)	担当者	備考	頁
250	造酒司	6AAD 6ALQ	1995. 4. 7. − 7. 7.	1,800	臼杵　勲		
259	造酒司・宮内道路	6AAD 6ADE 6ALQ	1995. 7. 3. − 9. 29.	2,000	加藤　真二		
261	第二次朝堂院東第六堂	6AAV	1995. 10. 2. − 1. 19.	2,100	玉田　芳英		
262	第一次大極殿	6BBP	1995. 9. 1. − 9. 5.	12	内田　和伸	地盤調査	
265	第二次朝堂院南門	6AAV 6AAW	1996. 1. 9. − 1996. 5. 13.	2,030	渡辺　晃宏		
258−11	内裏北外郭北方	6AAN	1995. 3. 19. − 3. 26.	23	平澤　毅	溝辺文昭宅	＊

Ⅰ－1　造酒司の調査　　第250・259次

1　はじめに

今回の調査は駐車場造成に伴う事前調査である。本調査区は、平城宮東院の北西に位置し、塼積官衙地区の東に隣接する。造酒司地区はすでに第22次（1964・1965年）・第182次（1987年）・第241次（1993年）調査により北西部の様相が明らかにされ、出土木簡や酒甕据え付け穴を伴う建物の存在から「造酒司」と推定されている。この２回の調査では、西南部の様相と区画の南限を明らかにすることを目的とした。

調査期間は第250次調査が４月３日より７月12日まで、第259次調査が７月３日より９月29日までである。調査面積は第250次調査が約1800㎡、第259次調査が約2000㎡である。

2　発掘調査の概要

本調査区における宮造営前の旧地形は、西側に谷がはいりこみ全体としては北東が高く南西が低くなっている。さらに後世の水田による削平も受け、土層の堆積は場所により多様である。北東部では耕土・床土の下にすぐ礫を含む堅い黄白色の洪積層の地山があらわれるが、南・西へ行くに従い、整地層が現れ、地山も粘質・砂質土へと変わる。第250次調査区西半では、床土下に礫を含む黄褐・暗灰・黒灰土層があり、その下の整地層と地山で遺構を検出した。第250次調査区南東部と第259次調査区北東部では地山上にのる赤褐色系の整地土と地山（洪積層）上で遺構を検出した。259次調査区の他の部分は削平が激しく、北側に比べかなり低くなっており、遺構検出は地山（灰褐色砂質土）上で行った。遺構検出面の標高は、もっとも高い第250次調査区西北部で約68.2m、もっとも低い第259次調査区南端で約65.6mとなる。

今回の調査では造酒司地区の南端、宮内道路、内裏東方官衙地区の北端を検出した。遺構は両調査区を合わせ、掘立柱建物15棟、門２、築地塀２、掘立柱塀９、溝14、足場穴１、道路１、土坑２、小穴多数である。以下、造酒司地区とその南の宮内道路・東院北方地区に分けて、遺溝の概要を述べる。

Ａ　造酒司地区（図２）

奈良時代前半　ＡⅠ期

南と西を築地塀で区画し、南に棟門を開く。西側に井戸からの排水路を設ける。南門の北西に大型建物を置き、その南に雑舎群を配する。

SB16700　南の築地塀に開く棟門。柱間は12尺等間。

SA16702　造酒司地区の南を区画する東西築地塀。基底部を地山削り出しにより作る。基底部の幅は６尺。

SA16703　築地塀SA16702の南雨落溝。現状で幅約50㎝。全体で約20m分を検出した。削平のため確認できないが、西でSD16731に取り付くと思われる。

SA16704　築地塀SA16702の北雨落溝。現状で幅約80㎝。約36ｍ分を検出した。西端をSD16733に切られ確認できないが、SD16731に取り付くと思われる。

SS16705　築地塀SA16702の寄柱と思われる。３間分確認した。柱間は10尺。

SD16731　南面築地の下を走り、造酒司内の水を南へ排水する南北溝。この時期にはSD16732がＬ次状にこの溝に取り付き、やや南でSD16704が、築地の南でSD16703が取り付いたと思われる。築地下の部分は木樋暗渠となる。

SD16732　全長約６ｍの東西溝。SD3031とSD3035が取り付き、東側のSD16704より約1.5ｍ北にずれた位置で、SD16731に合流する。

SX16706　築地塀SA16702の西端に取り付く庇状の施設。SA16702西端ではSD16730がSA16704より北にずれるため、雨水をSD16732に流し込むために設けたものらしい。

SD3035　幅60㎝～２ｍの南北溝。井戸SE3046からの水を排水する。SD16732に取り付く。

SA15814　造酒司地区の西面築地塀。基底部は、地山上に砂質・粘質土を積んで築成しているが、明瞭な版築ではない。築地土の残りが悪く、基底部幅は確認できなかった。

SD3031　西面築地塀の東雨落溝。幅1.5～３ｍ。

SD3030　西面築地の西雨落溝。第250次調査区では西壁にそって東肩を検出した。第259次調査区では幅70㎝～1.5ｍ。SD41に取り付く。

SA16707　門の北側に位置する東西掘立柱塀。３間分を検出した。さらに西へ伸びる可能性がある。柱間は８尺等間。

SA16709　門の北東に位置する３間の南北掘立柱塀。柱間は８尺等間。

SB16726　SA16709の北に位置する６×２間の東西建物。柱間は10尺等間。内部に酒甕据え付け穴を持つ。

SB16712　SB16726の南に位置する３×１間の東西棟。柱間は桁行が5.5尺等間、梁間が６尺等間。

SB16714　SB16712の南に位置する２×２間の東西棟。柱間は桁行が７尺等間、梁間が６尺等間。

SB16717　SB16712の西に位置する３×２間の南北棟。北妻をSB14の北側柱筋にそろえる。柱間は６尺等間。

SB16723　SB16717の西に位置する２×２間の総柱建物。柱間は６尺等間。

SB16716　SB16712の南西に位置する４×２間の東西棟。柱間は６尺等間。ＡＩ期の後半にSB16714とSB16717を建て替えたもの。

奈良時代前半　ＡII期

門・築地塀・主要建物に変化は無いが、北側の井戸の増設に伴い、排水路を掘り足す。南の雑舎群は、同規模の南北棟３棟に建て替える。

SD15818　SD3035の西に位置する南北溝。SE3149から伸びる溝で、この時期に22次・244次調査区であらたに井戸SE3049とSE2966が設けられたのに伴い、この溝に３つの井戸の排水を合流さ

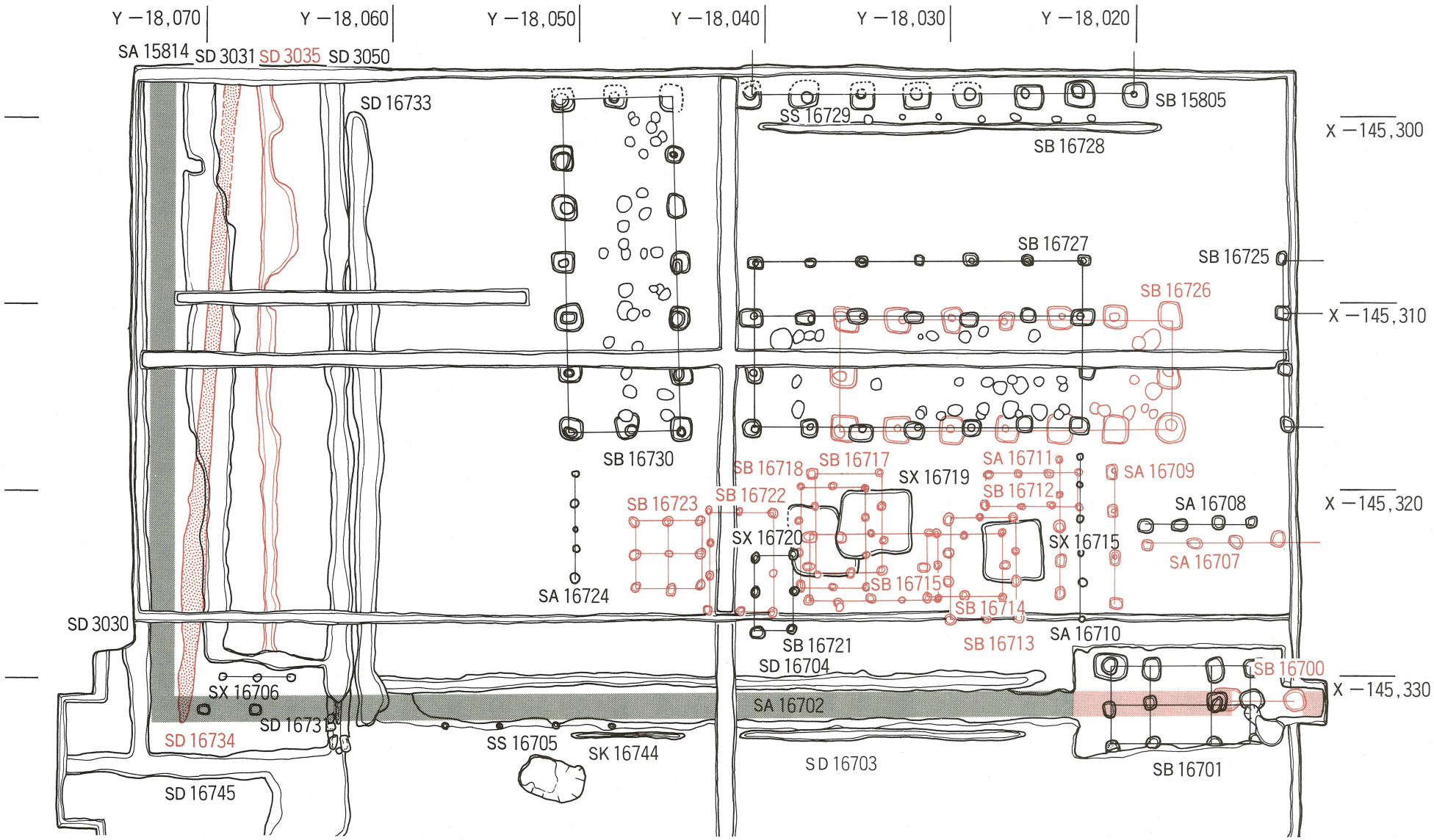


図２　第250・259次調査遺構平面図（１）１：300

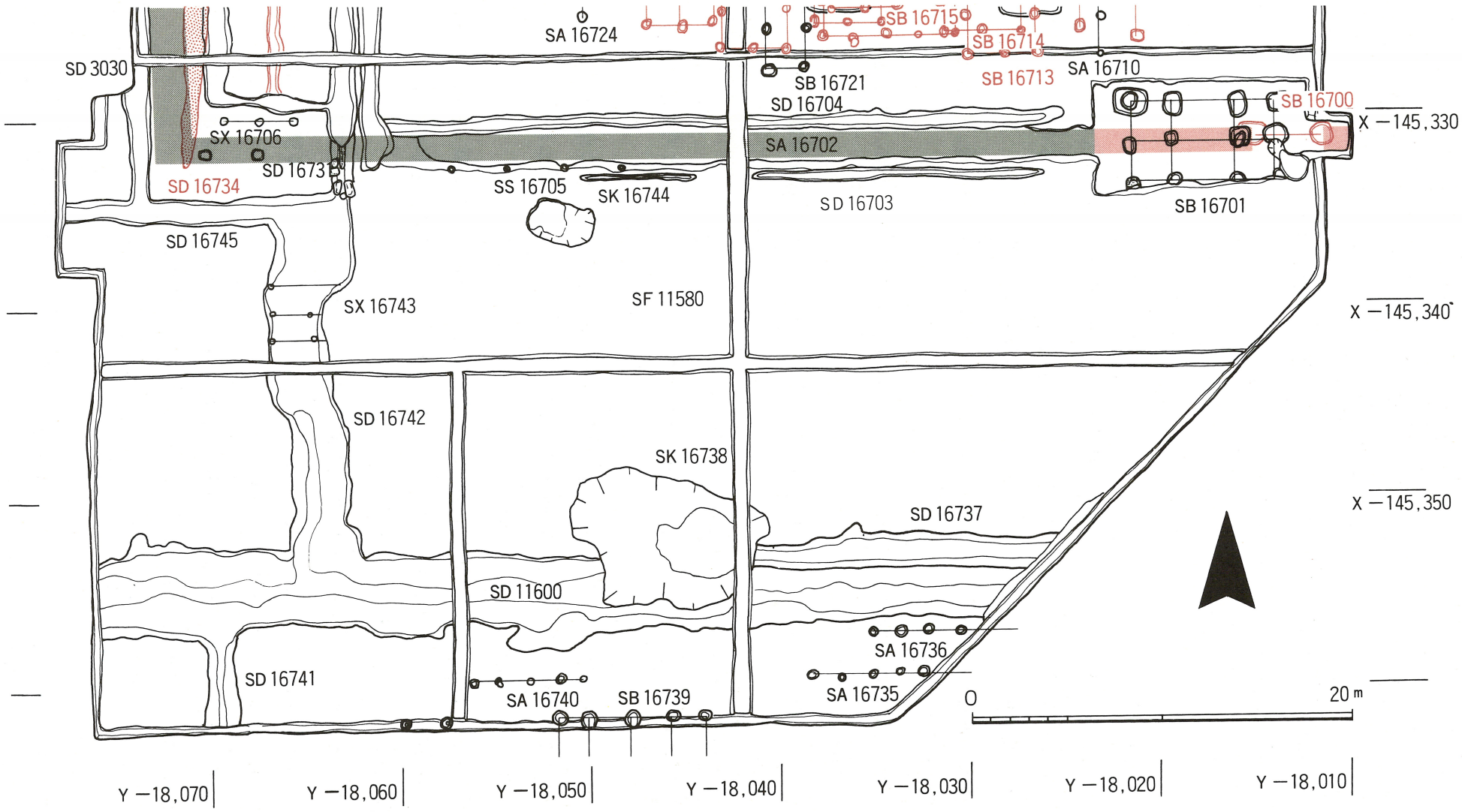


図３　第250・259次調査遺構平面図（２）１：300

せ、SD16931に直接つなげて築地の外へ出した。なお、従来の排水路SD3035もこの時期まで並存していたらしい。

SA16711　SA16709を10尺西にずらして付け替えた南北塀。4間分検出した。柱間は8尺等間。

SB16713　SA16711の西に位置する3×2間の南北棟。柱間は6尺等間。

SB16718　SB16713の西に位置する3×2間の南北棟。柱間は6尺等間。

SB16722　SB16718の西に位置する3×2間の南北棟。柱間は6尺等間。

奈良時代後半　B期

南門を礎石建ちの八脚門に変え、建物を増築する。門の北西部には竪穴状の施設を設ける。

SB16701　SB16700を建て替え、心をやや西にずらし基壇を増設し、礎石建ちの3×2間の八脚門とする。柱間は桁行が8・11・8尺。梁間が8尺等間となる。

SB16727　SB16726をやや西にずらして建てかえた6×3間の北庇付き東西棟。柱間は10尺等間。内部に酒甕据え付け穴を持つ。

SB16725　SB16727の東に柱筋をそろえて位置する東西棟。西妻を検出したのみであるが、北に庇がつく同規模の建物と思われる。

SB15805　7×2間の東西棟。柱間は10尺等間。調査区西北端で南側柱筋を検出した。SB16727と西妻柱筋をそろえる。

SD16728　SB15805の南雨落溝。幅約50㎝。約22m分を検出した。

SS16729　SB15805の南側柱筋に並ぶ小柱穴列。SB15805築造の際の足場穴と考えられる。6間分を確認した。

SB16730　SB16727の西に位置する6×2間の南北棟。南妻柱筋をSB16727の南側柱筋とそろえる。内部に酒甕据え付け穴を持つ。柱間は10尺等間。若干方位が北で西にふれる。

SA16708　門の北に位置する3間の目隠し塀。柱間は6.5尺等間。

SA16711　門の西に位置する5間の南北塀。柱間は6尺等間。SB16727の東妻と柱筋をそろえる。

SX16715　SB16727の南に位置する一辺約3mの方形の竪穴。一部に貼り床が残存する。関連する柱穴を確認できず上屋の様子は不明だが、半地下式の施設であろう。

SX16720　SX16727の西に位置する同様の方形竪穴。1辺約3.5m。北東部をSX35に切られる。

SX16719　SX16720の北東部を切って設けられた1辺約3.5mの方形竪穴。規模がSX34とほぼ同じであり、ある時期に建て替えたものと思われる。

SB16721　SX16720の東に位置する3×1間の南北棟。柱穴がSX16720の埋土を切り込んでおり、SX16719に建て替えと同時に建てられたものであろう。

SA16724　SB16730の南に位置する4間の柵。柱間は北から3間目で3尺、他が5尺。

その他

SD16734　造酒司造営以前の南北の斜行溝。内部に小礫が充填し、暗渠様を呈する。SD15814に

上部を切られる。時期は不明。

SD16733　SD3050の東に位置し、部分的にSD3050の東肩を切る南北溝。時期は不明だが、木簡が１点出土しており、。奈良末～平安初頭ころにSD3050を付け替えたものか。

この他に、南面築地の北側ではまとまりを特定できない多数の小穴群が存在し、雑舎・柵などの簡単な施設がさらに存在していたと思われる。

B　宮内道路・東院北方地区（図３）

奈良時代

SF11514　幅約15mの東西道路。

SD11600　SF11514の南側溝。現状で幅約５m、検出面からの深さ約１mという大規模な溝である。北からSD16742、南からSD16741が取り付く。埋土より木簡が約2500点出土した。

SD16745　SF11514の北側溝。幅約1.5m。北からSD3030が取り付き、SD16742にＬ字状に取り付く。そこから東へは伸びない。その先は造酒司の南面築地南側溝SD16703が北側溝をかねていたらしい。

SD16742　SF11514を横切る南北溝。幅約3.5～4.5m。SD16731とSD16745が取り付く。

SX16743　SD16742にかかる橋。西岸に杭３本、東岸に杭２本を検出した。

SA16735　調査区南東に位置する東西塀。４間分検出した。さらに東に伸びる可能性がある。柱間は５尺等間。

SA16736　SA16735の北に位置する東西塀。柱間は５尺等間。

SA16740　調査区南端中央付近に位置する東西溝。４間分を検出した。SA16735と一連の塀の可能性がある。

SB10739　東西に庇が付く南北棟。北妻を検出した。柱間は庇部分が５尺、母屋部分が7.5尺。

SK16744　SF11580上に掘られた楕円形の土坑。長径約3.5m。

その他

SD16737　SD11600の北肩を切る東西溝。

SK16738　SD11600の北肩を切る大型の不整形土坑。長径約10m。

３　造酒司地区の規模と遺構配置

今回の調査では、門・築地塀などを検出し、造酒司地区の規模を考える上で新たな資料を得た。また、造酒司地区西半の遺構の状況もほぼ明らかとなった。以下、これまでの調査成果と合わせ、概要を述べる。

造酒司の南北長は、第182次調査で検出した北門と今回検出した南門の心々距離で約125mとなり、420尺に復原できる。これは、東の塼積官衙と同規模となる。また、東西長については、西面築地と南門が参考になる。東西雨落溝から推測した西面築地と南門の心々距離は奈良時代前半が約59m（200尺）、奈良時代後半が約55m（185尺）となる。一方、西面築地と北門では

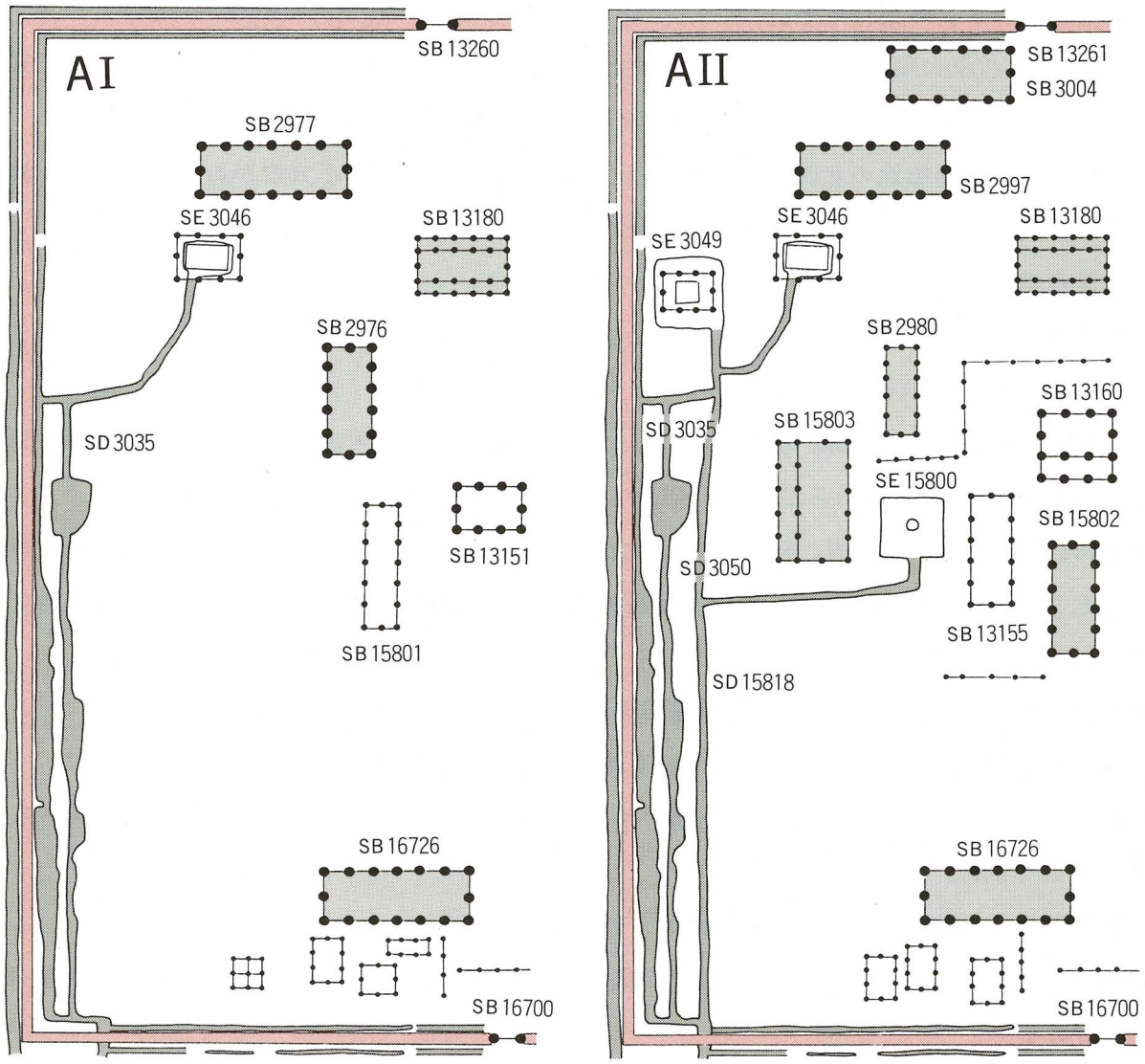


図4　遺構変遷図（1）　網目は酒甕を伴う建物

約51m（170尺）である。ただし、宮内道路に面している点や、後半に八脚門に建て替える点を考慮すると、南門が主要な門であった可能性が高い。南門を南面築地の中心に想定すると奈良時代前半が東西400尺、後半が370尺となるが、築地塀を位置を変えて作り直すとは考えにくい。当初の南門が築地の中心で、作り替えに際して若干西にずらしたか、当初から南面370尺で南門の位置がずれていたのを作り替えの際に中心に直したか、ここでは両方の可能性を指摘するにとどめておく。しかしいずれにしても、造酒司地区が東西・南北ともに100mを越える規模を持つ官衙であったことは確かであろう。

造酒司地区西半の遺構変遷については図4・5に示した。全体としては、建物の増加と建物規模の拡大という傾向がある。例えば、酒甕据え付け穴を持つ建物面積を比較すると、AⅠ期が約350㎡、AⅡ期が約610㎡、B期が約760㎡となる。AⅡ期の井戸の増設も同じ傾向の結果と考えられ、生産体制の整備・拡大の様子が反映されているといえよう。

また、奈良時代前半には区画の北半に建物が集中する傾向があるが、後半には南へ集中が移

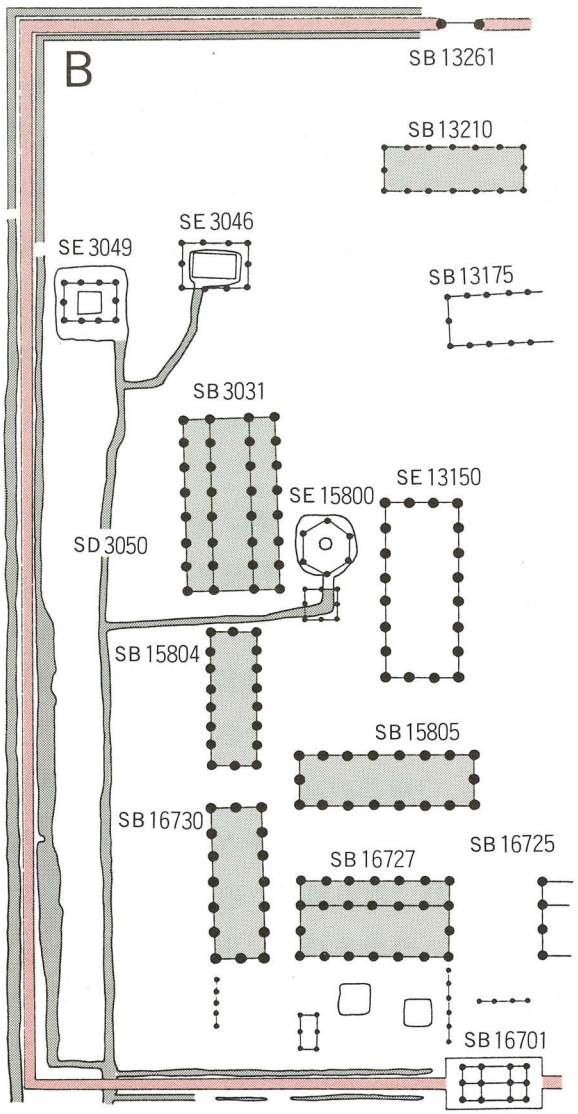


図5　遺構変遷図（2）

る。奈良時代後半に南門を八脚門に立て替えたのも、主要空間を南へ移すことと関連するのかもしれない。

この他に、南面築地付近では、前半には雑舎群をひんぱんに建て替え、後半には竪穴状施設を置いていたことが確認された。これらの周囲にも多数の小穴が存在し、作業に関連する簡単な施設がひんぱんに建て替えられたと思われる。竪穴状施設については、竪穴の保温・保湿性と醸造との関連を考慮すると、種麹の保存施設などが考えられる。

さらに興味深いのは、当地区の建物配置が他の官衙に見られるような、正殿を中心とする整然とした配置をとっていない点である。しいていえば、区画の中心付近に酒甕据え付け穴を持たない建物が常に配置されているが、これらも正殿というよりは酒・酢の製造・管理に関連する機能を考えるべきであろう。また、各時期とも、建物の存在しない空間が比較的広く、何らかの作業場として利用されていた可能性がある。

（臼杵　勲）

4　遺　　物

A　土器・土製品

今回の調査では、主にSD11600から質、量ともに豊富な土器、土製品が出土した。ここでは、延暦年間の紀年木簡を伴い平城宮土器Ⅴの基準資料となるＳＤ11600出土土器と、特殊土製品、墨書土器について報告する。

a　SD11600出土土器（図６）

土器は５層に分けて取り上げたが、最上層の暗灰粘質土以外は、多少の混入はあるものの型式的に大きな違いはなく、かつ延暦年間の紀年木簡は最下層に近い部分から出土しているので、ここでは一括して記述する。

土師器（１～20）　１～３は杯Ａ。杯ＡⅠ・ＡⅡがあり、調整はｃ０手法が主体で、ｂ０手法が一部ある。外面に磨きを施すものは殆ど認められない。１の削りは雑で、削り残しが多くみられ、３の底部外面には「田」の墨書がある。４は杯Ｂ蓋で外面を磨く。５～７は杯Ｂ。杯ＢⅠ

～ＢⅢがあり、全てｃ１手法で調整する。６は底部外面を硯として使用する。８はＩ群土器の高杯。杯部に放射暗文を持ち、平城宮土器Ⅲに属する。９～11は皿Ａ。皿ＡＩ・ＡⅡがあり、調整はｃ０手法が主体で、ｂ０手法が少量みられる。12～15は椀Ａ。椀ＡＩ～ＡⅢがあり、調整は全てｃ３手法。12の底部外面には「×」の線刻があり、墨書も記すが判読できない。14は灯火器として使用する。16はｅ０手法で調整する椀Ｃ。17はｃ０手法で調整する杯Ａ。暗灰粘質土から出土したもので、平城宮土器Ⅶに属し、平安時代初頭までＳＤ11600は存続していたことを示す。灯火器として使用している。18は盤Ａで、縦方向に削るｃ3手法で調整する。19は壺Ｅ。体部を全面削り、磨きを施す。20は甕Ａで、外面に厚く煤が付着する。他には杯Ｃ、竈が出土している。

須恵器（21～45） 21・22は杯ＢＩ蓋、23～25は杯ＢⅢ蓋、26・27は杯ＢⅣ蓋。全てＩ群土器で、23・25は転用硯として用いる。23の頂部外面には「西」、24のつまみには判読不能な墨書がある。28・29は杯ＢＩ、30は杯ＢⅡ、31～33は杯ＢⅣ。30・31以外は全てＩ群土器である。30は口縁端部がやや外反し、底部を丁寧にロクロ削りする。赤褐色を呈するが猿投窯の製品ではなく、産地は不明。32・33は灯火器として使用する。34は杯Ｌ。体部の稜以下をロクロ削りし、内面を硯として用いている。灰褐色を呈する緻密な胎土で、口縁部の立ち上がりも短く、播磨地方の製品である可能性がある。40は杯ＡⅡ、38・39は杯ＡⅢ、35～37は杯ＡⅣ。37・39は底部外面をロクロ削りし、40は「中衛」の墨書がある。41はＩ群土器の皿Ｃ。内面に墨書がある。42は鉢Ａで、内外面に黒色の物質が付着する。形態的には古い特徴を持ち、混入品であろう。43はＩ群土器の壺Ｅ。44は壺Ｌの胴部で、底部に糸切り痕が残る。外面に「神」、「西殿子」の墨書がある。45は壺Ｍで、頸部と体部の境には明瞭な接合痕は認められない。

以上、SD11600出土土器は、８・42が古い型式の混入品であり、12・17・33・41が暗灰粘質土の出土で、平城宮土器Ⅶに属するものやその可能性がある以外は、ほぼ平城宮土器Ⅴの範疇で捉えられる。その中で、土師器の調整手法でａ手法が僅少であることや、杯Ａの外面の磨きが殆ど消失することなど、より後出的な様相を示していると言えよう。

ｂ　特殊土製品（図７）

１はSD11600出土の鳥形硯。頭部、尾部と脚部の両端を欠くが、平城宮・京出土の形象硯では最も残りの良いものの一つである。別々に成形した頸部と胴部、脚部を接合してナデ調整を施し、硯面の縁辺部と脚部を削りで整形する。胴部下面には布目痕が残る。脚部側面には一条の沈線を入れ、脚を折り曲げて座る姿勢を示す。硯面は突帯によって陸部と海部を区分し、尾部は一段やや高くなる。肩部上面には蓋をかみ合わせるための刎り込みがある。頸部には間に列点を施した平行沈線を持ち、その周辺に墨で羽毛を描いている。肩部右側面には「道」の墨書があり、筆ならしのための墨痕が各所に認められる。２はSD11600付近の包含層出土の亀形硯蓋。右側縁前部の破片で、沈線で亀甲文と花弁状の毛を表現する。内面は平滑に磨滅している。形態、文様ともに右京八条一坊十三坪SK1398出土品に酷似する。３はSD11600出土の須恵

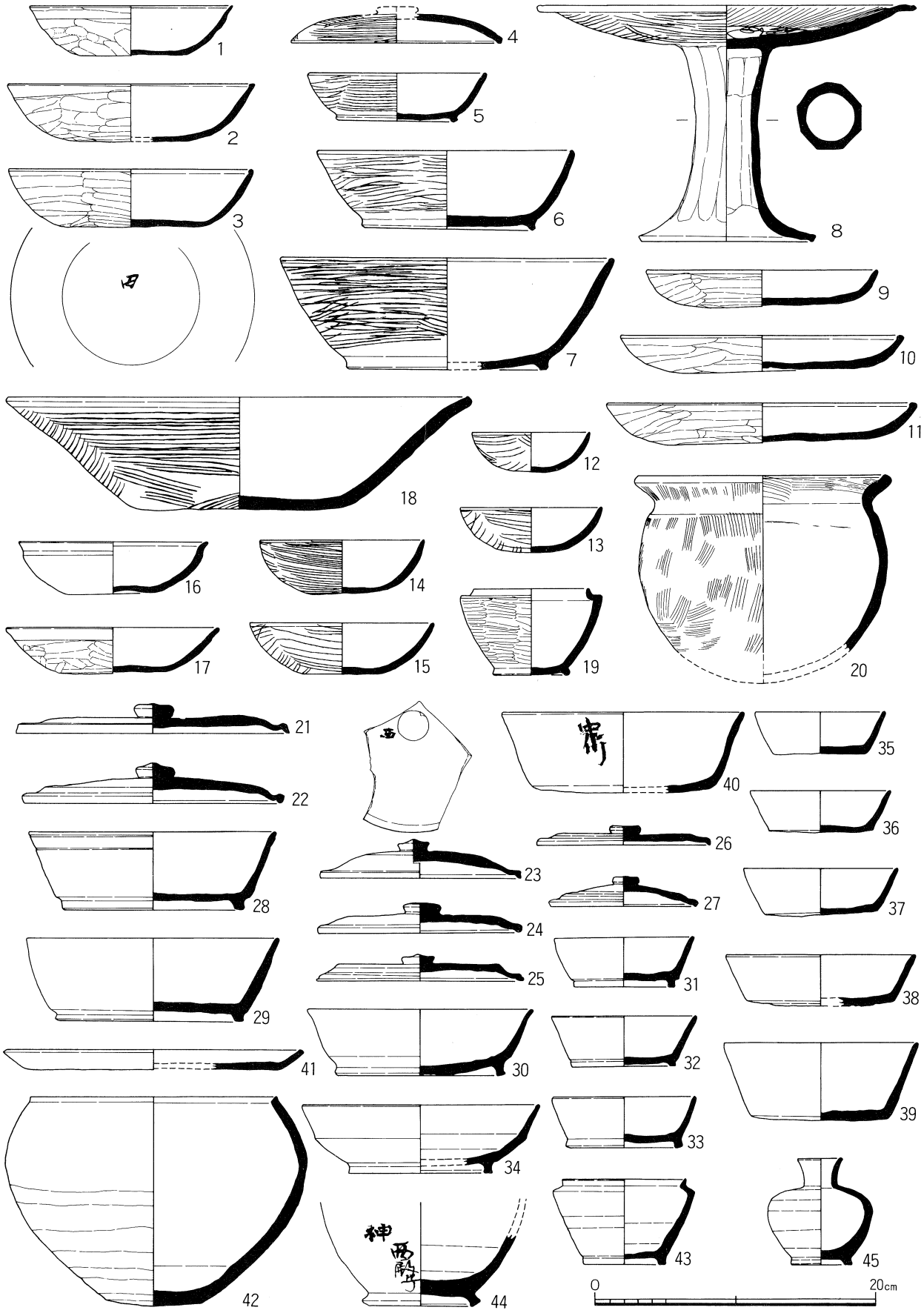


図6　SD11600出土土器　1：4

器蓋のつまみ部。三層の宝塔形で内部は中空となり、火舎の蓋になるものであろう。4はSD11600出土の刻印須恵器。底部外面に「刀」を押すが、これは字の一部である可能性もある。

c　墨書土器

上記以外にもSD11600からは墨書土器が多数出土した。主なものに、①「御」、②「酒」、③「酒司」、④「西宅」、⑤「益頭」、⑥「四日大風／□廿七」、⑧「養」がある。このうち、⑥は、日記風の記述であり、土器の墨書としては非常に珍しい例である。　（玉田芳英）

B　木製品（図8）

今回出土した木製品の内訳は表2のとおり。以下、保存状態の良好な製品について述べる。

1・2は絵馬である。いずれもSK16738から出土した。ともに板状の材の表面をやりがんな・刀子等で削った後、墨で馬を描いている。1は右向き、縦11.3cm、横18.6cm、厚さ0.7cm。2は左向き、縦12.0cm、横14.5cm、厚さ0.4cm。いずれも裸馬で左前脚を上げている。彩色等は肉眼では確認できない。また、穿孔等もなされていない。絵馬は宮内では初めての出土。

3は舟形。とも側を欠損する。底部に左右対称に並ぶ9つの小孔が穿孔されている。SD3050

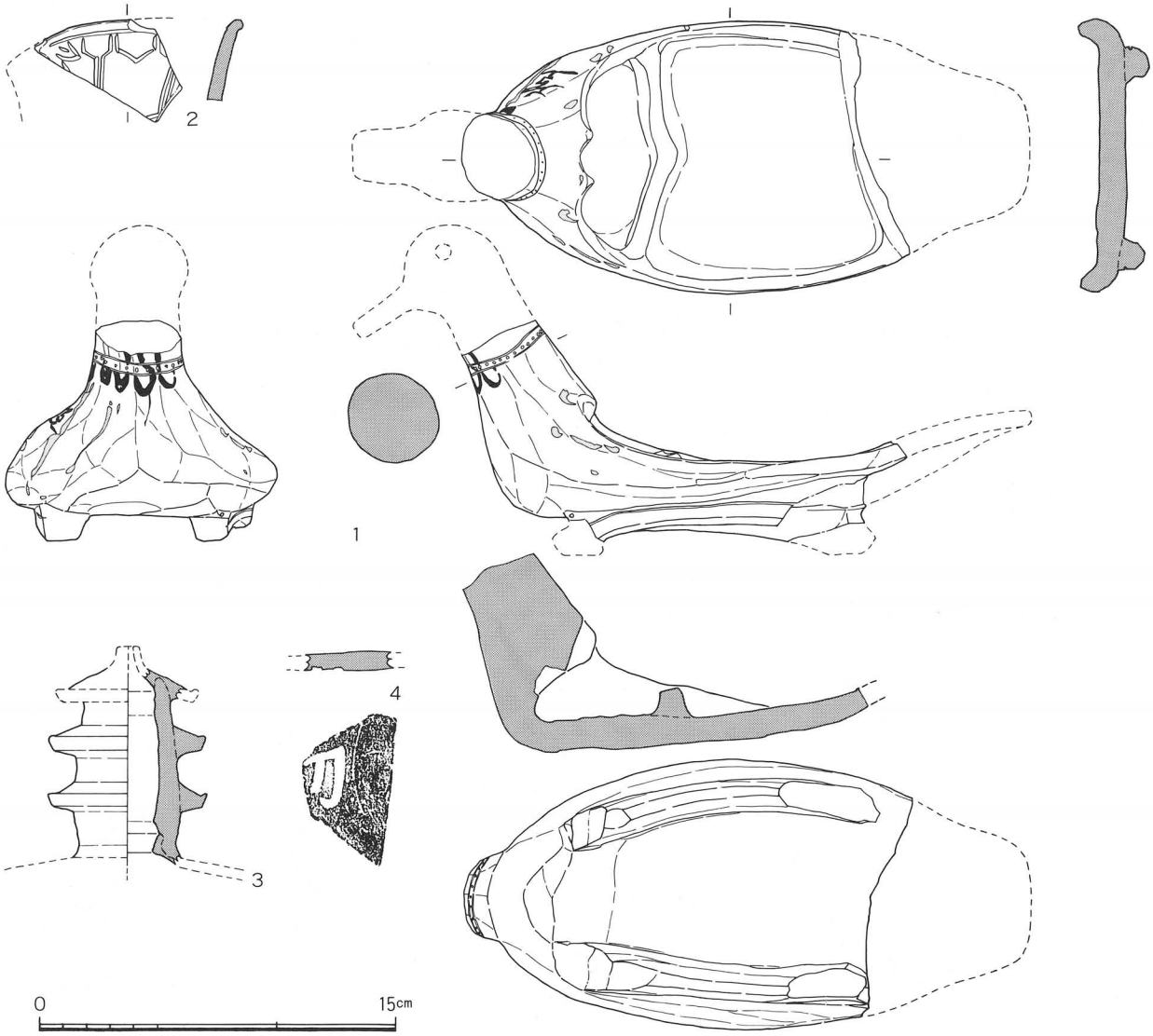


図7　SD11600出土特殊土製品類　1：3

出土。現存長9.2cm、幅7.0cm。

4・5は正面全身人形。4は小さな三角形の切取りで腕・腰を表現する。頭部の墨書は網の冠を示しているものか。下半身を欠損する。SD11600出土。現存長9.2cm、幅2.4cm、厚さ0.2cm。5は比較的大形のもの。下半身は腐食がすすむ。手は切込みによる表現である。SD16742出土。現存長26.5cm、幅4.0cm、厚さ0.3cm。

6は斎串。上下端および左側縁を破損する。両側縁上部で斜めに切込みが施される。SD11600出土。現存長16.5cm、幅2.2cm、厚さ0.2cm。

7は刀子柄。縦に2つに割れた片側が出土した。端部の一方がやや狭くなる。狭いほうの端部はやや欠損し、金具の装着痕らしい帯状のアタリがある。両端に茎孔が開く。茎孔内には焼き込みによる変色が見られる。SD11600出土。長さ15.2cm、幅2.5cm。

8は木釘。大形で使用痕も見られないことから、実用品ではなく、木型と考えられる。SD11600出土。長さ16.3cm、幅2.0cm。

9は栓。端部がやや腐食するほかは、ほぼ完形である。段部に刀子による加工痕が残る。SD11600出土。長さ9.5cm、径3.0cm。

10は檜扇。上端が平端の骨4枚と尖端の骨2枚が一括して出土した。また綴り孔の位置も骨によって異なる。下端は破損する。平端の骨の1枚には短鮑の墨書が残る。木簡を再利用しているらしい。SD11600出土。最大のもので幅3.0cm、厚さ0.2cm。

11は独楽。芯持ち材を利用する。上面の中央が凹む。SD11600出土。径2.8cm、高さ3.7cm。

12は不明木製品。全面を刀子で削り、断面蒲鉾形で、先細りの形状に仕上げたもの。裏面の平坦部に幅約5mm、深さ約3mmの溝を斜めに刻む。比較的丁寧なつくりである。SD11600出土。長さ7.2cm、幅1.7cm。

13は挽物皿。破損して出土したが最大径22.5cm程度に復元できる。全体に腐食が進み、表面の凸凹が激しい。SD11600出土。

今回の調査では造酒司内からの木器の出土は極めて少なかったが、溝SD3050からは舟形が出土しており、造酒司内の祭祀が確認された。

SD11600とSD16742から比較的多数の木器が出土したが、その内容は箆状品、板状品、曲物、部材など日常雑具が多数を占める。宮東大溝SD2700のように漆器や形代など多種多様な木製

表2　第250・259次調査出土木製品集計表

	棒状品	板状品	箆状品	部材	曲物底板	刳物	逸物	人形	鳥形	舟形	斎串	絵馬	檜扇	櫛	独楽	木釘	鎌柄	工具柄	杭	楔	栓	不明点
SD3050										1												
SD16733	4			1																1		
SD11600	126	24	25	16	19	1	1	1	1		1		4	3	1	1	1	1	3	1	1	2
SD16742	51	2	1		5			1	1		1											
SK16742												2										

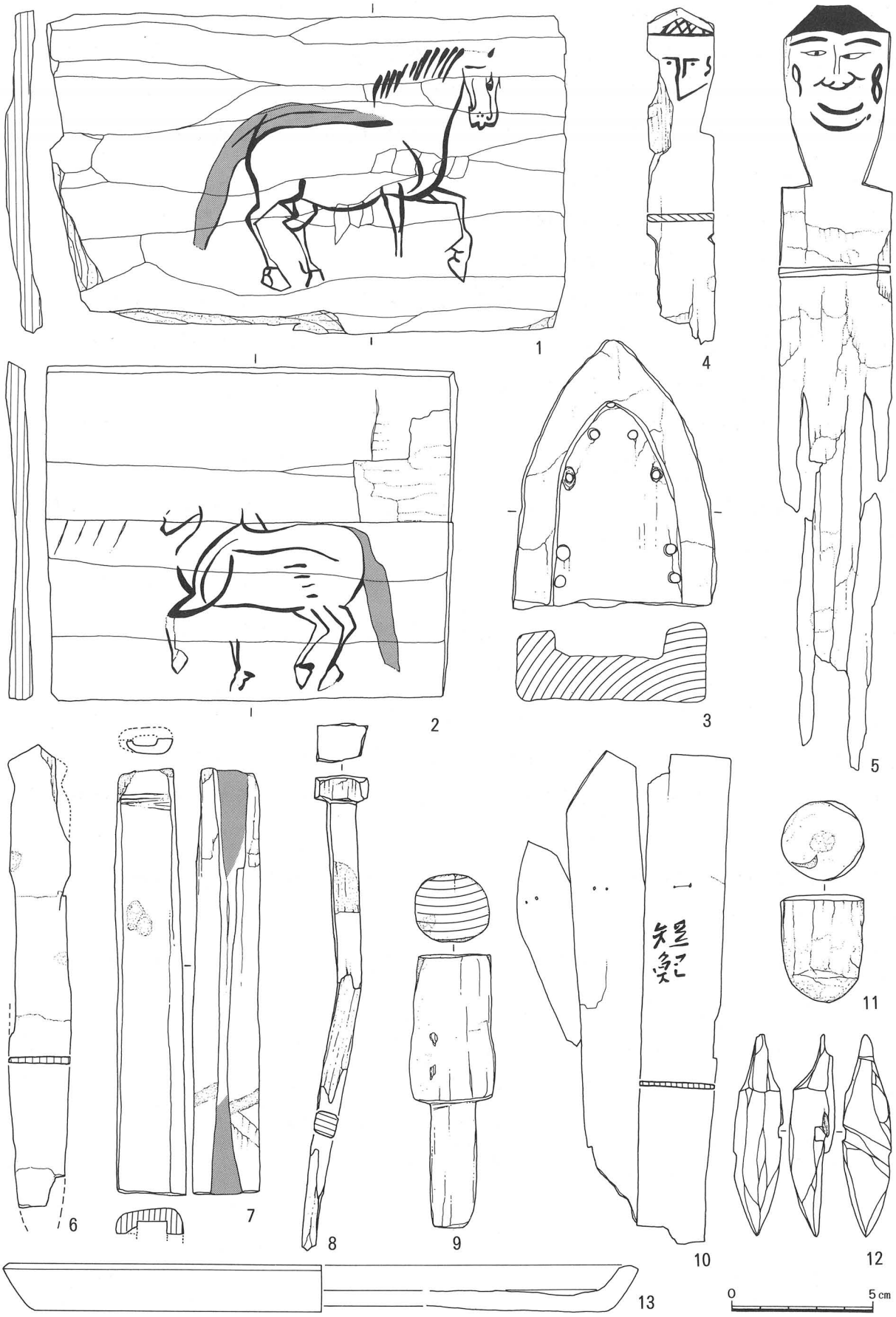


図8　第250・259次調査出土木製品　1：2

品を出土する地点とは、明らかに質的・量的な差がある。今後、宮内の木製品の分布・数量・組成などを把握する作業をさらに進めることにより、各地区の性格を知る上で多くの情報を得ることができよう。今後の課題としたい。　（加藤真二）

C　金属器・石製品（図９）

１は鉸具の板金。刺金・弓金具を装着する折曲げ部で折れ、逆面を欠損する。端部に鋲孔を開ける。鋲孔には鋲の小片が残る。幅4.1cm、厚さ0.1cm。SD11600出土。

２は巡方裏金具。隅を１ヶ所欠損する。残存する三隅には脚鋲が残る。1.8×2.1cm。SD16742出土。

３・４は青銅製鋲。３は頭が潰れ、扁平になっている。長さ2.0cm、頭部径1.1cm。４は長さ2.2cm、頭部径1.2cm。いずれもSD11600出土。４と同様な鋲頭は、SD16742でも１点出土している。

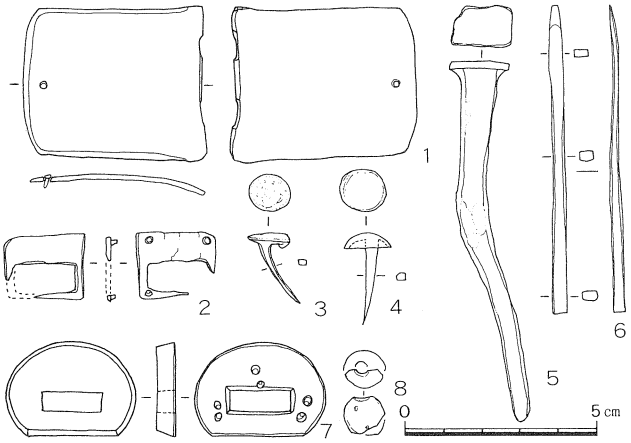


図９　第259次調査出土金属・石製品　１：２

５は、鉄釘。角頭。断面は方形。長さ9.5cm。幅1.6cm。SD16742出土。

６は工具。マイナスドライバー状を呈する。先端が薄く、鋭利になっている。鑿の一種か。長さ8.2cm、幅0.4cm。SD11600出土。

７は石製丸鞆。装着用の２孔１単位の潜り穴が３カ所裏面に開けられている。縦2.5cm、横3.4cm、厚さ0.5cm。SD16742出土。

８はガラス小玉。緑色で約半分を欠損している。表面に細かいひびが多数入る。径1.1cm。宮内道路上の近世溝の埋土に混入。

このほか、SD11600から和同開珎・神功開寶、これを覆うバラス層とその直上から隆平永寶・富寿神寶が出土した。　（加藤真二）

D　瓦塼類

第250次・第259次調査ともに大量の瓦塼類が出土した。内訳は表３・４に示した。特に第259次調査区のSD3030とSD16746では、築地塀の落下瓦がまとまって出土した。　（臼杵　勲）

表３　第250次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦 型式	点数	軒平瓦 型式	点数	丸瓦	
6133A	3	6654A	1	重量	361.0kg
C	4	6664C	1	点数	3,194
6135A	3	K	1	平瓦	
?	5	6688A	3	重量	886.6kg
6140A	1	6721A	7	点数	8,294
6160A	1	C	3	塼	
6282B	7	D	1	重量	64.0kg
C	4	?	6	点数	94
Eb	1	6732A	4	凝灰岩	
G	2	?	2	重量	2.5kg
?	5	6755A	1	点数	5
6314Ca	1	型式不明	7		
型式不明	13			道具・その他	
軒丸瓦計	50	軒平瓦計	37	刻印平「理」	1
				刻印平「修」	3

表４　第259次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦 型式	点数	型式	点数	軒平瓦 型式	点数	型式	点数
6010A	2	6282E	1	6572A	1	6721A	15
6131A	2	G	7	6641C	2	C	57
6133A	2	?	15	6643E	1	D	1
B	2	6284C	1	6644L	1	E	4
C	1	E	1	6663A	2	F	1
D	2	6296A	2	B	1	G	1
J	1	6301B	1	C	2	I	3
K	3	6304B	1	?	2	?	11
?	3	D	1	6664C	2	6732A	8
6134A	1	?	1	D	1	C	3
6135A	23	6307A	1	F	2	?	1
B	4	6308A	1	K	1	6755A	11
E	5	B	3	L	1	6801A	1
?	1	D	2	6681B	2	型式不明	10
6144A	1	N	1	6682A	1	中世	1
6160A	3	?	1	6685E	1		
6225A	3	6311A	1	6688A	13		
C	1	B	2	6689A	3		
6235A	1	6313C	1	6691A	3		
6274A	1	6314A	2	6694A	2		
6278B	1	C	1	6695A	1		
6281B	1	型式不明	18	6702E	1		
6282B	47	中世	4	6716A	1		
C	11	その他	1	6719A	3		
			192				178

丸瓦	
重量	1515.0kg
点数	11,411
平瓦	
重量	3,256.6kg
点数	26,441
塼	
重量	376.3kg
点数	617
凝灰岩	
重量	0.8kg
点数	1
道具・その他	
鬼瓦	7
刻印平「里」	4
「矣」	1
「真依」	1
「甘」	1
「人」	1
「修」	1
「古」	1
「中」	1
「真」	1
「神人」	1
「乙万呂」	1
刻印丸	1
隅切平	1
その他	5

E 木簡・漆紙文書

a 第250次調査

南北溝SD3031から１点、南北溝SD16733から１点の木簡が出土した。

SD3031出土

① 丹後国加佐郡太郷□ □ (174)・23・4 039

SD16733出土

② □[鹿ヵ] □郡上郷□□□□ (127)・17・7 039

丹波国何鹿郡か。

b 第259次調査

宮内道路SF11580の南側溝SD11600から木簡約2500点（うち削屑約2200点）と漆紙文書１点、道路を横切る南北溝SD16742から木簡約50点（うち削屑約30点）が出土した。詳細については現在整理中であるが、これまでに確認した主なものについて釈文を掲げる。

SD11600出土木簡

①・主膳監解 申宿侍二人 高橋山守 安都都万呂

・ 十一月廿二日秦一万 327・37・3 011

②・□[膳監ヵ] □□解 申宿侍三人 秦一万 安都都万呂 多米県麻呂

・ 十一月廿三日秦一万 360・40・4 011

③ 主馬署解 (69)・(17)・1 081

④・縫 御服所請鯵壱拾陸隻 小鰯一升 安倍庭女 都努稗田 石川尾張 安倍藤子 已上四人日料依命婦

・宣所請如件 五月廿二日勝安麻呂 別当史生阿閇 326・32・3 011

⑤・綾所請醤鰯漆合人七口料四月十日別当物部常益

・「行少属三嶋大調」（コノ他削リ残リノ墨痕アリ） 219・32・3 011

⑥・御贖所請柏拾把 五月十三日酒部宅継

・「行 林浦海」 270・30・3 011

⑦　　為焼皮并宍塗所請如件
・○ 請塩壱斗　　五月七日

・○ 「判少進安倍　少属三嶋」「大調」　242•32•3 011

⑧　人給所請骨海藻弐升［滑］官人御料　六月四日　235•35•4 011

⑨・衛士四人給夕食［　］
・判大進　廿三日　小□　(144)•28•2 081

⑩　伊豆国那賀郡那珂郷　戸主矢田部人成口　宇遅部得足　調麁堅魚拾壱斤拾両＝

＝延暦元年十月十日
専当郡司擬領外正七位上膳臣山守

308•32•4 031

⑪・讃岐国山郡三谷郷凡直小野□［田脱ヵ］
・　延暦三年四月十二日　(94)•17•3 019

年紀の記載としては、⑩の延暦元年(782)、⑪の延暦３年（784）があり、長岡京遷都（延暦３年11月）直前の年紀を示す。

文書木簡は内容上２つのグループに分けられる。第一のものは、春宮坊に対して被管官司から出された解である（①・②・③)。①・②はいずれも主膳監からの宿直報告であるが、複数の被管官司の解がみえるので、これらは春宮坊本体から廃棄された可能性が高い。奈良時代末の皇太子としては他戸・山部（後の桓武天皇)・早良の３親王がいるが、比定についてはなお検討を要する。第二のものとして、「所」からの食料・食膳具請求文書がある（④～⑨)。日下に別当などの名が記され、裏に四等官などの判が加えられている。その所属する官司は、判官、主典の表記が「進」「属」であることから、職クラスであることがわかる。「林浦海」は『続日本紀』延暦４年６月辛巳条に皇后宮少属としてみえ、「少進安倍」は同日条にみえる皇后宮少進安倍広津麻呂と一致する。以上のことから、これらの「所」は桓武天皇の皇后藤原乙牟漏（延暦２年４月18日立后）の皇后宮職の下部組織である可能性がある。

SD11600出土漆紙文書

□十二

［伍ヵ］
□拾参歩　得一町一段百八十

段佰廿参歩　損二
得九段

□拾肆歩　損三
得二段二百五十二

拾伍歩　損二
得一町五段一

損二

漆付着面を外側に四ツ折にして廃棄されていたが、展開すると直径約16㎝の円形に復原できる。墨痕は６行、52文字確認できる。行間は21㎜、字の大きさは本文で約10㎜～８㎜四方、双行部で約９㎜四方である。縦横の界線が確認されるが、界幅は現状では測定が困難である。本文は楷書体で大数字を、双行部は行書体で小数字を用いる。界線の存在、字体（楷書・大数字）、宮域内から出土、などの条件から、諸国からの京進文書と考えてよかろう。

内容は田積を列記し、それぞれの下に双行で「損」（損田）「得」（得田）の内訳を記す。得田は町段歩単位で田積を記すが、損田は「二」「三」のみしか記載がなく、損率（二分・三分）の意味であろう。現存する帳簿の中では、天平12年遠江国浜名郡輸租帳（正倉院文書正集16）の損戸の夾名部が類似した形態と内容をもち、延喜主計式租帳条の記載もほぼ同様である。以上のことから、本文書は一応租帳様文書としておくことができる。

ｃ．小結

第259次調査で春宮坊関係の木簡が出土したことで、奈良時代末には春宮坊がこの調査区付近に存在したと推定できる。かつて第32次調査において、平城宮東南隅のSD3410・1250・4951から今回のものと類似する内容の木簡が出土し、また、第104次調査でも、SD4951の上流部に当たると考えられるSD3236から同様の木簡が出土している。このことから、これらの溝の上流地域に春宮坊が所在すると推定されていたが（『平城宮木簡３（解説）』1981年）、今回の調査でその可能性がさらに高まった。しかし、具体的に春宮坊に比定し得る建物の遺構が検出されたわけではなく、その位置については今後の調査成果を待って考える必要がある。

また、藤原乙牟漏の皇后宮職関係の木簡が出土したことで、皇后宮職の少なくとも一部の機関も今回調査区付近にあったことが窺える。因みに、『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』（1991年）では、光仁天皇の皇后井上内親王や桓武天皇の皇后藤原乙牟漏の宮は内裏の内部に営まれたと推定されており、奈良時代末の皇后宮のあり方については、春宮坊関係木簡と皇后宮職関係木簡が共伴したことの意味も含めて、なお今後検討すべき課題である。また、これらの木簡は皇后

宮職の下部組織としての「所」の具体像を窺うことのできる資料であり、今後他の文献資料との比較を踏まえた検討が必要である。（古尾谷知浩）

まとめ

今回の調査により、ほぼ造酒司地区の西半部の調査が終了し、遺構の状況が明らかとなった。特に、南門・南面築地の検出により、当地区の南北長が420尺と確定したことは重要な成果である。これは隣接する塼積基壇官衙と一致する。しかし、東西長については、不確定要素が多く確定するにいたらず、課題を残した。また、西半部には整然とした建物配置が見られず、正殿にあたる建物も存在していない。これは、宮内官衙ではむしろ異例であるといえよう。西半部が醸造の作業域であったとすると、東半部に正殿を中心とする正庁域が存在したかどうかも、今後の調査で明らかにすべき点である。

宮内道路の南側溝からは、奈良時代末頃の春宮坊・皇后宮職に関連する木簡が出土し、近辺にこれらの機関が存在した可能性が高まった。これらの具体的な位置や様相も今後の調査で明らかにされよう。（臼杵　勲）

Ⅰ－2　第二次朝堂院東第六堂の調査　　第261次

1　はじめに

第二次朝堂院地区の東半分については、これまでに第一堂から第五堂までの朝堂(第161•173•203•213•238次)と、朝堂にはさまれた空閑地である朝庭部(第163•169•188次)の継続的な発掘調査を行なってきた。その結果、第一堂～第五堂のいずれについても、奈良時代前半の掘立柱建物(下層建物)を奈良時代後半に礎石建物(上層建物)に建て替えたことを確認し、各建物の規模と配置関係が判明するとともに、奈良時代を通じてこの地に朝堂が存在していたことが明らかとなっている。

今回の調査は、こうした成果を受けて、未発掘の第六堂を調査してこれまでの想定を確認するとともに、第二次朝堂院地区の調査に一応の終息を与えることを目的としたものである。その結果、想定通りの位置に第六堂の下層、上層建物を検出し、朝堂院の建物配置が確定した。特に下層建物は、上層基壇の削平が著しかったために柱穴を最大限検出することが可能であり、建物構造の詳細を明らかにし得たと共に、建設時期と廂の変遷について新たな知見を得ることができた。調査面積は約2100㎡で、調査期間は1995年10月2日～1996年１月19日である。

2　検出した主な遺構

奈良時代の遺構としては、前半と後半の第六堂各１棟、地覆石の据付溝と抜取溝、足場穴５条、地割り溝１条、掘立柱建物１棟、礫敷の舗装３ヶ所、暗渠２条、及び数基の土坑である。また、古墳時代の遺構も検出し、掘立柱建物１棟、掘立柱塀１条、溝４条、土坑３基、および第238次調査で検出した円墳SX15663の周溝の延長部がある。

調査区の基本的な層序は、上から整備にともなう置土、耕土、床土、暗褐色の遺物包含層であり、地表下約80㎝で整地土に達し、この面が遺構面となる。整地土は２層あり、上層は暗黄褐色粘質土、下層が黄灰色粘質土で、それぞれ上層遺構、下層遺構に対応する整地土であると思われる。黄灰色粘質土の上面には薄い灰色粘土があり、その上面が下層の遺構面となる。

A　奈良時代前半の遺構

SB16800　第六堂の下層建物。上層の整地土と後述する上層建物SB16850の基壇に全面が覆われる。これまでの第二堂～第五堂の調査では上層基壇の保存が比較的良好であったので、下層建物の柱穴は一部を検出していたのとどまるが、SB16850の基壇は大きく削平を受けており、SB16800の全容を明らかにするために、SB16850の基壇外周を壊さない形で５ヶ所にサブトレンチを設定した。SB16800の柱位置はこれまでの第四堂、第五堂の調査成果からあらかじめ想定できたので、東妻とその１間西の柱穴がかかる形で南北トレンチ、SB16850の基壇内では、北側柱と入側柱の柱穴の全体が出る形で１ヶ所、南側柱と入側柱の柱位置が壁にかかる形で１ヶ所、西妻柱の位置にSB16800が四面廂の形式であるかどうかを確認できる形で１ヶ所の３本の東西

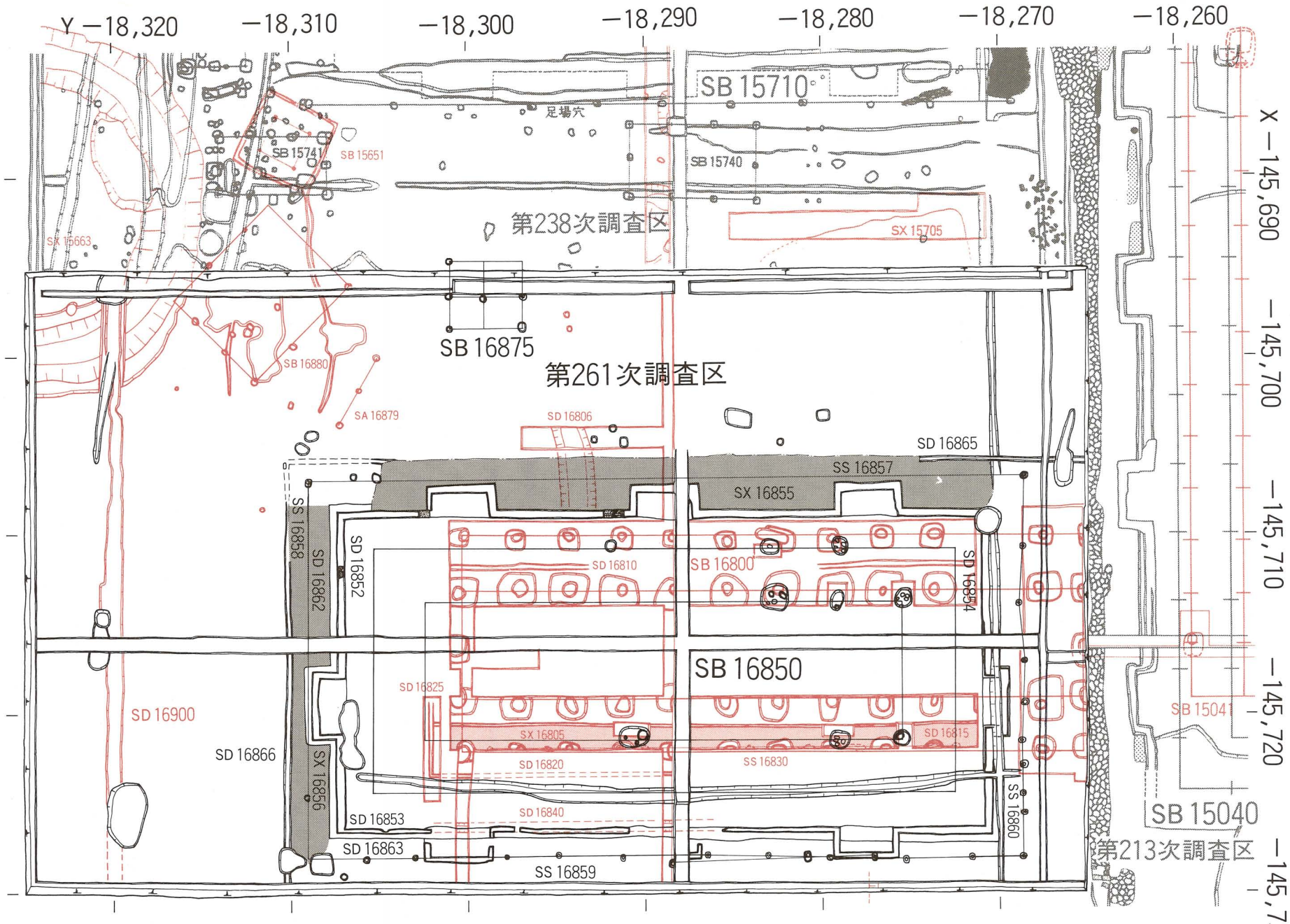


図10　第261次調査遺構平面図　1：300

トレンチを設定し、それぞれ東・北・南・西妻トレンチと呼ぶこととする。また、周囲にめぐる溝の状況を確認するために南トレンチの西に短い南北トレンチを入れ、これを西トレンチとする。その結果、ほぼ全ての柱穴と外周をめぐる溝の一部を検出した。SB16800は桁行12間、梁間４間の掘立柱東西棟建物で、四面廂ではなく、南北に廂が付く。柱間は桁行、梁間ともに10尺で、総長はそれぞれ120尺、40尺となる。第五堂の下層建物SB15700と規模、構造ともに等しい。身舎部分には低い基壇を持ち、基壇高は最も残りの良い部分で約20㎝である。南トレンチでは、廂部に礫敷の硬い舗装面SX16805があり、ここが下層の遺構面となる。北トレンチでは、これに対応する礫敷は見られなかった。SB16800の周囲にも、第三堂、第五堂で確認している細い溝がめぐる。北トレンチでは身舎と廂間にSD16810、南トレンチではSX16805の北にSD16815、西トレンチではSD16815と南廂南方のSD16820、西妻西方の南北溝SD16825を検出した。北トレンチ中央部では柱穴の検出面が深かったためにSD16810は平面では検出できなかったが、南北畦の土層で確認しており、本来は東西に通っているものである。これは東トレンチでも同様である。また、SD16815とSD16825は切り合いがあり、SD16815が早く廃絶する。これらの溝の性格は、SD16810・16815は基壇外装の抜取り溝とも考えられるが、基壇を持たない廂部分の外縁にもめぐるので、雨落溝である可能性が高い。SB16800は、東西の妻をSB15700の東西の妻に、南入側柱を第四堂の下層建物ＳＢ15041の南妻柱にそれぞれ揃える。SB16800とSB15700の間隔は110尺、SB15041との間隔は20尺である。

SB16800の柱穴は、側柱と妻柱が一辺約１～1.5m、入側柱が約1.5～２ｍの隅丸方形で、掘形の深さは約50～100㎝である。これらの柱穴は数ヶ所の断ち割り調査の結果、掘り込む面が異なっていることが確認できた。身舎部分の柱穴は基本的に下層の整地土を施す以前、古墳時代の包含層である基盤面に直接掘形を掘り、柱を立てた後に整地を行ない、基壇土を積む。それに対して廂の柱穴は整地土および礫敷SX16805を切って掘形を掘っている。このこととSD16815・16825の切り合い関係から、第二堂～第六堂の廂の付加は建設時の工程差ではなく、当初身舎だけであった建物に廂を増設したという時期差であることが確定した。柱掘形と下層整地土からは平城宮土器Ｉに属する須恵器、下層基壇土から藤原宮式軒平瓦6561Ａが出土し、従来問題となっていた下層朝堂の建設時期が平城宮遷都時まで遡るであろうことが明確となった。なお、第二堂～第五堂の調査では、下層の整地を行なってから柱穴を掘って柱を立て、基壇土を

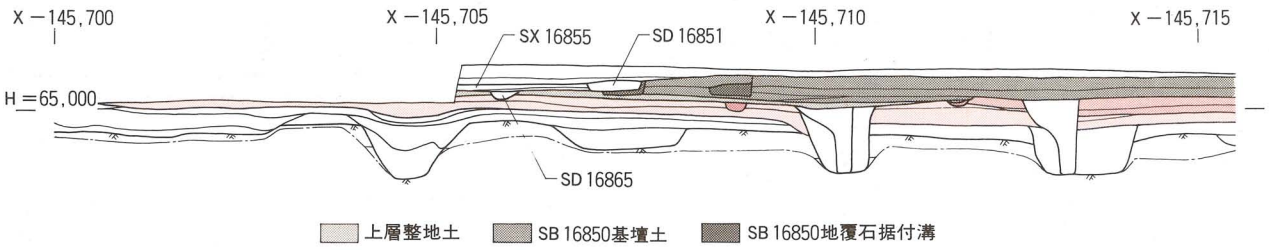


図11　南北畦西壁層位図（１）１：100

積み上げるという所見が得られており、柱穴を掘り、柱を立ててから整地を行なう第六堂とは建設工程に差が認められる。また、西妻柱には3本の丸太を礎盤として用いていた。

南トレンチ南壁では、断割調査の際に足場穴SS16830を検出した。これは入側柱から南方へ10尺の位置にあり、柱間は10尺。検出した足場穴はこの一列のみであるが、未検出のものと合わせ、SB16800の柱穴の四方を囲む形になるものであろう。SS16830は柱穴の上を礫敷SX16805が覆っており、最初に身舎部分を建設した際の足場穴である。

SD16840　SB16800南側柱から南15尺の位置にある東西溝。上層整地土で覆われる。幅約20㎝、深さ約10㎝を測り、断割調査等で一部確認した。調査区西端までは続かないので、SB16800に付随する排水溝の可能性がある。

SD16900　調査区西辺にある南北溝。深さ約10㎝で、約35ｍにわたって検出した。黄褐色の粘質土で人為的に埋められた状況を呈する。調査区南壁の土層観察の結果、下層の整地土の下にもぐるため、平城宮造営時、SB16800の建設時のものであると考えられる。この位置はちょうど第二次朝堂院の南北中軸線上にあたり、これらのことから、SD16900は朝堂院建設時の計画線を示す地割り溝と考えられる。

第二次朝堂院でこうした地割り溝を検出したのは今回が初めてであるが、同様の性格を持つ可能性がある遺構SX13320を、第188次調査で朝堂院の中心にあたる位置に検出している。これは長さ約2ｍ、幅約 0.8ｍ、深さ約1.4ｍの長方形の穴が4個、方位に対して45°傾いて方形に並ぶもので、南には2個の柱穴SX13321が南北に並び、北にも東西に並ぶ柱穴SB13322がある。SX13320には柱を立てた痕跡がなく、その位置から見ても、第二次朝堂院の中心を示す何らかの施設の基礎である可能性がある。今回検出した地割り溝SD16900は、本来SX13320に向けて第二次朝堂院地区を通して掘ったものであろうが、北方は削平されてしまったのであろう。

B　奈良時代後半の遺構

SB16850　第六堂の上層建物で、基壇を持つ礎石建物。今回の調査地は、後世の開墾により大きく削平を受けており、旧地表面には土壇が全く残っていなかった。そのため、基壇の遺存状況が極めて悪く、最も厚い部分で約20㎝残るだけであるが、凝灰岩の切石を用いた地覆石の抜取溝SD16851～16854とその外側をめぐる据付溝SD16861～16864から、第五堂同様、東西37.1ｍ、南北17.1ｍの規模であることが判明した。SD16851には、羽目石を立てるための仕口を持つ地

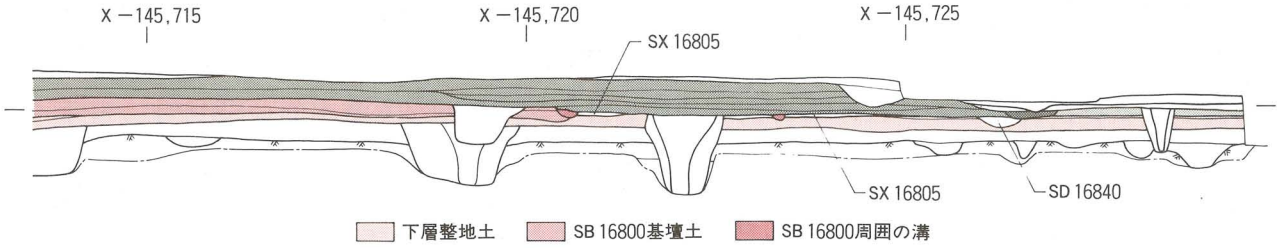


図12　南北畦西壁層位置（2）1：100

覆石が２ヶ所にそのまま残っている。

基壇上の礎石据付穴は、削平のために北側柱で２ヶ所、北、南の入側柱で各３ヶ所の計８ヶ所に、底だけがかろうじて残っていた。河原石の根石が１ヶ所に残り、根石の抜取痕を持つものもある。南側柱と妻柱に関しては全て削平されている。これらの礎石据付穴は第五堂の上層建物SB15710と柱筋を揃え、基壇規模をも考え合わせると、SB16850はSB15710と同じく、桁行９間、梁間４間で、四面に廂が付く建物であったと考えられる。柱間は身舎が桁行、梁間ともに13尺、廂部分が10尺で、桁行総長は111尺、梁間総長は46尺である。

また、SB15710と同様、北面、南面に３ヶ所、東面、西面には１ヶ所にそれぞれ階段があるが、東面、西面の階段は、梁間４間のうち南から２間目に付き、この点だけがSB15710と異なる。東面階段は第四堂の西面南階段に対面する。階段の出は5尺であり、東、北、西面では版築土が残るが、南面は削平され、地覆石の据付溝SD16863と抜取溝SD16853のみを検出した。SD16863は階段の突出部でも曲がらずに基壇南縁に沿って直線的に走り、このことから、基壇の築成は当初長方形に版築土を積み上げてから地覆石の据付溝を掘り、その後に階段を付加したことが判明した。そのため、東、北、西面の階段の版築土は、基壇本体のそれとは質が異なる。この工法は当時の一般的なものと考えられ、第263次調査の薬師寺講堂の発掘でも同様の状況が見られ、かつ階段部にも当初の地覆石を据え付け、それを埋め殺しにしている状況を確認している。

SB16850の基壇の周辺は礫や小砂利を用いて舗装していたと見られ、北面にSX16855、西面にSX16856が残存している。東面、南面については既に削平されていた。SX16855は最初に拳大よりやや小さい礫を敷いた後、小砂利を積んだ状況が確認でき、これはこれまでの調査の所見と一致する。

SX16855の北とSX16856の西には、礫の舗装面の外周に沿って、礫を交えた砂を埋土とする暗渠SD16865・16866がめぐる。SD16865とSD16866の接続部は削平されていたので不明で、本来Ｌ字形に接続していたものであろうが、SD16866が更に北に延び、第五堂の西辺をも流れる可能性は否定できない。SD16865は東流して第一堂～第四堂基壇の西を走る暗渠SD11749に連なり、SD16866は南方の第265次調査区へと続く。

基壇の四周には足場穴SS16857～16860がある。北面のSS16857と西面のSS16858は、礫敷の下にあるために一部の柱穴を検出したにとどまるが、南面のSS16859、東面のSS16860はほぼ全ての柱穴を検出した。第五堂の足場穴の柱穴の配置は、基壇周囲のものも礎石据付穴の四周を囲む形となるが、SS16860の柱穴はSB16850と柱筋を揃える。SS16859も基本的にSB16850と柱筋を揃えるが、階段部の柱穴については階段の突出を避け、やや位置をずらしている。なお、基壇上の足場穴は完全に削平されており、検出することはできなかった。

SB16875　調査区北端中央部にある掘立柱建物。一部の柱穴は削平されているが、第238次調査

で検出した柱穴と合わせ、2間×2間の総柱建物になると思われる。柱間は桁行、梁間ともに7尺。SB15710と SB16850から等距離にあり、上層の時期に属する仮設建物であろう。

C　古墳時代の遺構

SX15663　第238次調査で確認した円墳の周溝の東南部を、調査区西北隅で検出した。幅約5m、深さ約0.5mで、溝中央部が一段深く、肩部はやや浅いテラス状になる。埋土から古墳時代の土師器、埴輪が少量出土した。

SB16880　SX15663の東にある掘立柱建物。第238次調査区でも一部の柱穴を検出しており、3間×3間に復原できる。方位に対して45°傾く。

SA16879　SB16880の東南にある掘立柱塀。2間分検出した。

SD16806　調査区中央部にある斜行溝。断割調査により、一部を検出した。SB16850北の礫敷SX16855はこの溝の部分が窪んでいる。

3　遺　　物

A　瓦塼類

SB16850基壇周辺から主として出土した。出土遺物の大半を占める。表5に集計表を示したが、軒瓦の組合せは6225C－6663Cが主体であり、これまでの調査の所見と等しい。また、SB16800の基壇土からは藤原宮式軒平瓦6561A(図13－1)が出土し、SB16800の建設時期を示すものとして注目される。

B　土器・土製品

SB16800の柱掘形と下層整地土から出土した須恵器杯BⅡ・BⅢを図13に示した。2はSB16800、3～5は下層整地土の出土。2・4の低く偏平な高台はSD1900出土土器に特徴的に見られるものであり、平城宮土器Ⅰに属する。このことによって、SB16800、ひいては下層朝堂の建設時期は平城宮造営時に遡ることが、出土遺物の面からも確定したと言える。他に特筆されるものとしては、SB16800の柱穴や包含層から円面硯が計9点出土している。

また、下層整地土等から7世紀後半の須恵器が出土し、第二次朝堂院地区にあるこの時期の集落がこのあたりまで広がる可能性がある。古墳時代の遺物としては、SB16800調査時の南トレンチ西南隅にある土坑から円筒埴輪がまとまって出土し、SX15663の周溝と、奈良時代の基盤土となる暗褐色をした古墳時代の包含層からも少量の土器、埴輪が出土している。

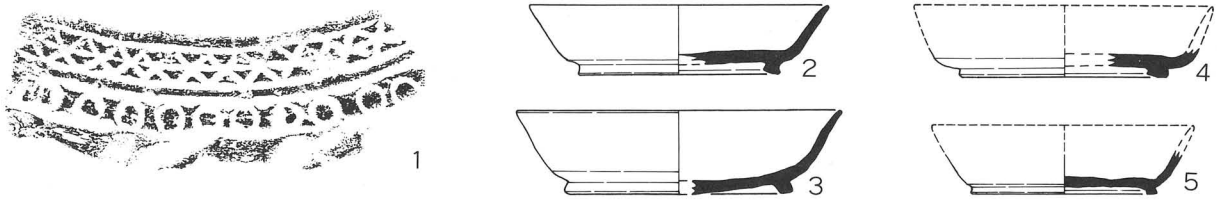


図13　SD16800・下層整地土出土瓦・土器（瓦1：3、土器1：4）

表５　第261次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦			軒平瓦		
形式	種	点数	形式	種	点数
6133	D	5	6561	A	1
	?	2	6663	C	15
6225	C	13	6664	D	1
	L	1	6682	A	1
6282	B	1	6691	A	1
6296	B	1	6694	A	1
6303	B	1	6704	A	1
			型式不明		1
軒丸瓦計		24	軒平瓦計		22

丸瓦	
重量	281.9kg
点数	3,150
平瓦	
重量	638.1kg
点数	6,669
塼	
重量	6.9kg
点数	11
凝灰岩	
重量	11.1kg
点数	56
道具・その他	
鬼瓦	3
隅木蓋瓦	1
刻印平瓦「里」	2
刻印平瓦「日」	1

その他、SB16800の南側柱の柱穴から墨書がある木片が出土した。建築部材の屑と思われ、墨書内容は判読できないが、番付を記したものである可能性がある。

4　まとめ

今回の調査の結果、予想どおりの位置に奈良時代前半、後半の第六堂を検出し、第二次朝堂院の建物配置が確定した。第六堂の下層建物ＳＢ16800は、東、西妻をそれぞれ第五堂の東、西妻に揃え、南入側柱を第四堂の南妻に揃える。上層建物ＳＢ16850は、第五堂との関係は下層と同様で、第四堂の南妻に南側柱を揃えるようになる。この第五堂、第六堂と第四堂との関係における下層と上層との間の差は、下層建物に廂を増設したことによって生じたものである。第二次大極殿院、朝堂院の建物配置については、第四堂の調査の報告(『1991年度平城概報』)と大極殿院の報告書(『平城宮発掘報告ＸⅣ』1992年)で検討がなされてきたが、今回の調査と第265次調査における朝堂院南門の調査成果を加えたものを図14に示したので、参照されたい。

上層遺構に関しては、ＳＢ16850の東西の階段位置が第五堂と異なることと、ＳＢ16850の西辺にも暗渠ＳＤ16866がめぐることが判明した他には、さして新しい知見はない。しかし、下層遺構に関しては、多くの重要な知見が得られた。まず、ＳＢ16800をほぼ全体にわたって平面的に検出できたことで、その構造が視覚的にも明らかとなり、平城宮の建物に関して、重要な一例を提供したと言える。また、南廂部に礫敷ＳＸ16805を初めて検出し、下層建物が身舎のみに基壇を持ち、廂部には基壇がないことと、周囲をめぐる溝の変遷からも廂は当初からあったのではなく、後に増設したものであることが確定した。

また、朝堂院建設時の地割り溝を検出したことも注目される。地割り溝は古代の測量技術の復原では一般的な方法と考えられており、藤原京の条坊道路の設定にともなう例などはあるが、平城宮で遺構として確認したのは初めてである。このことによって、朝堂院の建物配置は計画的に設計、施工されていたことを建設に関する遺構の上からも確認することができ、平城宮造宮時の様子がより具体的な姿で捉えられることとなった。　（玉田芳英）

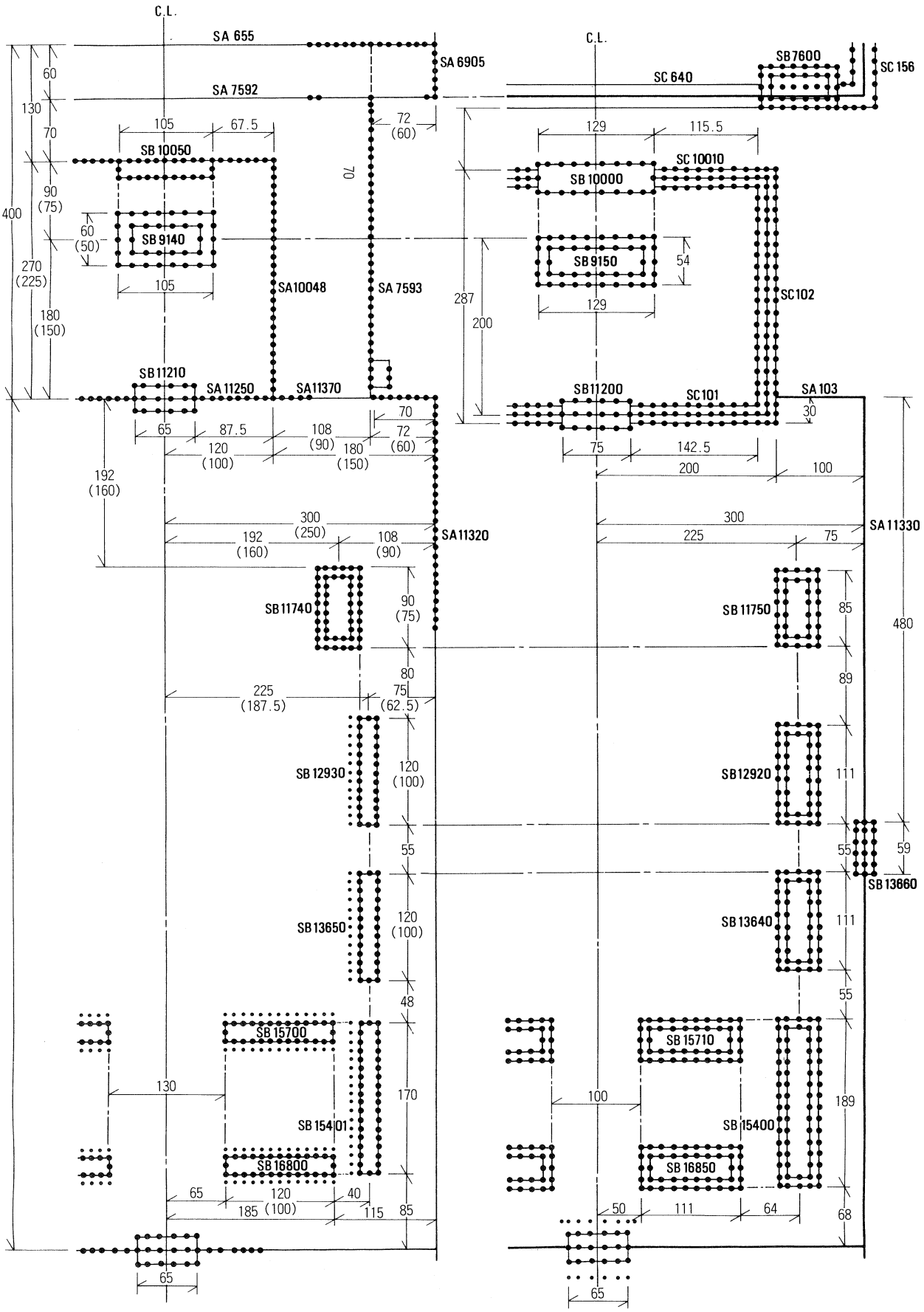


図14　第２次大極殿院・朝堂院地域の建物配置

Ⅰ－3　第一次大極殿の調査　　第262次

調査は第一次大極殿復元設計のための地盤調査に伴うものである。

第一次大極殿については第69・72次調査で階段を含む基壇の北面および南面の地覆石据え付け溝および地覆石抜き取り溝が検出されている。基壇の規模は南北29.5m（100尺）とされ（『平城宮発掘調査報告XI』1981年）、東西については遺構からはその規模を知ることはできないが、53.1m（180尺）と推定されている。

今回の調査は基壇西面の北西隅に近い位置で、基壇位置の確認を目的とした。遺構検出面は現地盤下約30cmの標高72.9m附近である。東西２条の溝は耕作溝で、南北２条の溝が基壇に伴うものである。東側の溝SD01は幅約90cm深さ約12cmで埋土には凝灰岩片・礫が混じる。西側の溝SD02は幅約60cm深さ約５cmである。SD02がSD01を切り込んでおり、SD01が基壇地覆石据え付け溝、SD02が基壇地覆石抜き取り溝と考えられる。この様子は基壇北面の地覆石抜き取り痕跡の状況と似る。北面中央の階段の東西心－18,589.7から90尺西は、－18,616.25（1尺0.295m）から－18,616.34（1尺0.296m）までの間となり、SD01の溝心実測値－18,616.3とほぼ一致する。これは基壇の東西規模を180尺とした推定が正しかったことを示す。また、他の遺構として調査区西辺では径1.4mの柱穴1基があるが中軸線に対称な東側では相当する遺構が見当たらない。さらに調査区南辺では２条の溝にかかる小規模な柱穴が２基検出されている。これらの性格の解明は今後の調査の課題であろう。　　（内田和伸）

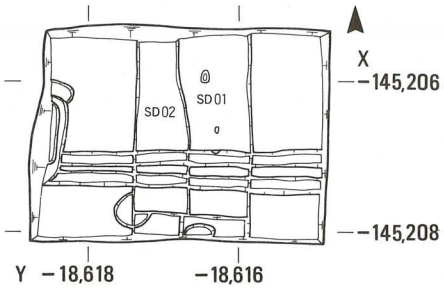


図15　第262次調査遺構平面図　1：100

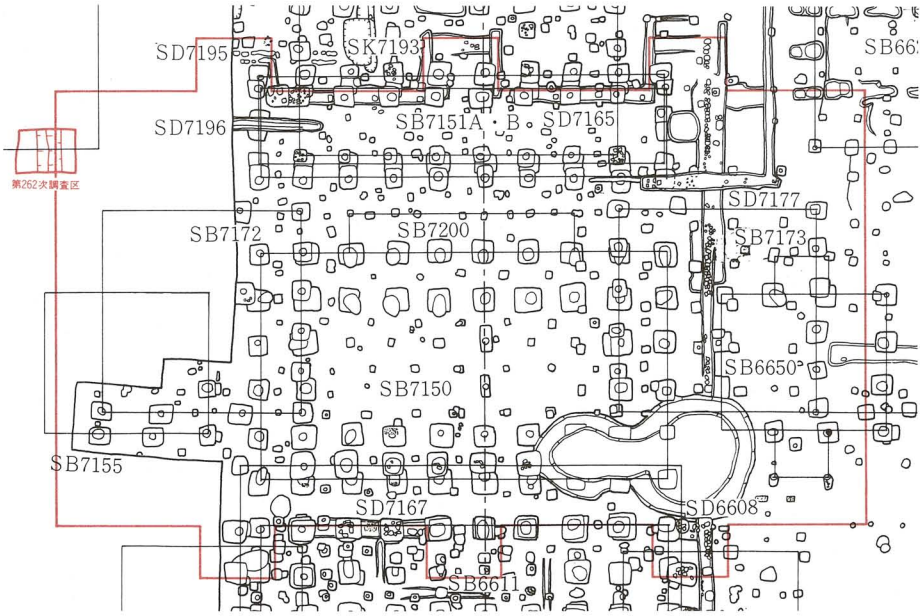


図16　第１次大極殿基壇復元図　1：500

Ⅰ－4　第二次朝堂院南門の調査　　第265次

1　はじめに

第265次調査は、いわゆる第二次朝堂院（東区朝堂院）の南門と、その東西に延びる朝堂院南限施設の検出を主な目的とするものである。第261次調査区（東第六堂）の南西に一部接する形で、南北約35m、東西約58mの約2030㎡の調査区を設定した。調査は1996年１月９日に開始し1996年５月13日に終了した。以下の記述は４月末日段階での成果であることをお断りしておく。

明治時代の地形図によると、朝堂院南限想定位置には里道が東西に走り、南門想定位置で門基壇の張り出しに対応してやや南に迂回している。調査前、既に朝堂院南限を想定した整備が行われており、朝堂院側との比高差約0.5m、朝集院側との比高差約1.2mに及ぶ築地基壇状の高まりが調査区を東西に横切っていた。ここには6600ボルトの高圧線が埋設されており、調査区はこれにより南北に分断されるため、南半から発掘調査に着手し、この高圧線を調査の終了した第261次・第213次調査区内の埋め戻し土中に迂回させた後、北半の調査を行った。

2　基本層序

調査区は計５枚の旧水田にまたがっていた。朝堂院内にあたる里道北側の東西２枚の水田は基本的には同一の層序を示し、表土約５㎝、整備盛土30～40㎝、耕土10～20㎝、床土5～10㎝、奈良時代の遺物包含層である茶褐色ないし灰褐色粘質土5～10㎝と続き、その直下の現地表面から約70～80㎝で整地土の橙灰褐色粘質土、または礫混じり褐灰色粘質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は、64.9～65.2mで門の真北が高く、西と東に緩やかに傾斜している。

朝堂院内の整地（30～40㎝）は大きく３段階に分かれる。まず橙灰褐色粘質土（10～15㎝）を入れて凸凹を平坦にしてから灰色粘質土（５㎝）を薄く積んでいる（第一次整地。平城遷都当初）。ついで橙灰色粘質土（10㎝）を積んでいる（第二次整地、奈良時代後半。門より西には第二次整地はみられない）。礫混じり灰褐色粘質土（10㎝）は、朝堂院南限から北へ約６ｍの間に限って見られ、第二次整地土の上に乗る（第三次整地。奈良時代末期）。礎石建ちの門や築地塀の補修に伴うものであろう。整地は南及び東ほど厚くなり、調査区東端の築地の際では50㎝近くに達する。整地土の下には、古墳時代の遺物を含む暗灰色粘質土が20～30㎝あり、地山の茶褐色粘土に達する。

朝集院側の朝堂院南門南西の水田は、表土約５㎝、整備盛土約20㎝、耕土20～30㎝、床土約5～10㎝、礫や瓦を含む茶褐色粘質土の遺物包含層約５㎝があり、その下に奈良時代後半の整地土と考えられる礫を多量に含む灰褐色粘質土5～10㎝があり、現地表面から50～70㎝で奈良時代前半の整地土である暗灰褐色砂質粘土に達する。遺構は基本的にはこの層の上面で検出したが、一部は茶灰褐色砂質土の古墳時代の遺物包含層、橙褐色砂質土の地山面と多様である。

遺構検出面の標高は64.4～64.6mで、南に向けて緩やかに傾斜している。

南門南東側の水田は、表土約5cm、整備盛土約30～40cm、耕土約10cm、暗灰色・灰褐色・暗茶灰褐色の砂質土が約30cmがあり、奈良時代後半の整地土である礫を多量に含む灰色ないし褐灰色砂質土5～10cmと続く。遺構はこの層の上面、またはこの層直下の現地表面下80～90cmの褐色混じり暗灰色粘質土の奈良時代前半の整地土の上面で検出した。遺構検出面の標高は64.2～64.4mである。なお、調査区南東隅の部分では、耕土の下に茶灰褐色砂質粘土の床土10～25cm、暗灰色砂質土20cm、茶褐色粘質土の遺物包含層5～10cm、褐色混じり暗灰色粘質土の整地土5～10cmと続き、現地表下100～110cmで地山の青灰褐色粘土に達する。遺構は基本的には地山面で検出した。遺構検出面の標高は約64.1mである。

3　遺構

検出した主な遺構は、朝堂院南門（掘立柱の門を礎石建ちの門に建て替え）とその東西に延びる朝堂院南限施設（掘立柱塀を築地塀に建て替え）、及びこれらに伴う雨落溝、門の外側南東の位置の朝集院内に建つ基壇建物1棟、門南面の東西塀1条と南北柱列2条、朝集院北部を横切る東西溝1条、古墳時代の溝1条、門基壇上の中・近世の土坑群などである。このうち、奈良時代の遺構は大きく上層と下層の2時期に分けられる。

下層の遺構

東区朝堂院南門SB01　平城宮造営当初に建てられた奈良時代前半の朝堂院南門。桁行5間、梁間2間の掘立柱の東西棟総柱建物で、掘立柱塀SA02・03の基壇より約20cm高い基壇を伴う。柱間は桁行が両端の間が10尺、中央3間が15尺、梁間は10尺等間。単層切妻の門とみるのが穏当な推定であろうが、重層門の可能性もある。上層の門の基壇土が残っている部分では柱穴は見

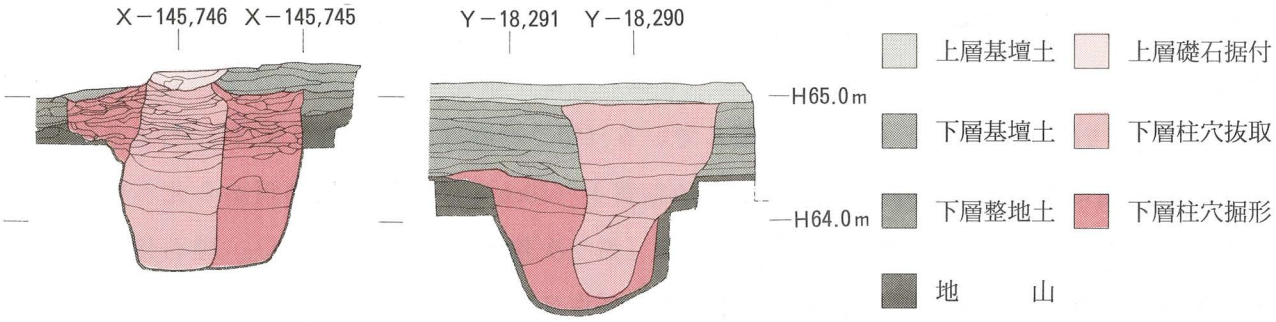


図17　SB01・SA03柱穴断面図　1：60

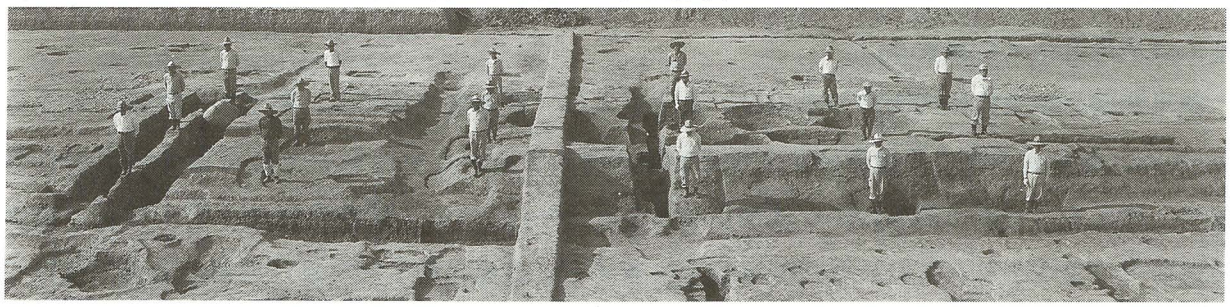


図18　下層朝堂院南門SB01全景

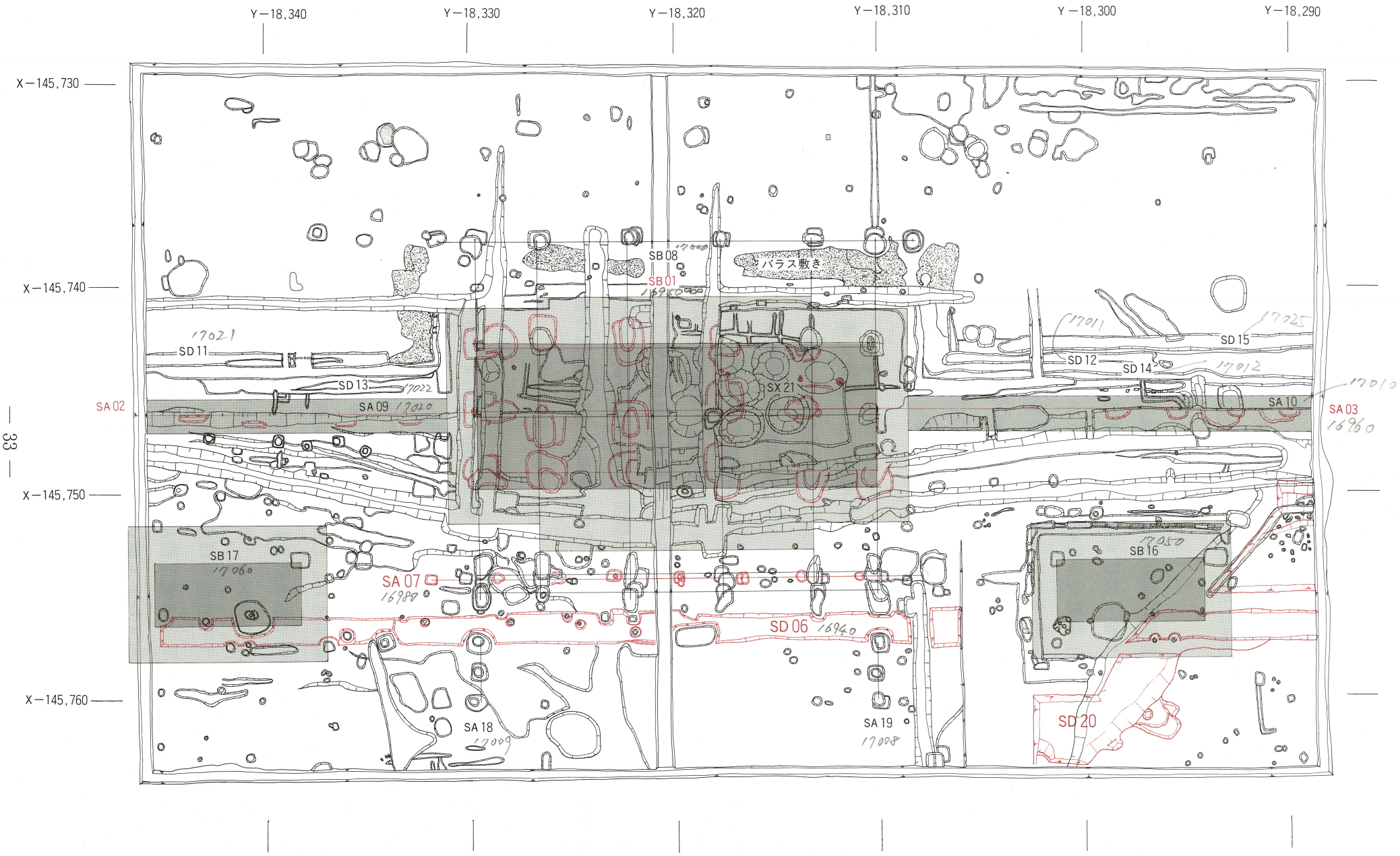


図19　第265次調査遺構平面図　1：250

えない。また緩い傾斜面に水平に基壇を造成してから掘形を掘って柱を立てた後、さらに基壇土を積んでいるので、下層の門自体の基壇土が残っている箇所では抜取穴は見えるが掘形は見えない。掘形は一辺約2mに及ぶ隅丸方形で、下層基壇面からの深さは最大1.7mに及ぶ。なお、基壇の出や外装は不明。

掘立柱塀SA02・03　下層の門SB01の時期の朝堂院南限を画する基壇をもつ掘立柱東西塀。地山の緩い傾斜面に掘形を掘って柱を立てた後、基壇を造成している。基壇の出は北半で約1m、基壇の高さは約50cm。上層築地塀SA09・10の積土が残っているため、部分的に確認できたに留まり、確認できたものも基本的には柱抜取穴の南半のみである。柱間はSB01の妻柱からSA02が西へ11.5尺・11.5尺・15尺、10尺、SA03が東へ39尺（12尺・12尺・15尺か）・9.5尺・9.5尺・9.5尺で、不揃いである。柱穴の全体を確認したわけではないので、柱位置には未確定要素が大きく、正確な柱間の推定は今後の検討を要する。なお、柱間15尺の部分には脇門が開いていた可能性もある。

雨落溝SD04・05　掘立柱塀SA02・03の北雨落溝で、基壇に接する。幅約80cm、深さ約30～50cm。溝心とSA02・03の心との間隔は約1.5m。調査区の東西両端の排水溝の断面で確認したのみで、門の周囲をどうめぐるかは未確認。なお、SA02・03の南雨落溝は削平され残っていない。

東西溝SD06　朝集院北端を東西に横切る素掘りの東西溝。幅約1.5m、深さは現状で約60cm。朝堂院南限から約10.5mの位置にある。若干の瓦・須恵器・木屑が出土した。方位にきちんと乗ること、溝の壁がほぼ垂直に立ち上がり崩れた痕跡が見られないことなどからみて、平城宮造営当初の整地の直後に掘られ、短期間のうちに埋め戻されたと思われる。何らかの区画溝か。

東西塀SA07　門南面で側柱から15尺の位置にある柱間10尺等間の東西塀で、8間分検出した。門南面の閉塞施設か。

上層の遺構

東区朝堂院南門SB08　奈良時代前半の朝堂院南門SB01を梁間方向の柱間のみ12尺等間に変えて礎石建ちに建て替えた奈良時代後半の朝堂院南門。後述のように、柱間寸法や基壇の出などから単層切妻の可能性が高い。SB01の柱を抜き取った後、その抜取穴を版築によって丁寧に埋めた上で、さらに土を積んで基壇を造成して建てられているが、礎石据付掘形の底がかろうじて検出できる程度まで削平され、しかも基壇中央部は中近世の土坑群SX21によって大きく破壊されている。礎石は全て抜き取られ、わずかに一つが基壇上の礎石落し込み穴に残る。

SB08の北側には、幅約60～80cm、深さ約10cmの東西溝があり、溝中に凝灰岩が点在する。これは門基壇の地覆石とその外側の雨落溝の底石や側石を抜き取った痕跡と考えられる。従って、門の基壇外装は凝灰岩による壇正積基壇、また雨落溝も凝灰岩を用いたものであろう。基壇の出は南北が6尺、東西が5尺と不揃いであり、入母屋や寄棟には復原しがたい。基壇規模は東西22.3m、南北10.7m。

この門の北側の溝は、西から二本目の柱の位置でカギの手に曲がって約60㎝北に張り出す。これは階段の出に伴うもので、北側では中央3間に2段ほどの階段があったと考えられる。門の南側には階段の痕跡が残っていないが、北側と同じく中央3間に階段があり、それは門の北と南の現状の段差（約80㎝）から本来の基壇高を復原して5段程度と考えてよかろう。

門基壇の東西両端にも凝灰岩を含む南北溝があり、門基壇の地覆石の抜取（一部は据付）痕跡と考えられるが、この溝は棟通り位置で途切れる。これはここに築地塀が取り付くためで、門の基壇を造った後、築地塀SA09・10の取付部分をコの字型にカットして築地塀を取付けていると思われる。なお、門東面の築地塀SA10の南側の溝中には門基壇の地覆石が1個ほぼ原位置に残っている。

門の南北両面には掘立柱の土庇の柱穴がある。全て上層の門SB08に伴うもので、土庇の柱間からSB08の身舎の桁行の柱間が確定できる。

このうち北庇は北側柱列から17尺の位置にある。なお、北庇の両側で基壇東西両端の北延長上の位置にも庇と同規模の柱穴があり、庇の隅の軒先の垂れ下がりを防ぐための支柱と考えられる。これに対応する基壇上側柱筋にも同種の支柱（礎石建ち）の置かれていた可能性がある。

SB08の基壇と北庇の間には拳大のバラスが敷き詰めてある。上層遺構造成時の整地土上に東西溝を掘って暗灰色の砂質土を入れ、北庇の柱を立てた後にバラスを敷いて溝を埋めている。庇の建設とバラス敷きとは一連の工程と考えられ、バラス敷きは後述のようにSB08西側の築地塀SA09の北雨落溝SD11の上にまで延びているから、北庇の建設はSB08建設当初のものではなく、後に付設されたものであろう。このことは、北庇の掘形が上層の南北溝SD22より新しいことからも確認できる。

これに対し南庇は様子が異なる。南庇には2時期あって南側柱列から14尺離れた古いものと、17尺離れた新しいものとがある。いずれもSB08に伴うもので、北庇の柱穴に比べるとかなり不整形を呈する。2時期あることから儀式に伴う臨時の庇の可能性も否定できないが、柱穴は立派で仮設のものとは考えにくい。

築地塀SA09・10　門SB08の時期の朝堂院南限を画する塀。下層の掘立柱塀SA02・03の解体後、その基壇に土を上乗せして造成しているが、SA02・03に比べると積み方は粗く、かなり粗雑な仕事である。積土は厚いところでも約20㎝が残るのみである。築地の基底幅は6尺、基底部北端には瓦を水平に凸面を上に向けて短辺を連結させて並べてあった。築地南側には3尺幅の犬走りの築土が部分的に残り、門基壇脇の犬走り上に掘り込まれた土坑には、SB08の葛石と考えられる凝灰岩が投棄されていた。また、SA10の北側の犬走りから北雨落溝にかけて落下した瓦堆積中には、多数の塼が含まれていた。犬走りに敷かれていた塼の可能性があろう。なお、門基壇東端から約16mの位置の築地上で礎石据付穴1基を検出した。これは脇門のものであろう。

築地塀北雨落溝SD11・12　築地塀SA09・10の北雨落溝。溝心が築地基底北端から約６尺の位置にある素掘りの東西溝で、いずれも幅約40㎝、深さ約10㎝。遺物はほとんど含んでおらず、人為的に埋められたような状況を呈する。門西側のSD11は、門の際でバラス敷きがこの溝を覆っており、門SB08に北庇が付く時期には溝として機能しなくなっていた。

築地塀北雨落溝SD13・14　門SB08に北庇が付く時期の築地塀SA09・10の北雨落溝。SD11・12に替わるもので、約１ｍ築地側に位置する。幅約30㎝、深さ約10㎝。

東西溝SD15　門東側の築地塀SA09の北雨落溝SD12の北で検出した東西溝。溝心が築地基底北端から約８尺の位置にある。幅約60㎝、門の際では痕跡を留める程度であるが、東ほど深くなり東端では約25㎝を測る。暗灰色砂質土の埋土には大量の瓦片が含まれる。門の位置で北へ折れ、門の北雨落溝に接続するものと考えられる。直接築地塀の雨水を受けるものではなく、犬走りを流れた雨水と流すとともに、朝堂院南限の排水溝の役割を兼ねたものであろう。但し、門の西側にはSD15に対応する位置には溝を検出していない。

基壇建物SB16・17　朝堂院南門南東の朝集院内で検出した建物。基壇西端が上層の門SB08 基壇東端から20尺、基壇北端が門SB08基壇南端に揃う位置にある。基壇の規模は東西約9.6ｍ、南北約6.6ｍ。北側で凝灰岩の地覆石を良好な状態で検出した。長さ約60㎝、幅約25㎝の地覆石が本来16個据えられていたようで、このうち９個が現存する。上面の基壇内側にあたる部分には、羽目石を受ける仕口が施されている。地覆石の外側には幅約40㎝の雨落溝がめぐり、大量の瓦片が覆っていた。基壇北西隅で掘立柱の柱穴１基、南西隅で礎石据付掘形１基を検出した。他には明瞭な柱穴は現存しないが、これらを西妻とする掘立柱と礎石併用の桁行３間程度、梁間１間の東西棟建物があったと考えられる。梁間は10尺、桁行の柱間寸法は８尺、基壇の出は南北６尺、東西４尺か。

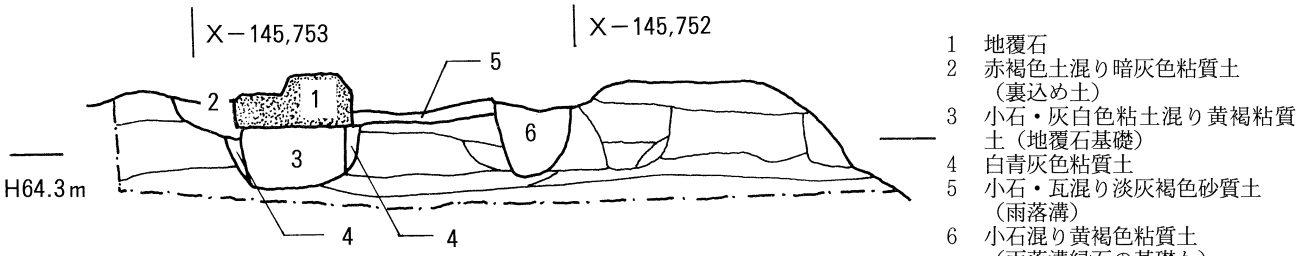


図20　SB16地覆石掘形等断面図　１：20

朝堂院南門をはさんだ対称の位置でも掘立柱の柱穴１基を検出し、周辺には凝灰岩の破片が散乱しているので、削平されてはいるもののSB16と同規模の基壇建物が想定できる。これをSB17とする。中央区朝堂院南門の前でも、SB16・17と類似した１間×３間の掘立柱東西棟建物を２棟検出しており、これとの関連が注目される。

柱列SA18・19　門の両妻の真南の南土庇の南側に、５尺の間隔で３基ずつ並ぶ南北方向の柱列。上層の門SB08に伴うもの。儀式用の旗竿を立てた穴か。『続日本紀』天平17年６月庚子条には平城還都に伴って宮門に大楯を樹てた記事があり、あるいはこれと関係するか。

その他の遺構

溝SD20　古墳時代の溝で、奈良時代の遺構と重複するため完掘していない。調査区東端から基壇建物SB16の南半を通り、調査区南辺を蛇行しながら西に抜けている。溝幅３ｍ以上、深さ１ｍ以上。1968年に東朝集殿の調査（第48次調査）で確認した溝と一連のものか。

土坑群SX21　門基壇上の中央東よりで検出した。円形または隅丸方形の計10基の土坑群で、中・近世の土壙墓の可能性が高い。少なくとも３時期の切り合いがある。最新の段階のものから手捏ねの土師器の皿が出土した。この土坑のある部分では上層の門の遺構は全く痕跡をとどめていないが、下層の門の柱穴を土坑の壁や底で確認できる。

４　遺　　物

瓦は遺構面を覆う遺物包含層、朝堂院南限の築地塀SA09・10の北側の落下瓦層、及び基壇建物SB16の周囲からまとまって出土している。

軒瓦で最も多くを占めるのは、平城宮Ⅱ期前半の軒丸瓦6311A・Bと軒平瓦6664D・Fである。特に門SB08の周囲や築地塀SA09・10に伴う落下瓦層から多数出土した。この組み合わせの軒瓦は内裏域に多く、これまでに朝堂院域でまとまって出土したのは東門周辺（1989年の第203次調査）だけである。朝堂院域で主体を占めるのは、平城宮Ⅲ期の軒丸瓦6225A・Cと軒平瓦6663Cで、礎石建ちの朝堂に葺かれていたと考えられる。ところが、今回の調査で6311A・B－6664D・Fが南門や築地の周辺で多数出土したことによって、門を含めた朝堂院の周囲の区画施設とその内部の朝堂とで異なる軒瓦が葺かれていたことが明らかになった。

次に多いのは、平城宮Ⅲ期の軒丸瓦6225A・Cと軒平瓦6663C、及び軒平瓦6721である。6225A・C－6663Cは礎石建ち朝堂の組合せで、今回の調査でも北端で多数見つかっており、東第六堂か西第六堂に葺かれていたものと考えられる。6225A・Cは基壇建物SB16の周囲からもまとまって出土しているが、SB16の周囲から見つかる軒平瓦は6721型式のものが多く、SB16は6225A・C－6721の組合せで葺かれていたと考えられる。

平城宮Ⅴ期の軒丸瓦6133Dと軒平瓦6801Aは築地塀の周辺から出土し、奈良時代末期の築地塀の補修に伴うものであろう。また、隅木蓋瓦は東第六堂か西第六堂に由来するものであろう。

土器は、奈良時代のものは少ないが、古墳時代の溝SD20から土師器・埴輪がまとまって出土した。土師器は古墳時代中期前半（５世紀前半）のもので、東朝集殿下層の溝上層の土器群とほぼ同じ内容である。埴輪には４世紀代（須恵器出現直前）及び５世紀代の円筒埴輪、４世紀代の形象埴輪がある。この溝には木製遺物も含まれている。　（渡辺晃宏）

SD20発掘中に国府型ナイフ形石器１点が出土した。元来はこの溝を掘り込んでいるいわゆる地山の青灰褐色シルト層に包含されていたものであろう。刃部・裏面下端を欠損するが、約２万年前の典型的な国府型ナイフ形石器である。長さ11.6㎝、幅2.2㎝、厚さ0.9㎝、重さ28.6g、サヌカイト製。今回の資料は、平城宮内で最初の確実な旧石器資料であり、右京一条北辺四坊

表6　第265次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦				軒平瓦			
6133B	1	6304A	5	6641A	1	6681B	1
D	8	B	8	C	2	6682	1
M	2	C	2	E	2	6721C	4
?	5	?	2	6643	1	D	1
6134A	1	6307B	1	6663C	11	F	1
6225A	11	6311A	22	6664B	1	?	7
C	21	B	16	C	1	6725C	1
L	3	?	5	D	25	6732A	1
?	8	型式不明	34	F	26	?	1
6233B	1			H	2	6755A	2
6275	1			?	14	6801A	10
6284E	1			6666A	1	型式不明	11
				6668C	1		
軒丸瓦計		１５８点		軒平瓦計		１２９点	

道具瓦		塼	
鬼瓦	7点	重量	116.8kg
面戸瓦	22点	点数	39点
隅木蓋瓦	4点	凝灰岩	
隅切平瓦	1点		
刻印平瓦「里」	1点	重量	171.9kg
箆書き瓦	1点	点数	20点

丸瓦	
重量	873.48kg
点数	9442点

平瓦	
重量	2702.24kg
点数	29041点

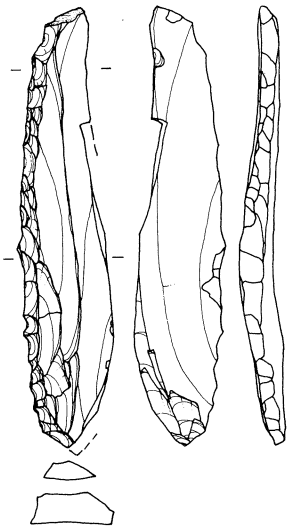


図21　第265次調査出土国府型ナイフ形石器　1：2

六坪（第151－26次調査）や左京三条二坊二坪（第186次調査）で断片的に出土していた旧石器時代の国府系文化の、奈良盆地北部での存在を確実にするものである。今後、平城宮内の調査でもいわゆる地山に相当の注意を払う必要性がある。二上山周辺に集中する国府系文化の遺跡との関係などの検討は、今後の奈良北部の資料の増加をまちたい。　（加藤真二）

5　まとめ

今回の調査で現在までに得られた主な成果を、以下に整理しておく。

①南門の位置と規模が判明し、東の朝堂院の規模が確定した。その南限は、中央の朝堂院の南限に揃っており、東の朝堂院の南北の長さが960小尺（800大尺）であることがわかった。

②これまでに調査してきた東の朝堂院の朝堂と同じように、その南門も当初の掘立柱建物から礎石建物への建て替えがあること、また、これに伴って朝堂院の区画施設が掘立柱塀から築地塀に造り替えられていることがわかった。

③朝堂院の南面の左右に基壇建物の存在することが明らかになった。これまで朝集院内には東西の朝集殿があるだけだと考えられてきたが、朝堂院南門と密接な関連をもつ建物が建てられていたことがわかった。

これらに関連して新たな課題も生まれた。同じ掘立柱建物から礎石建物への建て替えといっても、朝堂とその周囲の区画施設とでは葺かれていた瓦が違い、その建設時期がずれる可能性があることである。所用瓦の年代観が直ちに建設時期に結び付くのであれば、掘立柱の塀・門から、築地塀・礎石建ちの門への建て替えが、平城還都（745年）後の朝堂の掘立柱建物から礎石建物への建て替えに先行して、養老（717年～724年）・神亀（724年～729年）頃に行われたことになる。しかし、ストックされていた軒瓦を使用したり、また下層の朝堂などに葺かれていた瓦を再利用したりするなどして、朝堂とその周囲の区画施設を葺き分けたと考えることも可能である。いずれと考えるべきかは今後の重要な検討課題である。　（渡辺晃宏）

Ⅱ　平城・京内寺院等の調査

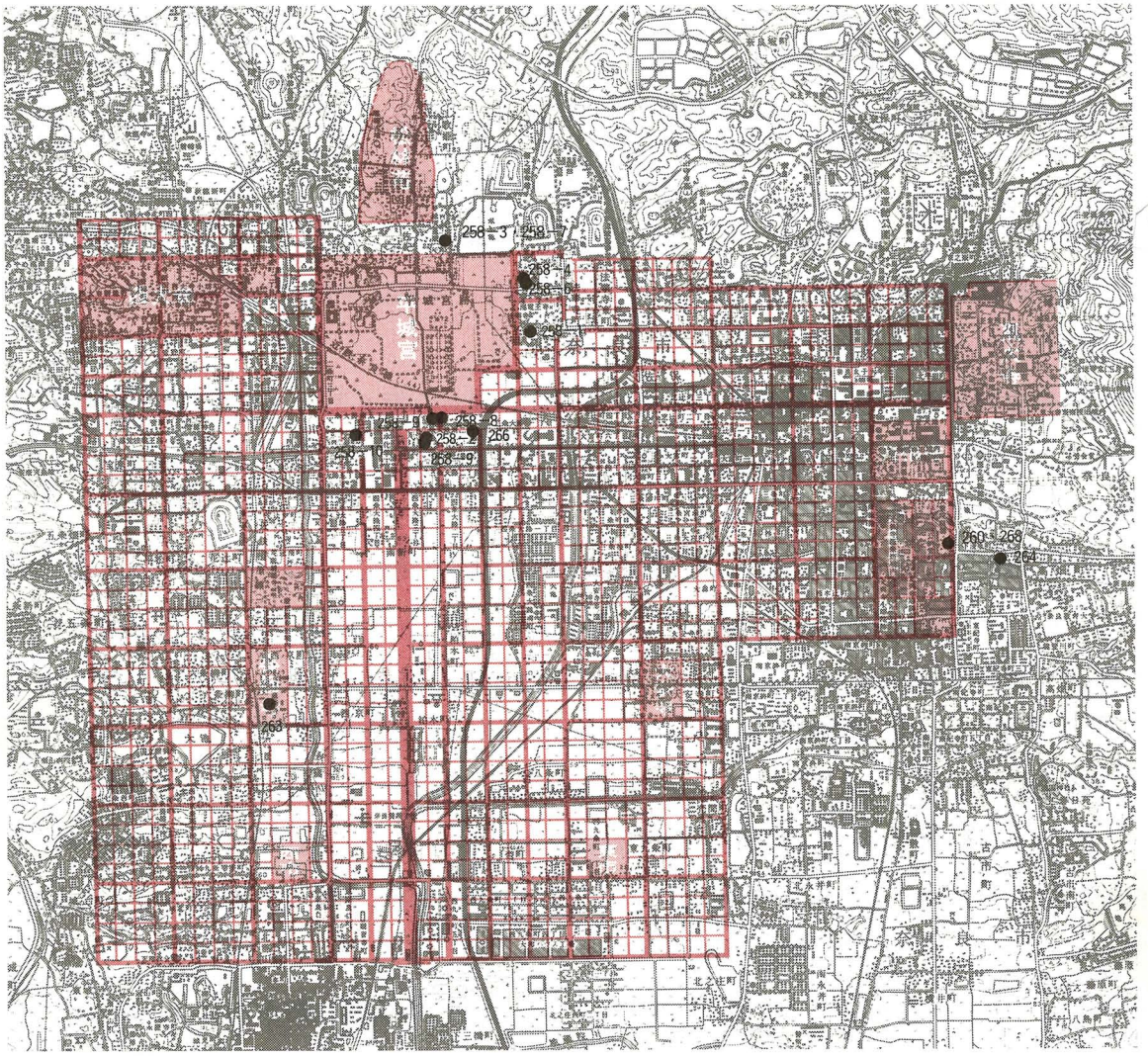


図22　1995年度　平城京内発掘調査位置図　1:5 0000

表７　1995年度平城京内発掘調査遺跡一覧（＊印は巻末表11に概要を掲載）

次　数	遺　跡　名	地　区	発　掘　期　間	面積(㎡)	担当者	備　　考	頁
(平城京)							
258－ 2	左京三条一坊七坪	6ＡＦＪ	1995. 5.16.～ 6. 9.	250	舘野　和己	駐車場造成	
258－ 3	市庭古墳東北部	6ＡＳＢ	1995. 8.22.～ 8.31.	46	山崎　信二	秋山興産	
258－ 4	左京一条二坊十坪	6ＡＦＣ	1995. 9.20.～ 9.28.	42	長尾　　充	村田憲重宅	
258－ 5	左京三条一坊七坪	6ＡＦＪ	1995.10.24.～11.10.	160	小沢　　毅	丸栄住宅産業	
258－ 6	左京一条二坊十坪・坊間路	6ＡＦＣ	1995.11.14.～11.22.	30	箱崎　和久	サワダホーム	
258－ 7	市庭古墳周濠	6ＡＳＢ	1995.12 4.～12. 8.	15	岸本　直文	城本保治宅	
258－ 8	左京三条一坊坊間路	6ＡＦＪ	1996. 1. 9.～ 1.19.	30	小林　謙一	八木良次宅	
258－ 9	左京三条一坊八坪	6ＡＦＪ	1996. 1.17.～ 1.26.	42	浅川　滋雄	日生	
258－10	右京三条一坊十坪	6ＡＧＦ	1996. 2.13.～ 2.22.	45	小林　謙一	瀬川一治倉庫	
266	左京三条一坊五坪	6ＡＦＪ	1996. 1.23.～ 3.15.	395	岩永　省三	フクウチ電化	
立会	木取山古墳周辺	6ＡＦＣ	1996. 2.15.～ 2.20.		岸本　直文	水路改修	
(京内寺院)							
258-1	法華寺	6ＢＦＫ	1995. 4.17.～ 4.19.	20	毛利光俊彦	福井新次宅	
260	大乗院庭園	6ＢＧＫ	1995. 7. 6.～ 9. 8.	330	小野　健吉	史跡整備	
263	薬師寺講堂	6ＢＹＳ	1995.10. 2.～1996. 1.25.	1,480	寺崎　保弘	伽藍復興	
264	頭塔	6ＢＺＴ	1995.10.16.～1996. 3.29.	8	高瀬　要一	史跡整備	
268	大乗院庭園	6ＢＧＮ	1996. 2.26.～ 3.21.	210	浅川　滋雄	史跡整備	
(その他)							
266－補	法隆寺	6ＢＨＲ	1995.10. 3.～10. 9.		小沢　　毅	百済観音堂	

Ⅱ－1　市庭古墳東北部の調査　　第258－3・258－7次調査

1　第258－3次調査

本調査は平城天皇楊梅陵（市庭古墳）の東北部で住宅建設が行われるので、それに先だち事前に発掘調査を行ったものである。発掘区は南北12m、東西3.8mのトレンチを設定し、発掘面積は46㎡である。調査日は、1995年8月22日から31日まで。なお、工事施行者との事前調整の過程で、発掘面の深さに対して条件をつけられたので、発掘区全面を周濠底部まで掘り下げることはできなかった。

発掘区中央では2箇所長方形のゴミ穴があり、地表面から深さ2.5mまで家屋の廃材がぎっしりと埋め込まれていた。調査はこの家屋の廃材を取り除くことから始め、廃材撤去後、断面を観察して墳丘と周濠を確認することにした。

土層は、昭和の土層と判断できるものがトレンチ北端で50㎝、トレンチ南端で20㎝の深さまであり、その下に茶灰粘質土・暗茶灰粘質土の土層（中世から近世にかけてのものであろう）がトレンチ北端で40㎝、トレンチ南端で15㎝の深さまで堆積していた。その下には、深さ1～1.5mの奈良時代の土層（黄灰色粘質土・褐灰色粘質土・灰褐色粘質土）があり、市庭古墳周濠の埋め土と判断できた。したがって、墳丘面および周濠基底部の確認（即ち地山面の確認）は、工事施行者が要望した発掘面の深さを勘案して、トレンチ南端部で墳丘面を確認すること、2箇所の家屋の廃材を埋め込んだ長方形のゴミ穴の下の部分で、さらに掘り下げをおこない周濠底部を確かめるという点のみに限定した。

まずトレンチ南端部では、径10㎝前後の礫を多数含む灰褐粘質土層が深さ30㎝で堆積しているが、地山面に接して礫が敷き並べられている状況は確認できなかった。その下に、黄白色粘土の地山面があるが、地山は北に行くにつれて約20°の傾斜をもって下がる。次に、2箇所の長方形ゴミ穴の下では、礫を多数含む灰褐粘質土層（即ち落下した葺石堆積土と考えられるもの）が50～90㎝の堆積をなす。北側の長方形ゴミ穴の下では、径20～30㎝の大形の石が重なり合って、堆積しているが、発掘区の狭さのため掘り下げ面が周濠基底部まで達せず、この部分での地山確認はできなかった。　（山崎信二）

2　第258－7次調査

個人住宅改築のための発掘調査である。第258－3次調査のすぐ東に隣接する地点。敷地北辺に外堤の基底部がわずかにかかると想定されたが、家屋の基礎のため調査区を設けることができなかった。そこで、敷地の南寄り部分に、東西5m・南北3mの調査区を設定したが、完全に濠底の位置にあたり、底面の標高を確かめることを目的とした。

地表から約3mについては重機により掘削し、そこから下部へは手掘りによった。現地表下0.8mで周濠埋立土上面に達し、この面で、調査区南よりに東西約2.4mの大土壙を確認した。

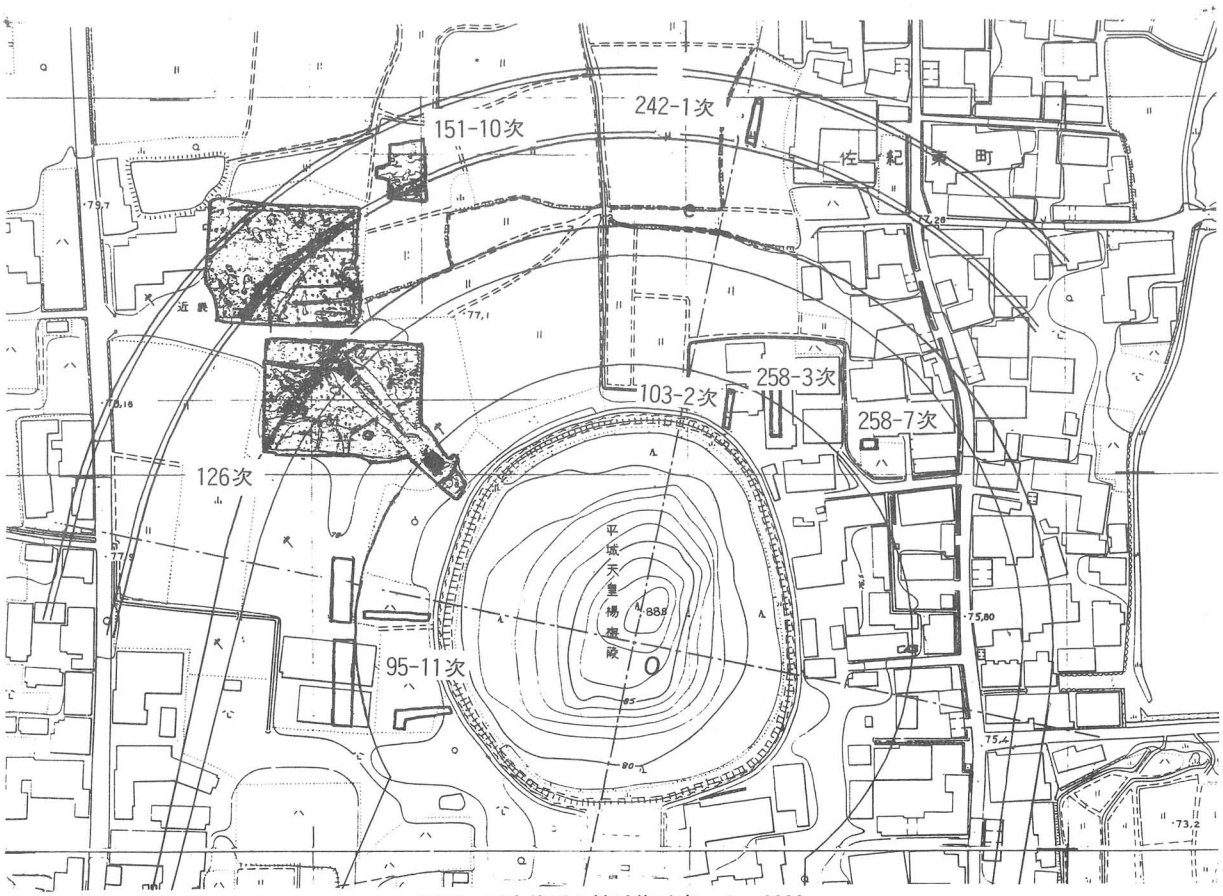


図23　調査位置と墳丘復元案　1：2000

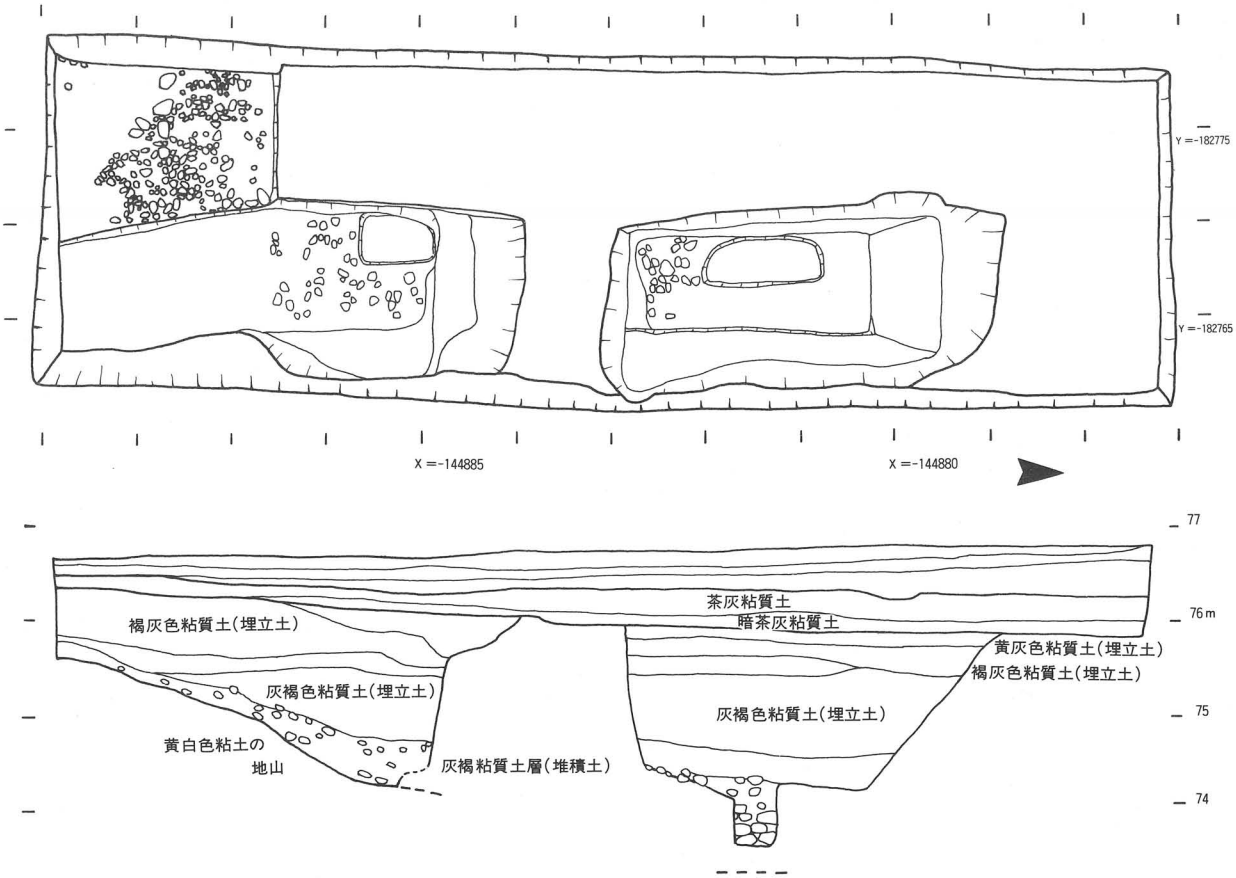


図24　第258－3次調査区平面・断面図　1：80

井戸かとも考えられるが、井戸枠はなく、遺物もまったく含まれておらず、性格は明らかでない。これ以外の遺構は少なく、小穴も建物の柱穴ではない。最終的に濠底に達したのは、地表から4m下の標高72.5mである。地山は青白色の砂層であった。周濠の埋没状況は、濠底から1.3mが古墳築造時から奈良時代までの堆積層で、青灰色の砂質粘土および粘土である。転落した葺石が下部でより密に含まれていた。それより上の約1.9mが奈良時代の埋立土である。橙褐色あるいは黄褐色系の土壌で、おそらく市庭古墳後円部の封土を崩して埋立てたものと考えられる。埴輪小片が認められた以外、古墳にともなう遺物は出土しなかった。

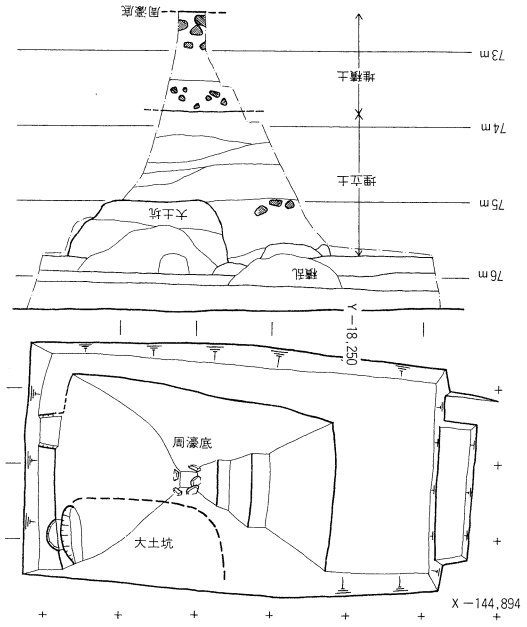


図25　第258－7次調査遺構平面・断面図　1：100

3　墳丘復元案との比較

以上の2箇所の所見を、市庭古墳の墳丘復元案（岸本「市庭古墳の復元」『文化財論叢Ⅱ』1995年）に照して検討しておく。第258－3次調査は、後円部後端の位置を決める調査になりうると考え、調査区の設定も、復元案の基底部がおさまるような南北トレンチとした。残念ながら、深い掘削が制限されたために、墳丘基底部を検出するにはおよばなかったが、良好な状態ではないものの、墳丘斜面を検出し、断面において地山の傾斜を標高74m近くまで確認した。トレンチは墳丘の斜面に対して斜めの位置になるため、斜面に直交方向での傾斜ではないが、約20°の傾斜で下ることが確かめられた。一方、東へ約25m離れた第258－7次調査で確かめた周濠底部の標高は約72.5mである。第258－3次調査区の墳丘基底部は、これよりいくぶん高いと思われるが、検出した地山の最深部より、さらに約1.5mほど下方に墳丘基底部が想定でき、傾斜をそのまま延長すると、調査区の中央やや北寄りに位置することになる。その位置は、想定していた市庭古墳の墳端と矛盾するものではない。

以上のように、発掘所見はこれまでの想定とほぼ整合し、正確な位置をおさえた訳ではないが、大きな変更の必要はなさそうである。最近の市庭古墳周囲の調査が、個人住宅にかかわる小規模なものが多い中で、本調査は開発面積が広く、墳端確認の機会と考えていただけに、掘削の深さが制限され、調査区内に墳端がおさまることが確実でありながら、それを検出できなかったことは残念である。

（岸本直文）

Ⅱ－2　木取山古墳の調査　　立会

奈良市による木取山古墳西北部の水路改修に伴い、奈良市教育委員会と奈良国立文化財研究所で立会した結果、溝状の落ちこみが確認された。木取山古墳の周濠の可能性を考慮し、掘削面での遺構確認と、平面・層位図の作成を奈良国立文化財研究所が行うことになった。改修する水路は、北から南へと流れ、木取山古墳周濠想定位置付近で西へと折れる。改修の掘削工事は北側から始まり、コンクリートの基礎工事の合間に遺構を確認した。

検出遺構

水路の屈曲部から北へ約20m付近で、北側へと落ちこむ遺構SX01を検出した。平面での遺構肩部の方向は、東西方向よりも、東に対してやや南へ振れる。断面観察では、遺構は30°強の傾斜をもって下方へと続いている。なお、このSX01の北側肩部については、工事中に観察可能な平面および掘削断面に留意したが、明らかな地山の上がりは認められず、正確な規模は不明である。また、その南では、幅５ｍほどの地山部分をへだてて、南方へと落ちこむ遺構SX02を検出した。水路の東側には地盤が一段下がり家屋が建っているが、このためか水路掘削部の東側は後世の撹乱がおよび、水路底部で幅２ｍ分を確認したに留まる。この落ちこみの検出ラインもSX01と同様に、真東よりもやや南へ振れる方向をとる。遺構は40°ほどの傾斜で下っており、さらに下方へと深く続く様相を示している。水路の屈曲部までは、この遺構SX02を埋める土層が続き、屈曲部から西側３～４ｍ付近で西側の肩部を検出した。水路の中央部は水路堆積土が残存しており、肩部は南北に分断された格好で検出した。この南北では平面位置がややずれるが、北側の位置が本来の肩部であり、南側は、おそらく後により外側へ緩やかに広がったものであろう。

SX02の西肩から４ｍ西側の南壁では掘形一辺60㎝ほどの柱穴１基、さらに水路のより西方で、南北棟の妻になる３基の柱穴を検出した（SB03）。いずれも40～50㎝の方形ないし隅丸方形状の掘形である。調査範囲が狭く、北妻か南妻かは不明。柱間は７尺。

遺構の性格

当初、検出したSX01・02が木取山古墳の内濠および外濠である可能性も考えたが、調査範囲が狭いものの、遺構の検出ラインが木取山古墳の後円部を中心とする円弧を示さないので、古墳の周濠とは考えにくい。とくにSX01は、水路西側に続かず、外濠ではありえない。ただし、SX02については、平面形が不整形ではあるが、その位置を考慮すると、のちの拡張などにより本来の周濠円弧が変形したこともありうる。木取山古墳の復元案は図26に示した通り（『昭和60年度平城宮跡発掘調査部調査概報』1986年、64頁）であるが、調査箇所がそれ程多くなく、限られた定点からの復元であり、墳丘や周濠の平面形や位置はまだ確定的ではない。したがって、今回の調査箇所まで周濠がのびる可能性も、考慮に入れておく必要があろう。ただ

図26　改修水路の位置（1：2000）と検出遺構（1：200）

し現状の地形は、今回改修した水路を境に東へ南へと下がり、とくに水路が東西に走る部分の南側では段差をともなって低くなっており、従来の推定の通り、より低い部分で周濠がおさまると理解する方が考えやすいのかもしれない。ともかく、周囲の調査をさらに蓄積する必要があり、それによって今回検出した遺構の性格を再検討する必要がある。

SX01・02を埋める土層は、堆積層ではなく人為的な整地層とみられ、少量の埴輪片とともに奈良時代の土器をかなり包含している。その状況はSX01・02ともに共通し、木取山古墳周濠のかつての調査所見とも一致する。つまり、SX01・02ともに、条坊などの奈良時代の遺構ではなく、古墳時代の遺構とみる方が妥当と考える。コナベ古墳の南に位置することも考慮すると、古墳に関わる遺構の可能性が高い。昨年度の法華寺新町における調査から、木取山古墳の西方にも古墳が存在したと推定した（『1994年度平城宮跡発掘調査部調査概報』1995年、56・75頁）。コナベ古墳の南に、木取山古墳のような100mを前後する前方後円墳に加え、より小規模な方・円墳をも含む古墳群が広がっていたことは十分に想定しうる。今後、この地域の調査を進める上で留意すべき点として、注意を喚起しておきたい。　（岸本直文）

Ⅱ－3　左京三条一坊七坪の調査（1）　　第258－2次

調査区は左京三条一坊七坪のほぼ中央部西寄り、1992年に行った第231次調査区に西隣する位置にあたり、南北18m、東西14mの範囲を占める。土層は上から耕土・床土・橙黄色土・黄褐色粘土・黄灰白色砂質土となり、遺構は現地表下約30cmの黄褐色粘土層の上面で検出したが、削平により遺構が失われた所もある。検出した奈良時代の主な遺構は、溝1条、掘立柱建物4棟、礎石建物1棟、塀状遺構4条、井戸1基、土坑1基である。

南北溝SD01は、発掘区北端で幅約2.5m、南端で約2m、深さ5～20cmで、北へ行くほど深くなるとともに、やや西に広がる。古墳時代・奈良時代前半の土器を含む溝である。

掘立柱建物のうちSB05は桁行3間、梁間2間の南北棟で、柱間は桁行5尺、梁間6尺。SB07は桁行4間、梁間2間の東西棟身舎に南廂が付く。柱間は桁行は8尺、梁間5尺、廂の出は7尺。身舎の南側柱と廂の柱穴の中には、削平により失われたものもある。SB11も桁行4間、梁間2間の身舎に南廂が付く。柱間は桁行8尺、梁間6尺で、廂の出は8尺。SB07・SB11とも西妻柱は西壁断面で確認した。ともに廂の出は身舎梁間方向の柱間より大きい。ＳＢ08は調査区の西端で南北2間（柱間8尺）を検出したもので、西に伸びる建物であろう。礎石建物SB13は発掘区北端で東西4間分検出した。抜取が大きく浅く、かついずれも掘形内に納まることから、礎石の抜取と判断した。礎石据付の掘形は径70cm程度、柱間は4.5尺と小さいことから倉庫であろう。

次に塀状遺構SA02は発掘区南端で検出した東西方向のもので、東でやや北に振れる。柱間は5尺ないし6尺と不揃いで、柱穴も小さいから柵であろう。SA06はSD01埋土上で2間分（柱間5尺）を検出した南北塀、SA09・SA10はやはり2間分（柱間はそれぞれ4.5尺、5尺）のみを検出した東西塀である。

井戸SE03は径約2.2m、深さ2mの隅丸方形の掘形の中に、3段の井戸枠からなる。上段は1.1m四方の方形縦板組横桟留め井戸枠で、腐敗して下端部30cm程のみが残る。その下の中段は、高さ60cm、径85cmの曲物の周囲に縦板をめぐらせる。曲物は四重にたがをはめる。下段も同様に、高さ50cm、

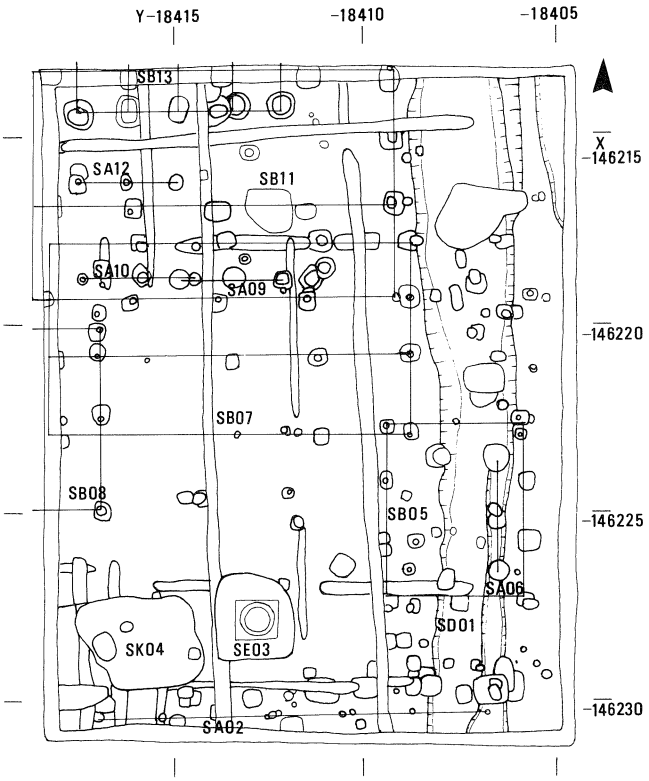


図27　第258－2次調査遺構平面図　1：200

径65㎝で三重のたがをはめた曲物の周囲に縦板をめぐらせて補強する。井戸底には拳大の石を敷き、その上に下段枠を据えていた。また下段曲物の上端では、それと中段曲物の間にやはり拳大の石をめぐらせている。なお井戸は、中段上端まで土を埋め、その上に人頭大の石を投げ込んで廃棄していた。井戸枠内からは神功開宝２枚と奈良時代後半の土器が出土した。

土坑SK04は約３ｍ四方の不整形土坑で、深さは15㎝。奈良時代前半の土器を多く含む。なおここは西に発掘区外にまで落ち込みが続き、その東端が土坑状になっていたものである。

さて、建物の時期については、相互の切り合い関係がSB07とSB11の間にしかなく、また時期を判定できる遺物の出土が少ないため、不明なものが多いが、SB05とSB07の柱穴からは奈良時代後半の須恵器が出土している。東隣における第231次調査の知見では、建物遺構は奈良時代前半には１棟のみで、多くの建物は奈良時代後半に建てられ、それはＡ・Ｂ２時期に大きく区分できる。奈良時代後半に多くの建物が現れるという点は今回の知見とも一致する。その成果も参照して今回検出した遺構を見ると、奈良時代前半に流れていた南北溝SD01を後半に埋め、後半のＡ期にはSB05とSB11がほぼ柱筋を揃えて造られ、Ｂ期にはSB07・SB13が造られた。SB08はＢ期ではないが、それ以上の時期の特定はできない。

第231次調査では左京三条一坊七坪は、奈良時代後半に一坪全体が一つの区画として用いられ、そこには大学寮が置かれていたと推測した（『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993年）。今回それを直接実証する文字史料は出土しなかったが、そこで指摘されている、建物はその平面規模・柱穴ともに規模がきわめて小さいという特徴は、ここでも共通する。また第231次調査区は七坪内で東西中軸線の東西にまたがる範囲を占め、本調査区はそれに西隣するという位置関係からすると、両調査区とも同じ敷地内に属すると考えられる。

第231次調査では坪の東寄りにある正殿の西側には、Ａ期には東西棟、Ｂ期には南北棟が並んでいた。今回は小規模ではあるが、その中では中心的建物であるSB11・SB07はいずれも東西棟であり、その南東にさらに小規模な南北棟SB05が位置する。したがって今回検出の建物群は、第231次調査で検出された建物群とは区別されるブロックであったと考えられる。そのことは前調査で検出された西へ延びる道路遺構が本調査区までは延びないという点からも裏付けられよう。天保11(1840)年刊の『大内裏図』中で、内藤広前が平安京の大学寮の平面を復原した「大学寮図」によると、東半分を占める本寮・厨の西には、北から明経道院・算道院・明法道院という３つのブロックが南北に並び、それぞれ正殿とその前面の東西脇殿から成っていた。これはあくまで考証による復原であり、かつそこでは大学寮は四町占地であったから、この遺構と直接比較するのは留保されるが、第231次調査区で検出した遺構が仮に本寮にあたるとすると、本調査区はその西の院の並ぶ地区にあたることになり、「図」との類似点には注意されよう。しかし本地区の性格を確定することは、現時点ではまだ困難であり、今後の周辺での調査が期待される。

（舘野和己）

Ⅱ－4　左京三条一坊七坪の調査（2）　　第258－5次

1　はじめに

ガソリンスタンドの建設にともなって、左京三条一坊七坪の西南隅に近い部分の発掘調査を実施した。この坪における過去の調査としては、第231次調査（2200㎡、『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993年）、第234－16次調査（30㎡）、第242－8次調査（350㎡、『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1994年、67～73頁）、第258－2次調査（250㎡、本書所収）、奈良市第38次調査（155㎡、奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和58年度』1984年、11～14頁）がある。

今回の開発対象地は1500㎡におよぶが、そのうち、遺構が完全に破壊される地下タンクの予定地に、調査区を設定することになった。この部分の現況は水田である。まず、重機によって耕土と床土を除去したのち、以下を人力掘削とした。また、当初、北壁で確認した大型の柱列が調査区内にのびないことが判明したので、その平面を把握するために、北側へ部分的に調査区を拡張した。発掘総面積は、180㎡である。基準点測量の後、10月24日に重機掘削を開始し、11月10日にすべての調査を終了した。

層　序　厚さ約20㎝の水田耕土と床土の下に、古い耕土とみられる淡灰褐色砂質土が部分的にひろがる。その下は、奈良時代のベースとなる自然堆積層であり、遺構はすべてこの上面で検出した。遺構面の標高は、62.7m前後である。これより下は、流水による堆積を示す淡灰～黄灰色の微砂や砂が層を成しており、また、水田耕土の上面から70～80㎝ほど下には、特徴的な黒色粘土の堆積が認められる。この厚さは20㎝内外で、以下は淡灰色の細砂層となる。

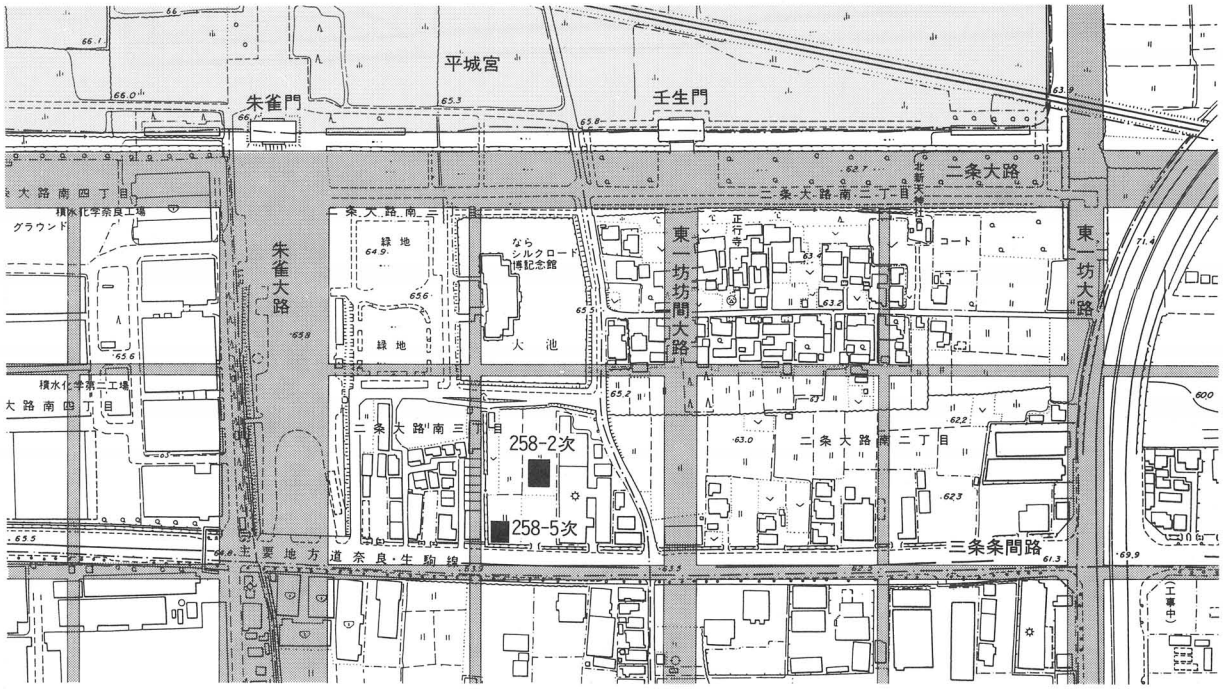


図28　第258－2・5次調査位置図　1：5000

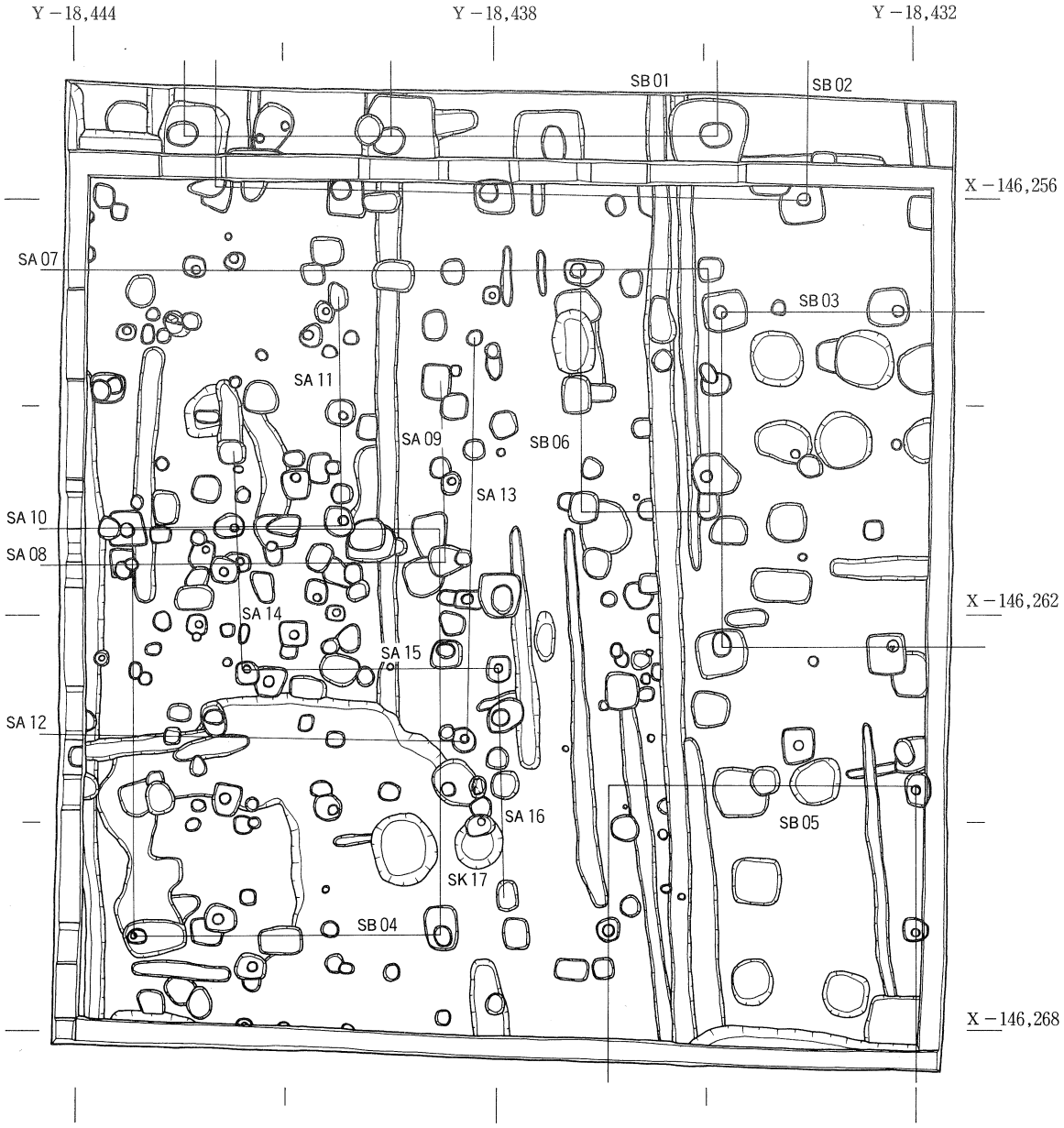


図29　第285－5次調査遺構平面図　1：100

2　遺　　構

掘立柱建物6棟、掘立柱塀9条、土坑数十基、溝数条を検出した。建物と塀は、基本的に奈良時代に属するものとみられる。このほかにも、まとまりを把握できない柱穴がかなりあり、建物や塀の総数はさらに増すことが確実である。土坑は、遺物の状況から奈良時代と判断できるものもあるが、多くは時期を明らかにしがたい。また、調査区の東半部を中心に、一見すると柱穴様の土坑がかなり存在するが、断ち割りの結果では浅い皿状を呈しており、柱穴とは認められない。溝は、いずれも京廃絶後の耕地化に伴うものである。

SB01　調査区の北端で南妻の部分を検出した。建物本体の大半は、調査区外に存在する。西側に廂をもつ南北棟建物である。身舎の梁間は2間で、柱間は8尺。廂の出は10尺である。廂柱の掘形は、身舎柱にくらべて浅い。柱はいずれも抜き取られており、抜き取り穴下部の収束状

況から復元される柱径は、25cm程度である。

SB02　おなじく調査区の北端近くで検出した。東西4間分の柱列を確認したのみであるが、これを南側柱列とする、桁行4間の東西棟建物と考えておく。ただし、柱間は７尺前後で、ややばらつきがあり、塀となる可能性も残る。

SB03　調査区東部で確認した東西棟建物。西妻およびその一つ内側の柱筋を検出した。柱間は、桁行・梁間ともに８尺である。柱はすべて切り取られたらしく、柱痕跡が明瞭に残る。また、柱根の遺存するものもみられる。柱径は18cm内外である。

SB04　調査区の西南部で検出した。西側柱の一つを欠くが、桁行３間・梁間２間の南北棟建物と考えておく。柱間は、桁行・梁間ともに7尺であろう。

SB05　調査区の東南部で確認した。西北隅の柱穴を欠失するが、梁間2間の南北棟建物とみられる。柱間は、桁行・梁間ともに7尺である。

SB06　調査区の東北部で確認した。桁行２間、梁間1間の南北棟建物で、柱間はいずれも６尺である。ただし、北妻が次に述べるSA07と揃い、それとの柱間隔も６尺と等しいことから、一連の建物を構成する可能性も残る。

SA07　調査区西北部で検出した東西方向の柱列。柱間は６尺で、SB06の北妻にとりつく塀と考えておく。SB06とともに、より大型の建物の一部となる可能性があるが、対応する柱列は確認できなかった。

SA08　調査区西部で検出した東西方向の塀。柱間は5尺程度である。東端部で、南北方向の塀SA09とＬ字形に接続する

SA09　調査区の中央部で検出した南北方向の塀。柱間は5尺ないしそれ以下である。南端部で、東西塀SA08と接続する。

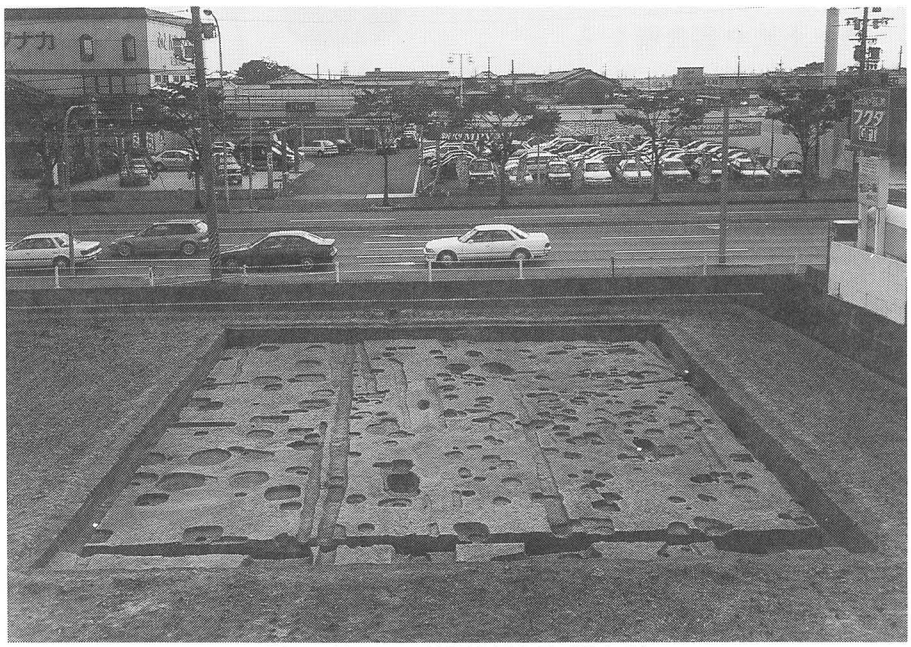


図30　第258－５次調査区全景（北から）

SA10　調査区西部で確認した東西方向の塀。柱間は約６尺である。東端部で、南北方向の塀SA11とＬ字形に接続する。

SA11　調査区西北部で確認した南北方向の塀。柱間は、６尺ないしそれ以下である。南端部で、東西塀SA10と接続する。

SA12　調査区西南部で検出した東西方向の塀。柱間は６尺から８尺と不揃いである。東端部で、南北方向の塀SA13とＬ字形に接続する。

SA13　調査区の中央部で検出した南北方向の塀。柱間は、南２間が７尺、その北が5.5尺ないし6尺である。南端部で、東西塀SA12と接続する。

SA14　調査区西部で確認した南北方向の塀。柱間は５尺である。南端部で、東西塀SA15とＬ字形に接続する。

SA15　調査区西南部の東西塀。柱間は６尺である。西端部で、北へのびる塀SA14と、東端部で、南へのびる塀SA16と接続する。

SA16　調査区南部で検出した南北塀。柱間は、5.5尺ないし６尺である。東西塀SA16とＬ字形に接続する。

SK17　調査区の南部で検出した土坑である。直径約1.2ｍ、深さ約0.3ｍ。ほぼ円形の平面を呈する。奈良時代の土器や土馬など、多量の遺物を廃棄している。　（小沢　毅）

３　遺　　物

土器・土製品　溝・土坑や包含層から若干量の土器が出土している。ここでは、調査区の南部にある土坑ＳＫ17から出土した土馬と土器について報告する（図31）。

土馬（１・２）は、ほぼ同形同大のものが、２点出土した。１は頭頂部と左前脚の先端、２は、左の前・後脚と尾の先端を欠くほかは、ほぼ完形である。ともに大型で、長くて反りの大きい顔と長い脚をもつ。頸部は扁平で、「たてがみ」を表現し、尾はほぼ水平にのびて、先端が上方に反り上がる。目は竹管の刺突で表現し、顔の後ろに短い粘土紐を貼り付けて「たづな」をあらわすが、鼻と口、背中の鞍の表現を欠く。胴部の

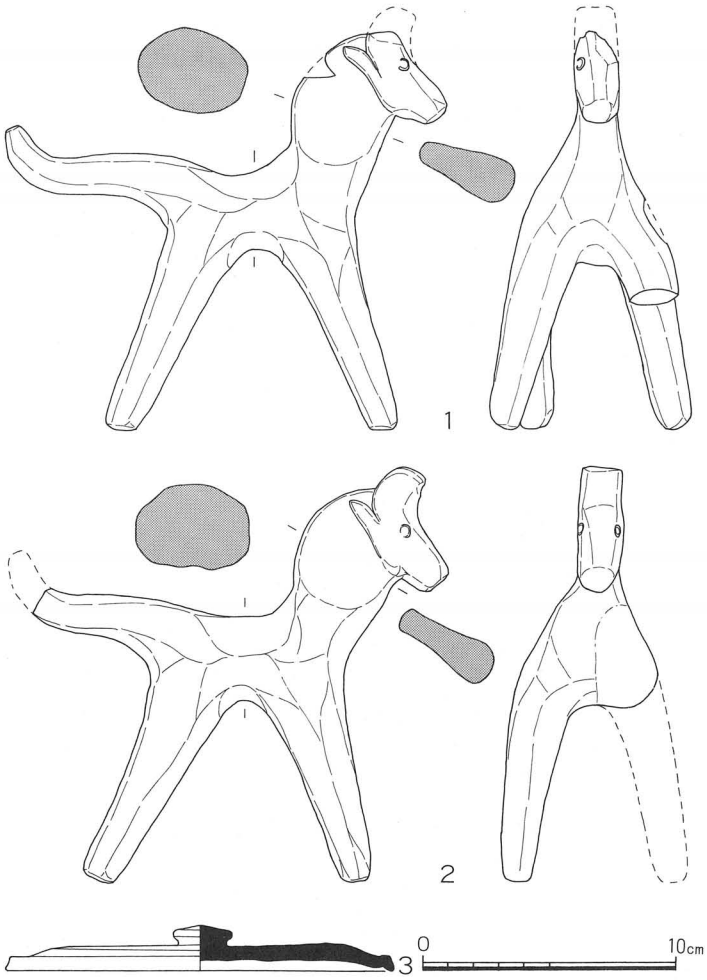


図31　SK17出土土器・土製品　１：３

断面形は蒲鉾形を呈し、棒状の粘土塊に四肢、尾などを貼り付けて製作したことがわかる。接合面で、脚が剥離している部分もある。この土馬は、右京八条一坊、西一坊坊間路の調査報告（奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』1984年）で第３型式と分類したものにあたるが、鞍の表現を欠くなど、退化した面も見られる。３は、平城宮土器Ⅳに属する須恵器Ⅱ群土器の杯ＢⅢ蓋。青灰色を呈し、頂部をロクロ削りする。

土馬は、溝や井戸などから出土することが多く、本例のように、土坑からほぼ完形のものが2体出土したのはきわめて珍しい。土馬祭祀のあり方に貴重な例を加えたことになる。そして、共伴した須恵器から、土馬の編年により確実な年代の一点を与えることもでき、その意義は大きいといえよう。（玉田芳英）

瓦　磚　軒丸瓦4点（6284Ｅ１点、型式不明３点）、軒平瓦２点（6572Ａ１点、6689Ａ１点）、丸瓦16.0kg（204点）、平瓦30.0kg（416点）、磚0.5kg（３点）が出土した。いずれも奈良時代に属する。出土量から見て、調査区やその付近に総瓦葺の建物が存在したとは考えられない。調査地が坪の西南隅に近いことを勘案すれば、道路に面した築地に葺いた瓦ないしは、内部の掘立柱建物の棟部分に用いた瓦が主体であろう。

4　まとめ

今回の調査対象である左京三条一坊七坪は、近年になって、かなり発掘調査が進んだ地域である。このうち、坪の中央部を南北に広く調査した第231次調査では、二時期の正殿にあてうる東西棟建物をはじめとして、建物や井戸などを確認している。そして、報告書では、遺構・遺物の状況や京内での位置、史料との対比を通じて、当該坪の性格を宮外官衙と想定し、大学寮の可能性が高いと結論づけた。

これを含めて、従来の調査では、全体に建物の密度が低く、大型の建物が少ないという特徴が指摘されてきた。ところが、今回の調査では、片廂ではあるが、かなり大型の南北棟建物を検出し、それ以外にも比較的密集した状態で建物が存在することが明らかとなった。この部分が、坪の西南隅に近いということとあわせて、それらの性格をあらためて検討する必要があろう。とくに、SB01という南北棟建物が、坪の中心寄りではなく、その反対の西側に廂をもつ意義は軽視できない。また、これ以外にも、Ｌ字形の塀が、何回かにわたって、ほぼ同位置で作り替えられている。小規模な目隠し塀である可能性が高いが、そうした施設を含めて、この部分の利用形態の解明も今後の課題である。

今回の調査では、残念ながら、当該坪の性格を確定できるだけの資料は得られなかった。坪内にはなお未調査地を残しており、将来的な解明に期待がもたれるが、現在までの資料の蓄積をもとに、再検討を加えることも必要な段階にきているのではないか。（小沢　毅）

Ⅱ－5　左京三条一坊八坪・東一坊坊間路の調査　　第258－8•9次

第258－8次調査　住宅建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は平城宮壬生門の南約120ｍの位置にあり、東一坊坊間路と東側溝の存在が予想されたため、敷地南辺に南北2.7ｍ、東西11.4ｍの発掘区を設定した。基本的層序は、上から耕土、盛土、旧耕土、旧床土、黄褐砂質土ないし灰白褐砂質土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は約62.4ｍである。

調査の結果、溝4条、土坑1基などを検出した。土坑SK01は、東端が発掘区外になる南北1.3ｍ、東西1ｍ以上の方形の土坑。南北溝SD02は幅約0.9ｍ、深さ約0.2～0.3ｍで、少量の瓦片を出土した。南北溝SD03は南流する幅約3.4ｍ、深さ約0.9ｍの溝。木葉文のある壺の胴部破片など、第Ⅰ様式の弥生土器が出土した。斜行溝SD04は調査地において南北溝SD03と交叉する下層の斜行溝。推定幅約3ｍ、深さ約1ｍで、北西から南東の方向に流れる。

東一坊坊間路は、左京三条、左京七条等の調査では、溝心心60大尺（約21.5ｍ）と判明している。しかし、今回検出した南北溝SD02の心は壬生門心の東11.8ｍにあり、東一坊坊間路心が壬生門心と一致すると仮定すれば、東一坊坊間路は溝心心23.6ｍ（80小尺）となる。本調査地の北約50ｍの第123－24次調査では東側溝を検出しておらず、また、当調査地の遺構検出面は、壬生門前面の二条大路路面検出面より約１ｍ低く、加えて、弥生時代の遺構を検出していることから、後世の削平のため、痕跡的にしか残っていなかった可能性も考えられよう。（小林謙一）

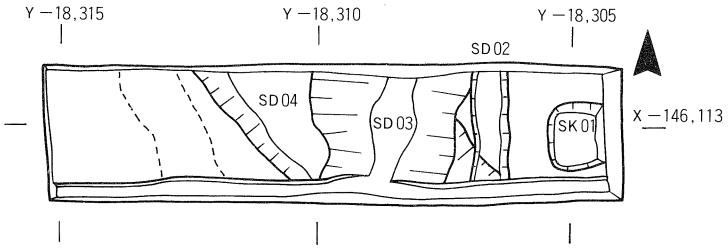


図32　第258－８次調査遺構平面図　１：150

第258－9次調査　第258－8次調査区の約40ｍ西で、坪の中央東よりにあたる。東西11ｍ、南北3ｍの調査区で、東西溝1条、炭入土坑2基などの遺構を検出した。遺構検出面の標高は約62.3ｍ。

東西溝SD06は、トレンチの中央部から西壁へ下る素掘りの東西溝で、幅が0.8～１ｍ、深さは西壁部分で約0.5ｍである。埋土から瓦が数点出土した。トレンチ北壁東寄りでは、２つの炭入土坑SX07•08を検出した。SX07•08はいずれも不整形で、多量の炭を含む埋土からは、平城宮土器Ⅲの破片が数多く出土した。トレンチ東南隅のSX09は、東西1.2ｍ以上、南北約1.3ｍの円形もしくは楕円形の土坑である。断割り調査によると壁の落ち方が垂直に近く、井戸跡の可能性がある。重複関係から、SD06よりも古い時代の遺構である。　（浅川滋男）

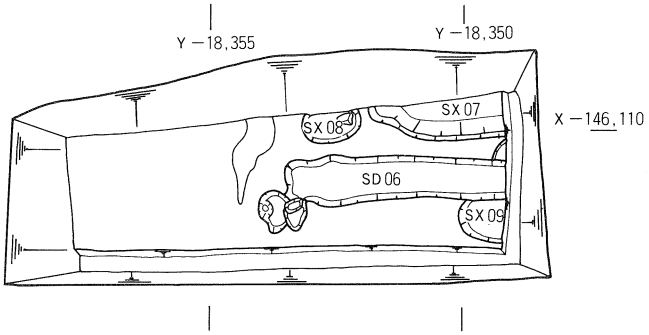


図33　第258－９次調査遺構平面図　１：150

Ⅱ－6　左京三条一坊十五坪の調査　　第266次

1　はじめに

ホテル建設の事前調査である。調査地は、国道24号線（奈良バイパス）と国道368号線（大宮通り）の交差点の北約100m、24号線高架の西側にあり、左京三条一坊十五坪の東北部にあたる。この坪は過去の調査で、中央部から西辺中央部にかけて（奈文研第230次Ⅳ区）、東南部（奈良市第94次）、東辺中央部（奈文研第118―８次）、東北隅部（奈文研第230次Ⅰ区）、北辺中央部（奈文研第230次Ⅱ区）、西北隅部（奈文研第230次Ⅲ区）、を発掘している。これらの調査の結果、奈良時代を通じて十五・十六坪が一体として利用され、十五坪の中心部では、３棟の大型東西棟建物（SB5914・5915・5916）の両側に南北棟建物SB5913・5917を対称に置くという、平城宮・京で例の少ない建物配置が判明し、公的施設の可能性が提議されている。

今回の調査地は、第118―８次調査地と第230次Ⅰ・Ⅱ区の間にあり、敷地の東西約70m、南北約25mで、東端部に東一坊大路西側溝、西端部に坪の中心部建物群の東脇殿SB5913の一部がかかると想定できた。建物建設予定地は敷地の中央部で、ここに東西20m、南北16.5mの調査区（東区）、SB5913の北延長部に南北16m、東西４mの調査区（西区）を設けた。東一坊大路西側溝推定地には下水管が通っており調査できなかった。

2　遺構

調査区の基本層序は、上から盛土（100～120㎝）、水田耕土（20㎝）、床土（20～25㎝）、瓦を多量に含む遺物包含層（15～20㎝）があり、遺物包含層を除去した面で奈良時代の遺構を検出した。この面の土質は調査区各所で異なるが、平城宮東朝堂地区と東院地区が乗る２本の尾根の間の谷筋に堆積した土であって、厚さ５～10㎝で色調の異なる粘土ないし粘質土層が何枚も重複して形成されている。遺構検出面の標高は、東区の東南端60.80m、東北端60.95m、西南端60.90m、西北端61.00m、西区南端61.05m、北端61.10mであって、西から東へ、北から南への緩傾斜が見られる。当調査地の南約120mの第249次調査地との標高差は約50㎝である。検出した主要な遺構は、古墳時代の竪穴住居１棟、奈良時代の掘立柱建物６棟、建物か塀か不明の掘立柱列３条、井戸１基などである。遺構どうしの重複関係はあるものの、東西両区に渡る時期区分はできず、個々の遺構の概要を記すにとどめる。

A　古墳時代の遺構

SX06ａ・ｂ　東区西南部。古墳時代の竪穴住居。一辺5､9～5､2mの方形。SX06ａの床面の深さは0､2～0.3mで、壁沿いに幅0.2m、深さ５㎝の溝を巡らす。SX06ｂは同位置で床を0､15mかさ上げし、壁沿いに深さ５～10㎝の溝を巡らす。中央部が奈良時代の井戸SE07で破壊され、住居に伴う柱穴を検出できなかった。

B　奈良時代の遺構

SB01　東区東端の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、北4間分を検出した。北でやや東に振れ、SB02より新しい。柱間は桁行2.75m（9尺）等間、梁行1.8m（6尺）。柱掘形は一辺1～1.2mの方形で、深さは側柱が0.9～1m、妻柱が0.6m。柱をすべて抜き取っており、西側柱北端と北から2番目には礎板が残る。

SB02　東区東端の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、総柱建物か西廂付き建物の廂部分か不明である。北5間分を検出した。北でやや西に振れ、SB01より古い。柱間は桁行2m（6.5尺）等間、東西2.5m（8.5尺）。柱掘形は一辺0.8～1mの方形ないし1.4×0.8mの矩形で、西の柱列に矩形が多い。深さは0.8～1mで、柱抜き取り痕跡には通有の漏斗状のものと一見柱痕跡風の細長いものとがある。後者は柱痕跡の可能性もあるが、内部の土質から抜き取り痕跡と判断しておく。

SB04　東区中央の掘立柱南北棟建物。5間以上×2間以上で、北4間分を検出した。北でやや東に振れる。柱間は桁行2.9m（10尺）等間、梁行2.4m（8尺）。柱間の割に柱掘形が小さく、一辺0.35～0.55mの矩形で、深さは0.2～0.3m。柱をすべて抜き取っている。

SB05　東区西南部の掘立柱東西棟建物。4間以上×2間で南に廂が付く。東3間分を検出した。東でやや北に振れる。北側柱列はSB02の南妻と筋を揃え同時期の可能性がある。柱間は桁行2.4m（8尺）等間、梁行2.1m（7尺）等間、廂の出は2.2m（7.5尺）。柱掘形は一辺0.35～0.6mの矩形で、深さは0.2～0.3m。柱をすべて抜き取っている。

SE07　東区西南部の井戸。掘形と枠の抜き取り痕跡を検出した。枠板をすべて抜き取っている。掘形は、遺構検出面では径3～3.6mの不整楕円形で、深さ0.5mから正円形となり、深さ3mの底面では一辺1.5mの隅丸方形となる。底に厚さ0.15mのバラス層があり、その上に枠を据えていたのであろう。枠は横板組と推定する。一段の高さを25cmと想定すれば遺構面までに11段が入る。抜き取り痕跡は掘形めいっぱいの規模で、底面のバラス層上面に及ぶ。多量の平城宮土器Ⅱと草履1点、鉄製U字形鍬・鋤先1点が出土した。

SX08　東区西北隅の掘立柱柱穴2基。建物の東南隅か。柱間は2.3m（8尺）。柱掘形は一辺1.2mの方形で、深さ0.95～1.1m。柱を抜き取っており、抜き取り痕跡内に塼が入る。

SB5913 a　西区南端部。第230次調査Ⅳ区で検出した十五坪の中心部建物群の東脇殿。北妻の中央・西の柱穴2基を検出し、桁行8間と確定した。第230次調査では、掘立柱のaから礎石建ちのbに建て替えたと判明しているが、西区ではbは検出できなかった。柱間は西脇殿SB5917と同じであれば3m（10尺）であるが、今回検出の2柱穴では3.3m（11尺）の可能性もある。柱掘形は一辺1.3mの方形で、深さ0.9m。柱の抜き取り痕跡内に塼が入る。

SX09　西区南端部。SB5913の柱穴を切る柱穴2基。建物か塀か不明である。東で南に振れる。柱間は3～3.3m（10～11尺）。柱掘形は西側が1.3×0.95mの矩形で、深さ0.85m。東側が1.4×1.2mの矩形で、深さ0.9m。柱を抜き取っている。

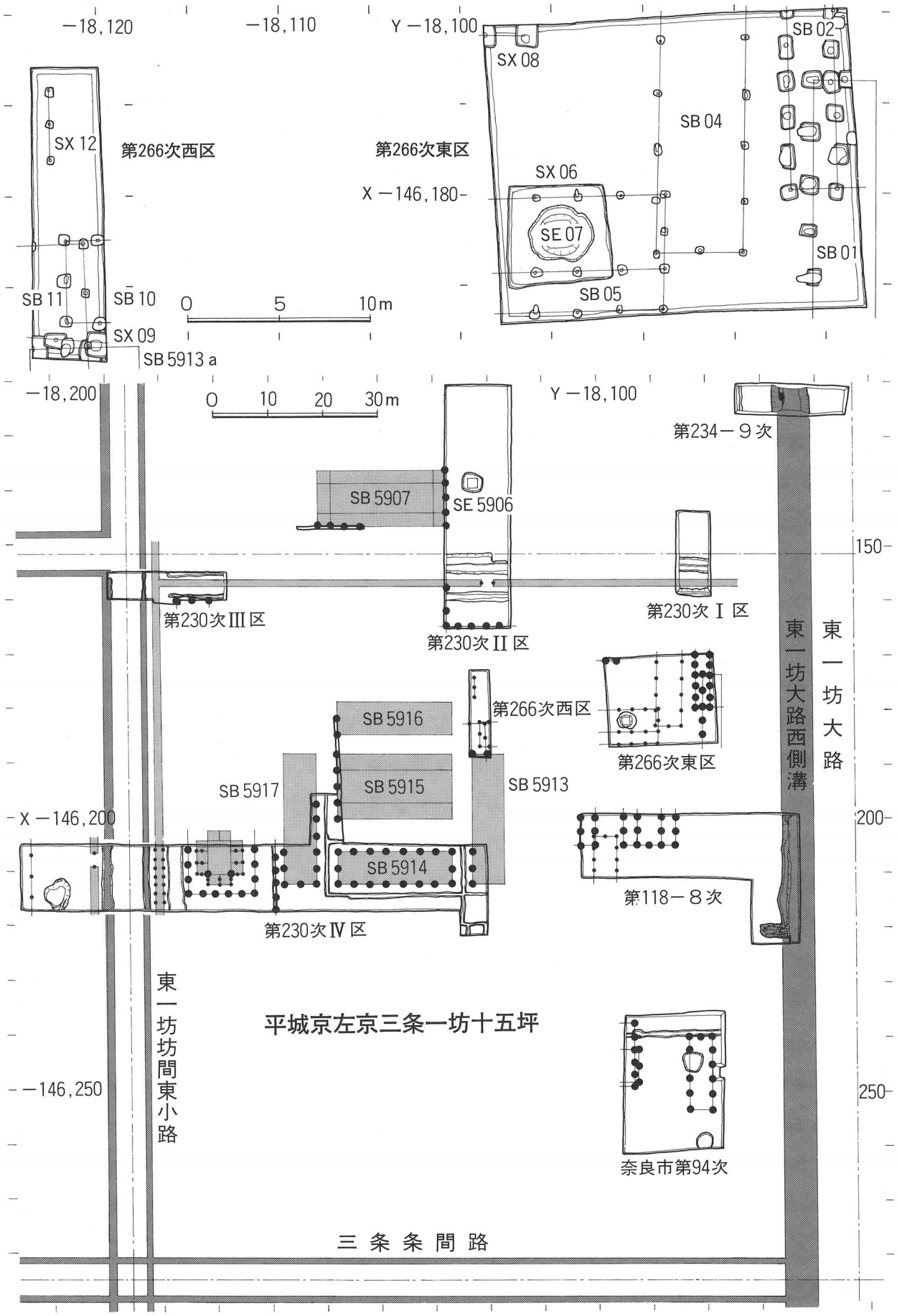


図34　第266次調査位置図（下・1：1000）・遺構平面図（上・1：300）

SB10　西区南半部の掘立柱建物。おそらく東西棟で３間以上×２間と推定する。西１間分を検出した。東でやや北に振れる。南側柱はSB05の南廂と、棟通りはSB05の南側柱と筋を揃え、同時期の可能性がある。柱間は桁行1.8m（６尺）等間、梁行2.25m（7.5尺）等間。柱掘形は一辺0.6～0.8mの矩形で、深さは0.3m。柱をすべて抜き取っている。

SB11　西区南半部の掘立柱建物。おそらく南北棟で３間以上×２間と推定する。北２間分を検出した。北でやや西に振れる。SB5913・SX09より新しい。柱間は桁行2.8m（9.5尺）等間、梁行2.8m（9.5尺）等間。柱掘形は一辺0.4～0.6mの矩形で、深さは0.3m。柱をすべて抜き取っている。

SX12　西区北半部の掘立柱柱穴３基。建物か塀か不明である。北でやや西に振れる。柱間は1.9m（6.5尺）等間。柱掘形は一辺0.4mの方形で、深さは0.3～0.55m。柱を抜き取っている。

3　遺物

A　木簡　SE07の抜き取り痕跡から木簡５点（うち削屑３点）が出土した。主なものの釈文を掲げる。

①　・○ 奉上木□百二材

　　・○ 和銅四年二月五日　　(176)・30・2　019

②　・奉上

　　・「宇宇」　　(89)・46・3　019

①は木材の進上状か。平城遷都直後の和銅４年（711）の年紀をもつ。　（古尾谷 知浩）

B　土器（図35）　SE07の抜き取り痕跡の出土土器を報告する。全て平城宮土器Ⅱに属する。

土師器　杯ＡⅠ・ＡⅡ（2)・ＡⅢ（1)、杯Ｂ(8)、杯Ｂ蓋、杯ＣⅠ（4)・ＣⅡ（3)、杯ＥⅠ・ＥⅡ(7)、杯Ｆ（6)、盤、鉢ＢⅠ（9)・ＢⅡ（5)、鉢Ｘ（10)、高杯、甕Ａがある。杯Ａには連弧暗文と放射二段暗文の双方が見られる。7は把手が１個しか付かず、珍しい例であり、４の底部全面には黒斑がある。10は鍋に器形・法量ともに似るが、胎土が異なり、盤や鉢に用いるものに近いより精選された胎土を使用する。外面に幅広の磨きを施し、把手上の肩部には「呰女」の墨書を横位に記す。また、５の底部にも「手布利」の墨書がある。これらの土師器は、黒斑を持つものを含むこと、高杯の暗文に放射二段と連弧を組み合わせるものがあること、杯Ｅや盤に把手を持つものが多いことなど、長屋王邸のSD4750出土土師器に様相が似る点もあり、注目される。

須恵器　杯ＡⅡ（14)・ＡⅢ、杯ＢⅡ（13)～ＢⅤ、杯ＢⅡ蓋（12)～ＢⅤ蓋、椀Ｂ（11)、壺Ｂ(16)・Ｄ（15)・Ｋ、平瓶、甕Ａ・Ｃがある。12は転用硯として用い、16は美濃地方の製品である。

（玉田芳英）

C　瓦塼類（表８）　軒瓦は軒丸瓦９点、軒平瓦６点で多くはないが、面積が４倍の第230次調査区での出土量（軒丸瓦34点、軒平瓦20点）と比して、特に少ないとは言えない。型式・種は

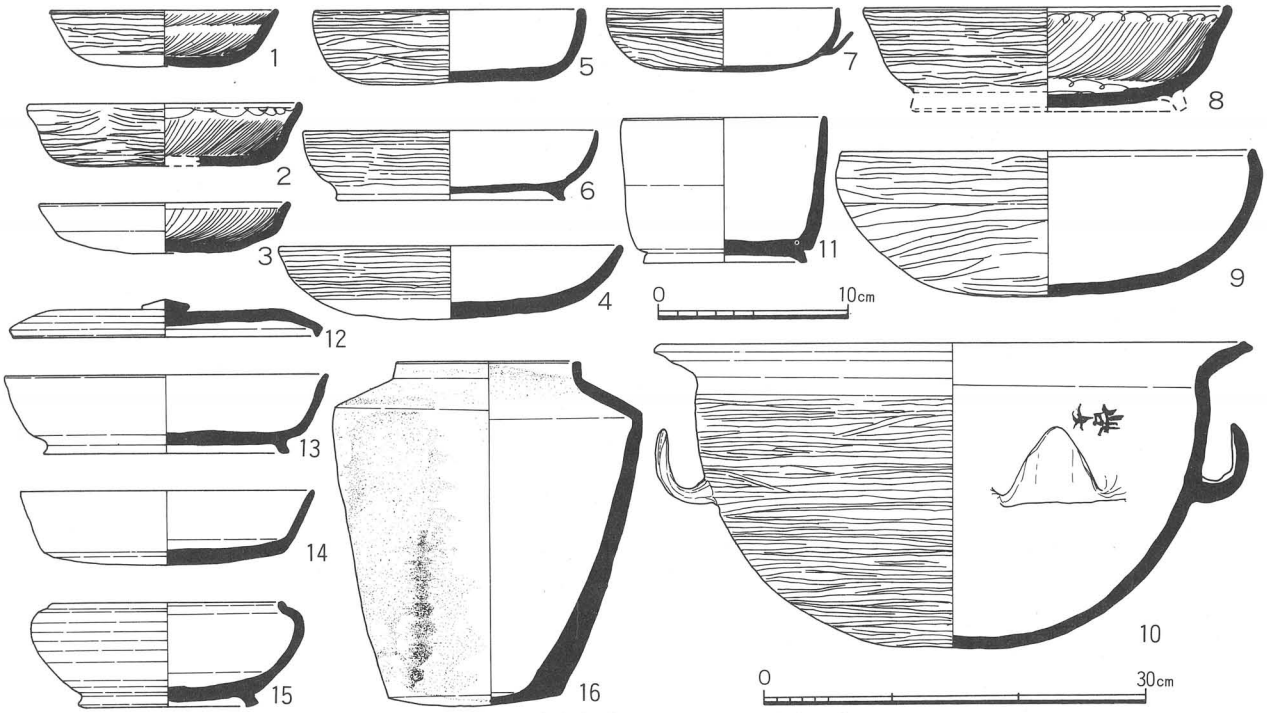


図35　SE07出土土器　1：4、10のみ1：6

表8　第266次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		丸瓦	
型式　種	点数	型式　種	点数	重量	127.3kg
6012　新	2	6688　Aa	2	点数	1,300
6135　A	1	6721　G	2	平瓦	
6282　Fb	1	I	1	重量	380.4kg
6308　B	1	型式不明	1	点数	3,774
6311　Aa	1			塼	
型式不明	3			重量	120.0kg
軒丸瓦計	9	軒平瓦計	6	点数	125

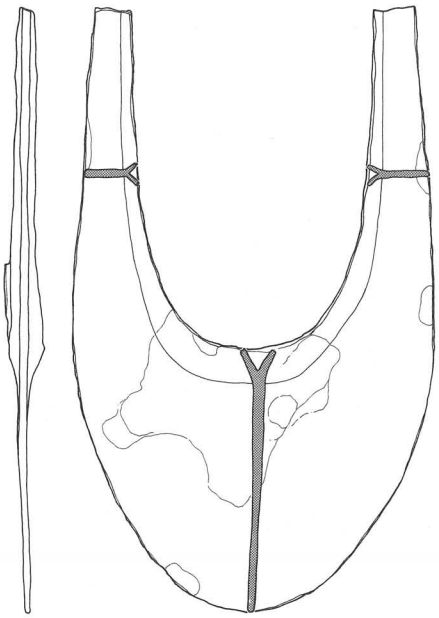


図36　SE07出土鉄製鋤先　1：4

第230次調査区出土品と類似し、平城宮軒瓦編年Ⅱ期前半のものが多く、Ⅱ期後半～Ⅲ期のものが次ぐ。東区・西区ともに遺物包含層から多量の丸瓦・平瓦・塼が出土した。230次調査区と比して、面積は24%、丸瓦重量は24%、平瓦重量は29%だが、塼重量は49%であって、相対的に塼が多い。ただし今回の調査区に塼を使用した施設は考えにくく、坪の中央部から廃棄されたのであろう。第118―8次調査区でも塼が多く、平城京域としては特殊な坪である。

D　鉄製品　SE07の抜き取り痕跡から鉄製鋤先1点が出土した。鍛造製のU字形刃先で、内側縁に断面V字形の溝を作り出す。長さ32.2cm、幅19.2cm。刃部に使用による摩滅や研磨痕が無く、板状を呈することから、未使用品と考えられる。全長が大型の部類に属し、内縁下端か

ら刃部先端までの長さが14cmと、全長のほぼ半分に達するほど長いことも、未使用で消耗していないことと関連するだろう。木製の身部を装着した痕跡も見られないことから、未使用の刃先のみを井戸内に遺棄もしくは埋納したと考えられる。伯耆国庁跡でも、本例と類似する形状の大型鍬・鋤先が、未使用の状態で5枚まとまって小土坑から出土しており、興味深い。

（加藤真二）

4　まとめ

十五坪の東北部の様相がより明確となった。第230次調査で、奈良時代を通じて十五・十六坪を一体として使用し、十五坪の中央やや西寄りに中心的建物群を置いたこと、この中心的建物群は、掘立柱から礎石建ちへの造り替えはあるものの、基本的配置は不変であったことが判明している。一方、当調査と第118―8次、奈良市第94次の成果で明らかになった坪の東半部の様相は中心部とは異なる。建物が中・小規模で配置が整斉ではなく、位置や規模を変えての建て替えを行なっており、大型の井戸もある。十分裏付けられているわけではないが、厨などの付属施設ではなかろうか。中心的建物群を東一坊大路に面した坪の東半にではなく、小路側の西半に置いたのは、平城宮に近い側が正面で、そちらに寄せたのであろうか。

十五坪の中心部建物群の東脇殿SB5913の規模が確定した。桁行8間で北妻を正殿SB5915の北廂に揃える。SB5913の北側には同時期の大型建物はなく、中心部建物群の配置は、正殿SB5915・南殿SB5914、脇殿SB5913・5917をロ字形に配し、その北に北殿SB5916を独立させたことが判明した。調査前にはSB5913の北妻がSB5916の北側柱筋までのびて、SB5913・5914・5916・5917でSB5915を囲む飛鳥石神遺跡A―3期（斉明朝）東区画に類似した配置かとも想定したが違っていた。ただし、平城宮・京の官衙や邸宅の中枢部で、左右対称の建物配置が見られる場合、正殿の前面は開放させるのが普通で、本例の場合、①に述べたように南北どちらが正面か問題があるが、いずれにせよ東西棟で閉じるのは珍しい。こうした配置は、石神遺跡のほかは飛鳥雷丘北方遺跡などに限られ、遺物の項に記した瓦塼類の多さとも相まって、十五坪の特殊な性格を示している。

第230次調査では、奈良時代を通じて十五坪中心部建物群SB5913～5917が存続したと考えたが、SB5913については、再検討の余地がある。西区にはSB5913より確実に新しい2時期の遺構がある。SB10はSB5913と重複しないが近接し、共存は考えにくい。SB10とSB5913との新旧関係は不明であるが、いずれにせよ西区の中で4時期の変遷が考えられる。中心部建物群の存続期間については再考を要しよう。

井戸SE07は、抜き取り痕跡から出土した土器（平城宮時Ⅱ）・木簡（和銅4年（711）の年紀あり）からみて、奈良時代の初期、おそらく設けて間もなく廃絶している。別の井戸に機能を移したのだろうが、第230次調査区Ⅱ区のSE5906は規模（枠の内法一辺1.8m）・掘削時期（奈良時代後半）からみて後身ではない。

（岩永省三）

Ⅱ－7　右京三条一坊十坪の調査　　第258－10次調査

倉庫建設にともなう事前の発掘調査である。調査地は、平城宮若犬養門の南方約170m、秋篠川旧流路の右岸に位置し、西一坊坊間路西側溝想定位置に近接する。当初、東西約11.5m、南北約6mの発掘区を設定したが、排土地が限られていたため、南北を約2m縮小した。調査地の基本的層序は、厚さ約40～50cmの置土、旧床土の下、現地表下約50～60cmで灰褐砂ないし黄灰粘土の遺構検出面となる。遺構検出面の標高は約64.7mである。

検出した主な遺構は、斜行溝2条と土坑2基などである。土坑SK01は発掘区の東南隅でその一部を検出した南北2.6m以上、東西2.3m以上の不整形な土坑で、少量の瓦片と須恵器片が出土した。土坑SK04は発掘区北辺で検出した径約45cmの小土坑。少量の弥生土器片が出土した。斜行溝SD02は幅約3.5m、深さ約1.1mで、北東から南西の方向に流れる。第Ⅲ～Ⅴ様式の弥生土器が出土した。溝SD03は斜行溝SD02より古い下層の溝。大部分が斜行溝SD02と重複しているため、規模や流れの方向は明らかにしえないが、斜行溝SD02の東側の遺構検出面である灰褐砂は、土層断面の観察から、溝SD03の堆積層と考えられ、斜行溝SD02の底での知見をあわせれば、調査地において、斜行溝SD02と交叉する位置関係であった可能性が高い。

これらの弥生時代の遺構は、平城宮西南隅の第14次調査や本調査地の北約110mで実施した第202－11次調査において検出した弥生時代の遺跡の広がりを示すものであろう。なお、西一坊坊間路西側溝は、右京八条一坊十一坪の調査においては、幅5.5～11.0m、深さも1.5mを越える規模を有しているが、今回の調査においても、第202-11次調査と同様、その痕跡すら検出されなかった。本調査地付近においては、位置を変えていたか、あるいは、下流域ほどの規模ではなかったため、削平された可能性が考えられよう。

出土遺物としては、斜行溝SD02から、櫛描文にボタン状貼付文のある第Ⅲ様式の壺口縁部破片や叩き成形による第Ⅴ様式の甕などが出土しており、この溝が弥生時代中期から後期にかけて存続していたことがわかる。図示したのは、底部を欠失するが、ほぼ完形の第Ⅲ様式の長頸壺で、外面の胴部上半から頸部にかけてと口縁部内面にハケ目が残り、胴部上半はヘラ状工具による縦位のナデを施す。（小林謙一）

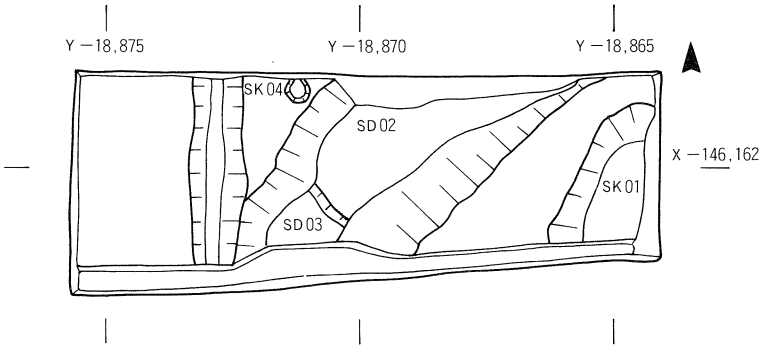


図37　第258－10次調査遺構平面図　1：150

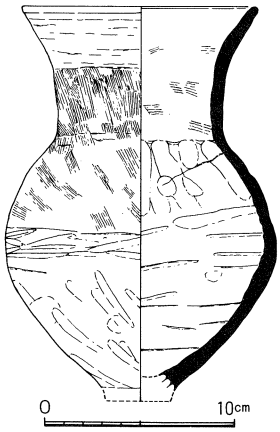


図38　SD02出土弥生土器　1：4

Ⅱ－8　大乗院庭園の調査　　第260・268次調査

1　はじめに

大乗院は、寛治2年（1088）、興福寺の門跡寺院として創建された。当初は、現在の奈良県庁西南角付近にあったが、平重衡の東大寺・興福寺焼き討ち（1180）に罹災後、当時元興寺の子院・禅定院があった現在地に移った。その後、2度の火災を被るが、宝徳3年（1451）の火災以後の尋尊大僧正による復興の様子は、『大乗院寺社雑事記』に詳しい。さらに、江戸時代の状況は、隆遍僧正の『大乗院指図』や隆温大僧正の『大乗院四季真景図』などによって伺うことができる。明治時代以後は、建物が撤去されて荒廃し、一時は小学校の敷地になったり、水田化したり、あるいは道路敷きとして切り取られるなどの経過をたどった。1958年には、旧国鉄の宿舎が敷地内に建設されたが、一方この年文化財保護法による名勝指定を受け、1974年には（財）文化観光資源保護財団＜現・（財）日本ナショナルトラスト＞により園池修理事業が行われている。

図39　大乗院位置図　1：10000

このたび、奈良市立庭園文化館が旧大乗院敷地の南東隅に建設されるのにあわせて、大乗院庭園の整備がおこなわれることになった。本調査は、この庭園整備にあたっての事前調査である。調査期間は、第260次調査が1995年7月6日から9月8日、第268次調査が1996年2月26日から3月21日であり、また調査面積は、それぞれ約330㎡、約210㎡である。なお、これまで大乗院園池については、奈良市が平成2・3年度に調査を行い（元興寺旧境内第29・32次調査）、江戸時代と中世の2時期の池南岸中部の汀線を、現在の汀線より15～20m南で検出している。

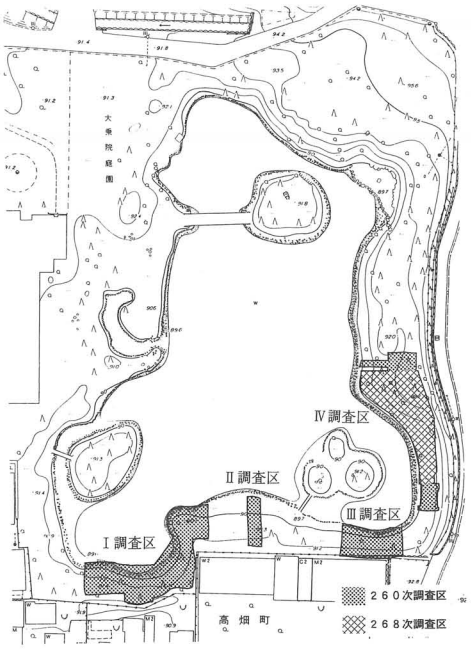


図40　調査区配置図

2　遺　　構

A　園池南岸西調査区（Ⅰ調査区・図42）

園池南岸西端から出島にいたる範囲で設定した調査区。面積約200㎡。調査区の基本的な層序は、地山・中世の造成土・近世の造成土・近現代の造成土および撹乱土・表土であり、調査

区西端付近では地山と中世の造成土の間に平安時代遺物包含層が入る。また、池の中にあたる部分では、池の堆積土が見られる。なお、中世および近世の造成土はそれぞれ灰褐粘質土・褐色砂質土を基本とするが、土層は場所による変異が大きい。検出した遺構は、中世の池（SG01)、近世の池（SG02）のほか、中世造成土上の流れ（SX03）である。以下、それぞれの遺構を概説する。

SG01　灰褐粘質土を最上面として造成された陸部が、比較的急勾配で北方に落ち込み、池岸となる。この灰褐粘質土は、近世以降と明かに判断できる遺物を含んでいないため、中世に造成された陸部と推定できる。汀線付近は、近世の池岸により撹乱されているため、護岸の仕様は明かではないが、例えばY－14937では礫混じり暗灰砂質土が汀線に近い位置で検出されている（土層図ｂ・図44、以下同）ことから、礫を用いた仕上げがなされていた可能性が大きい。池底の堆積土の状況から考えて、池の水位は90.0ｍ前後と推定できるため、土層観察で得た汀線の平面位置は、Y－14946でX－147011～012付近（土層図ａ）、Y－14937でX－147012付近（土層図ｂ）であり、さらにその東では汀線は南に後退し奈良市・元興寺29次調査で検出した汀線（Y－14919でX－147014～015付近）に取り付くもようである。なお、この調査区内での池底の標高値は89.5～89.6ｍ前後である。

SG02　中世と推定できる陸部の上に褐色砂質土などで30～40㎝積土して造成された陸部が北方に落ち込み池岸となるが、その勾配は汀線付近ではやや緩くなる。Y－14930～936付近は池の汀線が急に南に後退して緩やかな入江状になるが、このあたりでは裏込石を伴う護岸石積が部分的に施された状況が確認できた。これは、池水による岸の浸食を防ぐために、SG02の存続していたある時点で施工されたものであろう。汀線の平面位置は、Y－14946でX－147011付近（土層図ａ）、Y-14937でX-147012付近（土層図ｂ）とほぼSG01と同位置、Y－14931でX－147013（土層図ｃ）付近であり、さらにその東ではやや北に突出し（Y－14922でX－147009付近）、再び南に後退する。なお、森蘊は、現在の池南岸にある出島が室町時代の南中島に由来するとの見解を表していた（『中世庭園文化史』）が、この出島は、近世の遺物（伊万里焼の磁器片・江戸時代の燻し瓦）を包含するSG02の時期の池底堆積土の上に積土して造成されていることがわかった（土層図ｄ)。おそらく近代のものと考えてよいだろう。

SX03　調査区西部の中世の陸部上面で検出した幅0.5～1.5ｍの素掘りの流れ状遺構。南南西から北北東方向に蛇行しながら流れ下る。砂ないし砂礫層が３層見られることから水が流れた時期が３時期に分かれるものと推定できる。

Ｂ　園池南岸中央調査区（Ⅱ調査区・図42）

園池南岸中央付近に設定した調査区。面積約30㎡。この調査区は、全域SG01及びSG02の池底にあたる。池底は調査区南部では青灰粘土とその上にのる暗灰粘質土、北部ではさらにその上にのる灰褐砂・青灰砂礫で形成されており、標高は89.3～89.5ｍである（土層図ｅ)。

C　園池南岸東調査区（Ⅲ調査区・図43）

園池南岸東端付近に設定した調査区。面積約50㎡。SG01及びSG02の池底と見られる灰色砂礫層を標高89.3m付近で検出した。この池底の上面には暗褐色の腐植土が10～15㎝堆積している。なお、調査区南部X－147003～004付近以南では、この腐植土の上に青灰粘質土・暗灰（または黄灰）粘質土からなる斜面が形成され、調査区中央部付近ではこの斜面の北部（池側）に5～10㎝の礫を含む青灰砂礫土が張り付けるように載せられていた（土層図ｆ）。青灰砂礫土も含めたこの斜面はある時期の池岸であることは確かであるが、時期を確定する遺物等は出土していない。近世の池SG02の池岸の可能性も全くないわけではないが、奈良市・元興寺第29次および第32次調査による近世の池岸（Y－14890でX－147014付近）と照合すると、そう考えることは困難であり、やはり近代のある時期に施工されたものとするのが妥当であろう。

D　園池東岸調査区（Ⅳ調査区・図43）

園池東岸南側に設定した調査区。調査面積は、第260次調査として実施した北端の約40㎡、南端の約20㎡、第268次調査として実施した中央部約210㎡の計約270㎡である。基本的な層序はⅠ調査区と変わらない。検出した遺構は、中世の池（SG01）のものと推定される洲浜の石敷き(SX04)、近世～近代のものと推定される叩き漆喰の遺構(SX05•06•07)である。

遺構検出面は、現況の芝の表土および昭和48～49年の整備の際の置き土と見られる層を取りのぞいたところで、近世後期～近代の層とみられる暗黄灰砂質土層の上面である。これは、池の周囲に巡らされた盛土の上面と思われ、池に向かって急勾配で落ち込む斜面がある時期の汀線をなしていると推定される。この急斜面と現池汀線の間でSX04を検出した。また、東岸の汀線の層位確認のために、現在の汀線を横断する位置で断割り調査をおこなった。その位置は、中央畦畔の南面（X－146979.3・Y－14875.2とX－146977.2・Y－14868.7の2点を通る。土層図ｇ）からおよそ80㎝の幅で設定した。以下、検出遺構の概要および断割り調査の所見を述べる。

SX04　池汀線の急斜面から、緩やかな勾配で池底に向かう洲浜の石敷きと考えられる遺構(図41)。石は形や大きさがふぞろいな河原石で構成され、洲浜の敷き方も自然風であり、石が密に配されている。発掘区南半の第268次調査区西壁内側では池底に向かう石敷きの落込みが検出され、石敷きは急傾斜面から約2ｍの幅であることが確認された。なお、第268次調査では、洲浜から池底へ向けて落ち込む砂礫層で、10世紀末～11世紀前半の土師器が出土した。

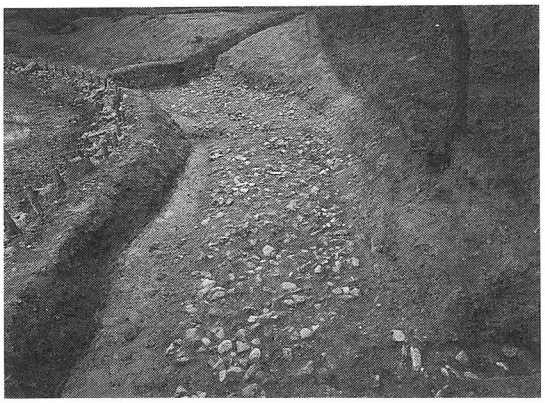


図41　Ⅵ調査区出土洲浜石敷き（南から）

SX05・06・07　調査区の北東部の暗黄灰砂質土層の上面より検出した、叩き漆喰の遺構。遺構は主に3つの部分からなる。一番南にあるドーナツ形の遺構(SX05)、SX05より北北西の方向に伸びる帯

状の遺構(SX06)、SX05の北西の方向に3つないし4つ並ぶ矩形状の遺構（SX07)である。SX05の平面形は、内径約1.5m、外径約2.0mのドーナツ形を呈する。小池もしくは植栽桝の痕跡と推定されたが、断割り調査の結果、ドーナツ形遺構の地下部分の内外の土層に明確な違いは認められなかった。したがって、小池の縁ではありえないことが判明した。また、叩き漆喰は、暗黄灰砂質土層の上面に黒褐土を5㎝ほど敷いた上に薄く叩き占めたものであった。SX06は、漆喰の残存状態が悪く、はっきりとした輪郭を検出することはできなかったが、園路または何らかの境界を示すものと考えられる。SX07は、形が崩れているが石畳状のもので、一番北側の遺構の西側にガス灯の基礎と思われる円筒形の金属遺構（SX08）があることなどから、近代に使われていた園路と考えられる。ただし、園路の成立は近世にさかのぼる可能性もある。じっさい近世の「大乗院四季真景図」には、調査区に相当する東岸に園路やいくつかの建物が描かれている。このことから、SX05•06•07は、近世に成立した園路を近代以後も継続的に使用した可能性がある。

中央畦畔南面断割り調査　土層図gに示したとおり、土層断面は、表土および近・現代の置土層を除くと、大きく3つの時期に分けることができる。下層より、池尻から陸地の地中に向かって石敷きが続いている層（第1層)、X-14872付近で落込みをなし、第1層にほぼ平行に50～60㎝ほど盛土した層（第2層)、第2層にさらに30～50㎝盛土した層（第3層）である。

第1層　調査区を出てさらに東側に続いている。断割り断面でみる限り、この石敷には池に向かって3つの落込みが確認される。落込みの端点の座標・標高は西側からそれぞれ、X－146979・Y－14875付近で89.6m(落込みa)、X－146978・Y－14873付近で89.8m(落込みb)、X－146977.5・Y－14871付近で90.5m(落込みc)である。石敷上面の平均勾配は、落込みa以西は約10％、落込みa-b間は約3％と比較的緩やかであるが、落込みb－c間と落込みc以東はともに約30％の急勾配であった。また、落込みb－c間には上面が標高約90.5mの砂の堆積層がみられる。これらのことから、大乗院庭園の池が、園池として利用された当初、あるいはそれ以前に自然池として存在した時期には、東岸には急勾配の河原石敷きが存在し、池の水位は標高90.5mを越えていた可能性がある。この場合、汀線は落込みc（X－146977.5・Y－14871）付近であると考えられる。さらに、地山の層を確認するため、断割り調査区の東端および中央部を掘り下げた。このうち、東端の深掘りトレンチでは、およそY－14869～14870付近で標高90.6～90.7mにやや大型の河原石層を検出した。中央部の深掘りトレンチは標高88.2m付近まで掘下げ、小石を多量に含んだ層をいくつか確認した。この両方のトレンチのいずれの層からも遺物は検出されず、人工の層と自然の層をはっきりと区別することはできなかった。

第2層　砂混じり小石層あるいは黄褐土混じり灰褐砂質土を最上面として造成された陸部が、比較的急勾配で西方に落ち込み、池岸を形成している。汀線付近は下層より褐色砂および灰色砂混じりの礫の堰により護岸を形成している。池底の堆積土の状況から、この時期の池の水位

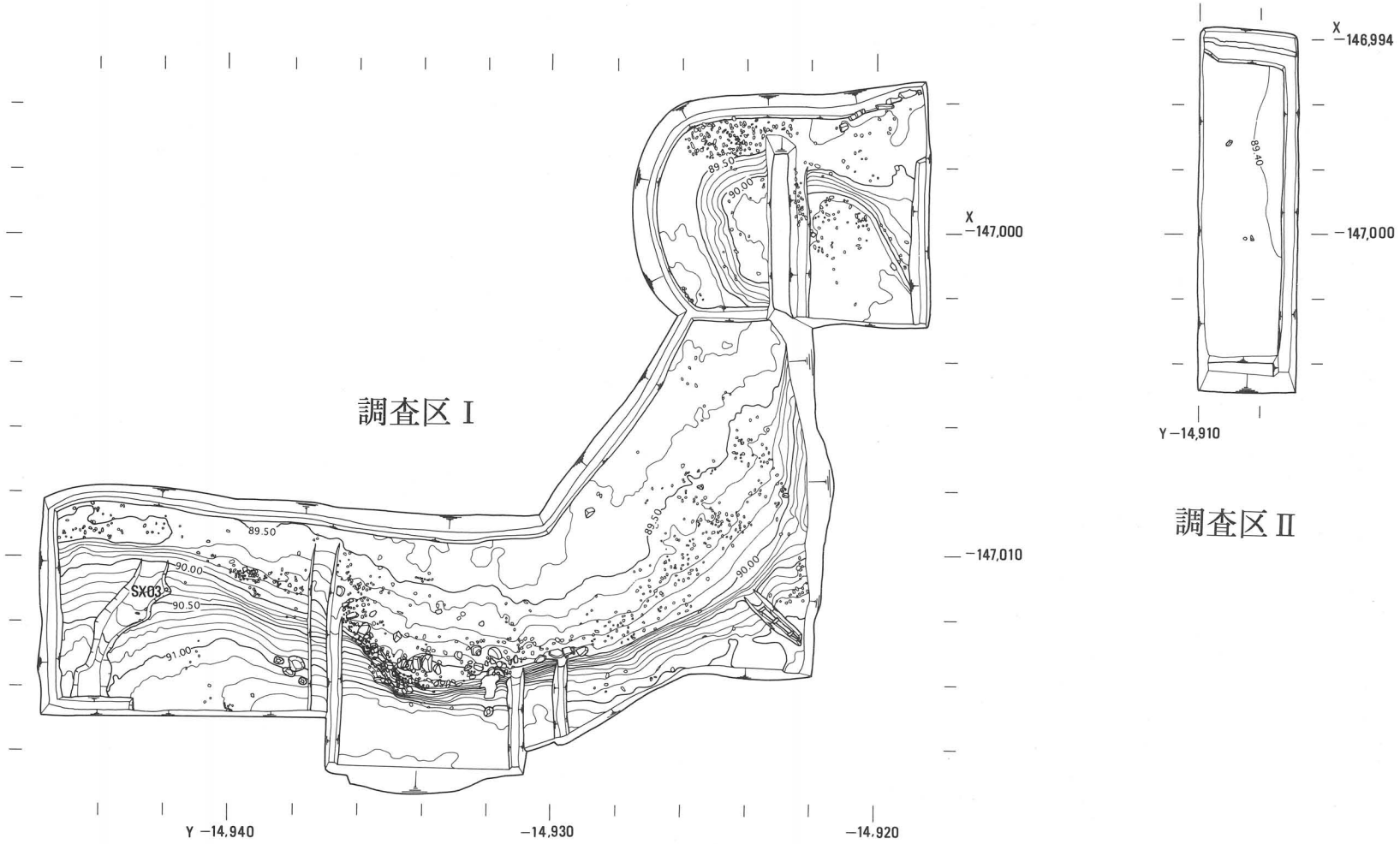


図42　第260次調査遺構平面図　1：200

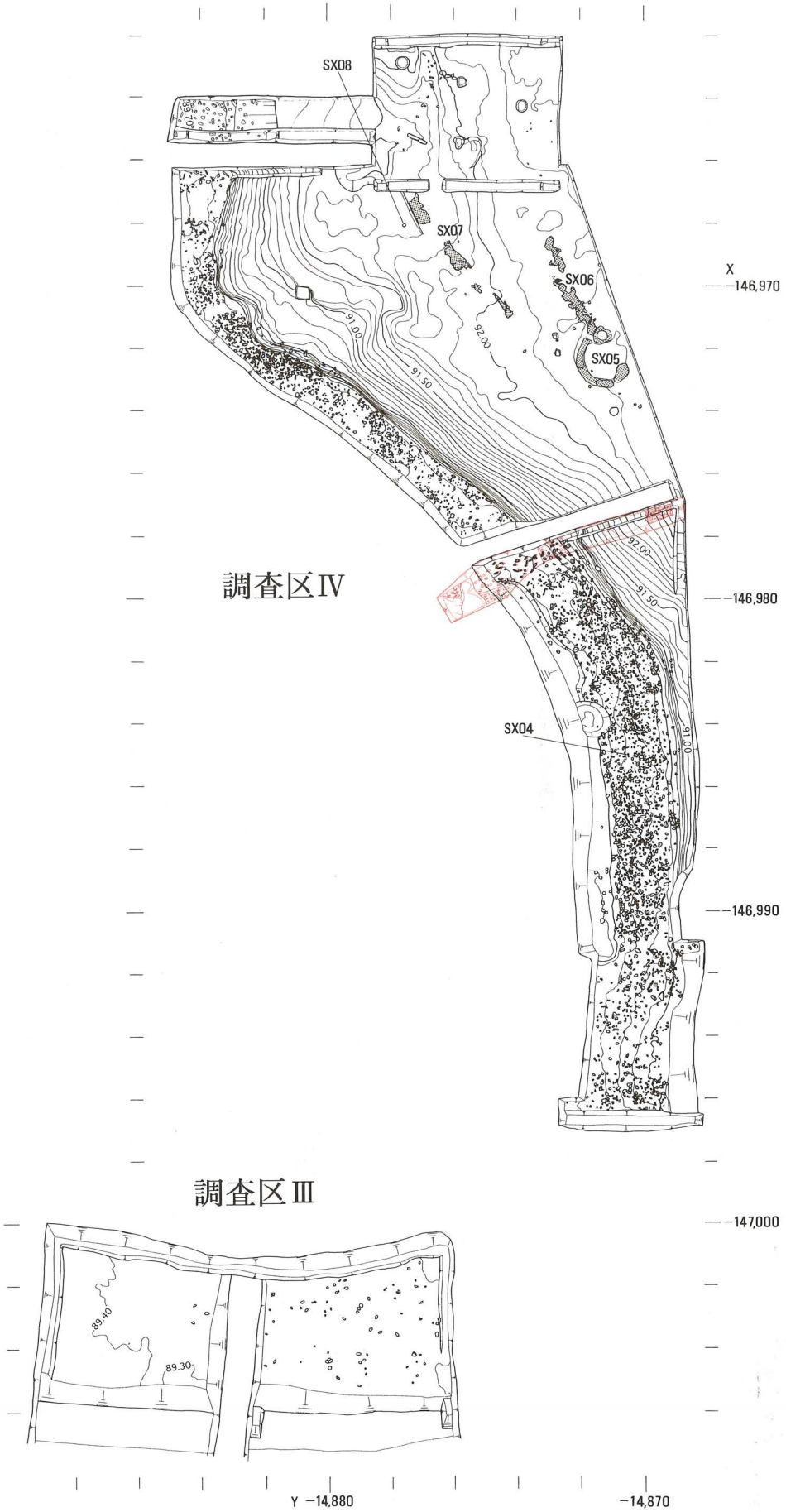
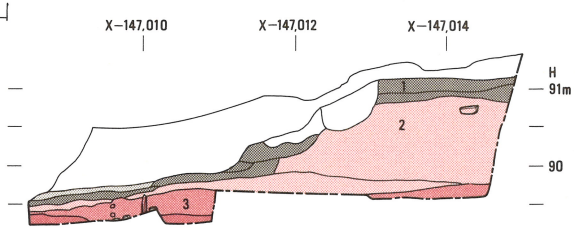
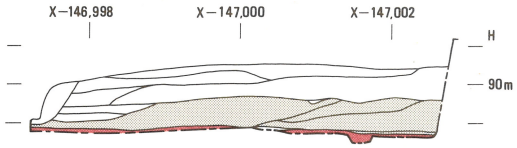


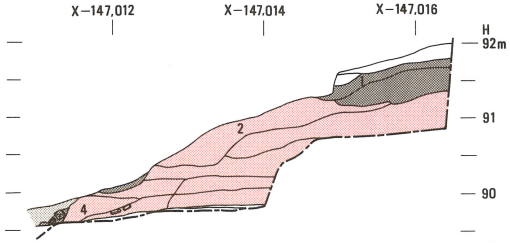
図43　第268次調査遺構平面図　1：200



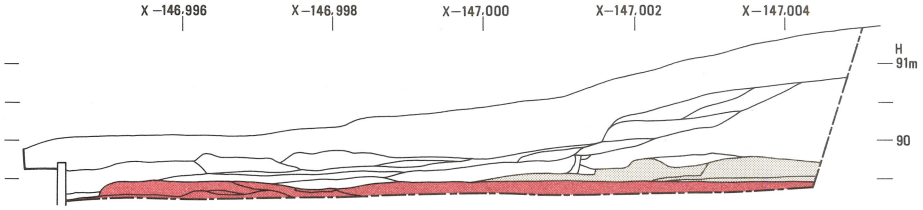
土層図ａ（Ｙ−14946.0）



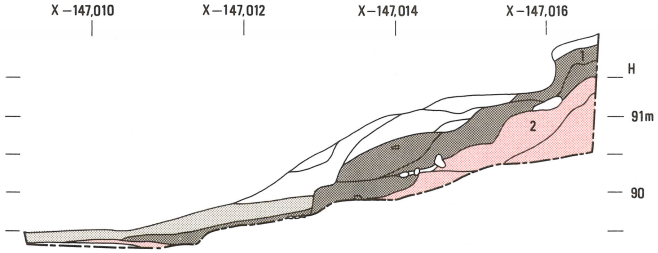
土層図ｄ（Ｙ−14922.7）



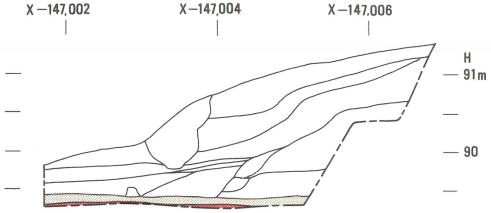
土層図ｂ（Ｙ−14937.0）



土層図ｅ（Ｙ−14907.0）



土層図ｃ（Ｙ−14931.0）



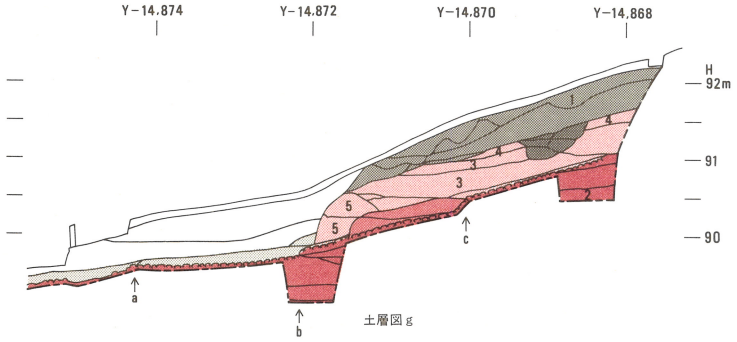
土層図ｆ（Ｙ−14882.2）

南岸土層図（土層図ａ〜ｆ）凡例

- 地山
- 平安時代遺物包含層
- 中世造成土・池底
- 近世成土
- 近世池堆積土
- 近現代造成土・攪乱土等
- 1　褐色系砂質土
- 2　灰褐粘質土
- 3　黒灰砂質土
- 4　礫混じり暗灰砂質土

東岸土層図（土層図ｇ）凡例

- 第１層（推定；中世の洲浜および地山）
- 砂の堆積層Ⅰ（推定；中世）
- 第２層（推定；中世〜近世前期）
- 攪乱層（推定；近世）
- 第３層（推定；近世後期〜近代）
- 砂の堆積層Ⅱ（推定；近代以降）
- 近・現代の積み土
- 1　暗黄灰砂質土
- 2　河原石層
- 3　砂混じり小石層
- 4　黄褐土混じり灰褐砂質土
- 5　砂混じり礫層



土層図ｇ

図44　南岸・東岸土層図（１：100）

は標高90.0m前後とみられるため、土層断面観察位置における汀線の平面位置は、急斜面の下端（X－146978・Y－14872）付近と推定できる。

第3層　第2層の上部に褐色砂質土などで30～50cm積み土して造成された陸部が西方に落ち込み池岸となるもので、基本的な勾配はSG04と大きく変化しない。最上面は暗黄灰砂質土である。汀線付近の護岸は第2層の仕上げおよび位置をそのまま踏襲しているものと考えられる。

3　遺物

瓦：池埋土から、奈良時代の元興寺で用いられた軒丸瓦（6201A）が一点出土した。そのほかの中近世の瓦出土状況は表9のとおり。

土器：Ⅰ調査区西端の黒灰砂質土およびⅣ調査区の池底で、平安時代の土器を出土した。

表9　260・268次出土瓦集計表

軒丸瓦		軒平瓦		丸瓦	
型式　種	点数	型式　種	点数	重量	30.3kg
				点数	190
6210A	1	中世	2		
中世	1	近世	16	平瓦	
中世巴	9	近世無文	2	重量	235.8kg
近世巴	14			点数	1,503
近世無文	1				
菊丸	1				
小型菊丸	5			道具・その他	
巴	1			軒桟瓦	1
型式不明	1			近世鳥衾	2
軒丸瓦計	34	軒平瓦計	20		

4　まとめ

今回の調査で得られた成果の要点を奈良市の調査の成果もふまえながらまとめてみると、以下の通りである。

（1）池南岸の汀線は、中近世をつうじて、緩やかな出入りを見せながらも比較的単調に東西方向にのびていた。

（2）室町時代の園池の南中島である可能性を指摘されていた出島は、近世以降、おそらく近代のものであることが明らかになった。

（3）池東岸は、おそらく園池の成立当初においては、現在検出した範囲よりも広く洲浜石敷きが施されていた可能性がある。この洲浜石敷きは、自然堆積の砂礫層に手を加えて仕上げられたものと思われる。その成立年代は不確定ながら、第268次調査区で検出した洲浜石敷上面から10世紀末～11世紀前半の土器が出土したことにより、大乗院移設以前、すなわち弾定院の段階に園池の成立がさかのぼる可能性が生じてきた。この点は、注目に値する。

今回の調査では、汀線など大乗院庭園園池の意匠変遷についていくつか確認されたが、時期の推定に関しては、まだ直接的根拠が十分ではない。園池の発掘調査は今後4年間継続して実施される予定であり、今後の調査に期待されるところは非常に大きい。なお、最終的には、今後の調査成果も併せて調査報告を作成する予定である。　（小野健吉・浅川滋男・平澤　毅）

Ⅱ－9　薬師寺講堂の調査　　第263次

1　はじめに

薬師寺では創建当初の伽藍を復元するという計画のもとに、金堂・西塔・中門・僧坊・回廊などにつづき、講堂も再建することにしており、そのための正確なデータを得るため、今回、創建講堂の全域について発掘調査を行うこととした。調査面積約1480㎡。調査は10月２日に開始し、1996年１月25日に終了した。

講堂の変遷　長和年間の『薬師寺縁起』によれば、講堂について次のように記されている。

講堂一宇、重閣、七間四面（裳階あり、高さ一丈三尺六寸）。長さ十二丈六尺、広さ五丈四尺五寸、柱の高さ二丈五寸。南には戸なし、東西は各戸一間、北は戸三間、自余は皆連子（今は壁）。繍仏像一張を安置す。高さ三丈、広さ二丈一尺八寸、阿弥陀仏像ならびに脇士、菩薩天人等すべて百余体を繍し奉る。

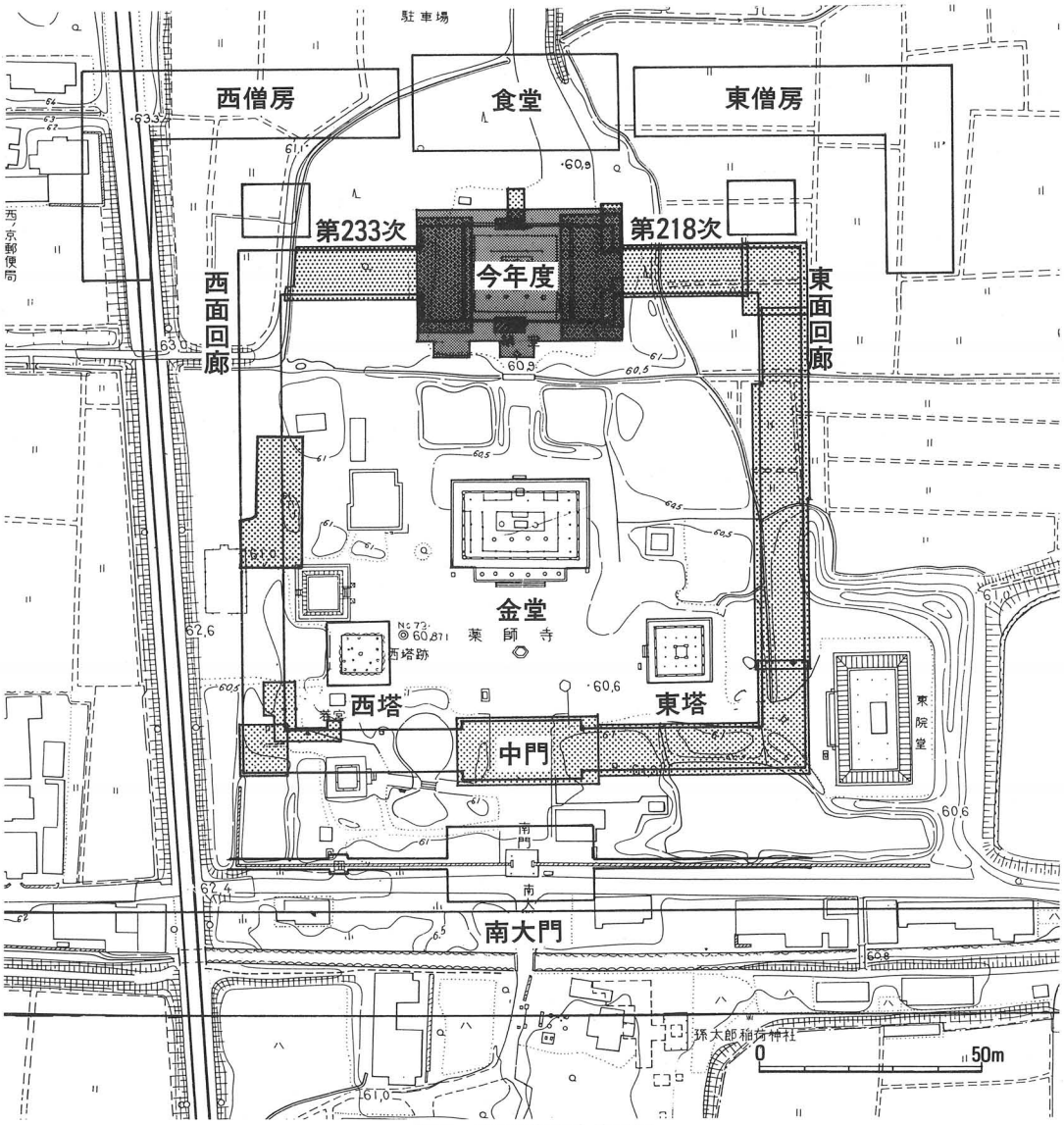


図45　第263次調査位置図

この縁起は11世紀の成立ではあるが、「流記帳いわく」として焼失以前の史料を引用しているから、部分的に誤りを含むものの、一応創建当初の講堂についての記述と見てよい。創建講堂の造営については史料に明記されないが、他の堂と同じく天平年間には完成していたと見られる。ところがその講堂は、天禄4年（973）に焼失し、貞元3年（978）に再建された。享禄元年（1528）に兵乱により再び焼失、その後ながく再建されなかった。18世紀末にいたり、安永9年（1780）に西院にあった金銅の薬師三尊を講堂跡に移し、翌年仮屋上棟。それ以来本格的な再建の動きがはじまり、ようやく嘉永5年（1852）に講堂が完成し、現在にいたっている。

従来の調査　これまでに行われた講堂に関わる発掘調査には、1968～71年に近畿大学の杉山信三研究室による小規模な調査があり（『薬師寺伽藍の発掘調査1968－1971』）、これをうけて1990年に北面回廊および講堂東端部（第218次）、1992年には同じく西端部（第233次）について実施し、次のような成果をあげている。

①基壇の規模は南北76尺（22.5m）で、東西は147尺と推定できる

②建物は身舎が七間×二間で四面に廂があり、裳階の有無は未確定

③柱間寸法は身舎の桁行15尺、梁間17尺で、廂は10尺の出となる。裳階がある場合は6.25尺か

①は第218次の成果による『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』（1991年、以下『1990概報』と略称）の見解である。②の裳階については『薬師寺発掘調査報告』（1987年、以下『薬師寺報告』と略称）では確認しておらず、存在を推定するにとどまっていた。『1990概報』では北側に1箇所の裳階とみられる礎石跡を確認したとするが、第233次調査では裳階の痕跡は全く残っていない（『1992概報』1993年）。③は第218次の発掘によって得られた寸法で、裳階の点を除き第233次でもこの見解を踏襲している。

したがって今回の調査では、これまでの成果を確認すること、裳階の有無などの課題を解決すること、さらに基壇の築成状況などのより詳細な点を明らかにすることを目的とした。

2　遺　構

A　奈良時代の講堂

基壇外装　基壇は金堂と同じく凝灰岩製の束石を用いない壇正積基壇で、地覆石と羽目石の一部が残っている。基壇土は特に北辺中央付近の残りが良く、東西両端および南にゆくにしたがって後世の削平を受けている。凝灰岩製の地覆石は、上面幅が30cm前後、長さはまちまちで55cmから110cm、厚さは25cm前後である。上面には深さ1cm程のくり込みを入れて羽目石との仕口としているものがある。羽目石は北面中央階段より東に残っているが上面が摩滅しており、法量は確定できない。地覆石の下には平瓦を二ないし三枚（厚さ約10cm）敷いている。その中に本薬師寺に使用された軒平瓦6641－Hが含まれており、地覆石に改装の痕跡もないことから、基壇は創建当初のものと考える。また、かつて中門東の南面回廊部や、第233次で検出した北

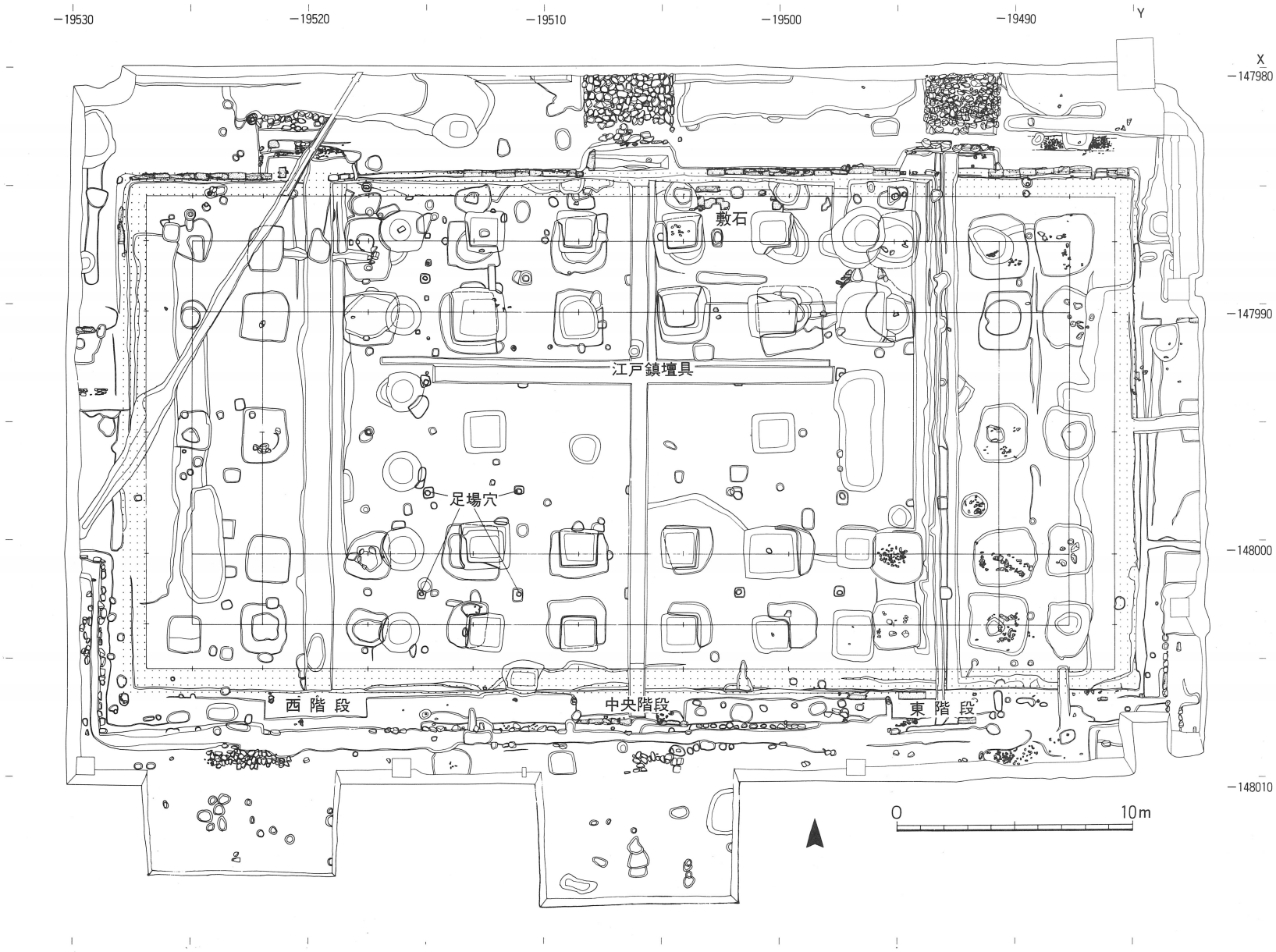


図46　第263次調査遺構平面図　1：250

図47　講堂基壇南北断割断面（西壁）

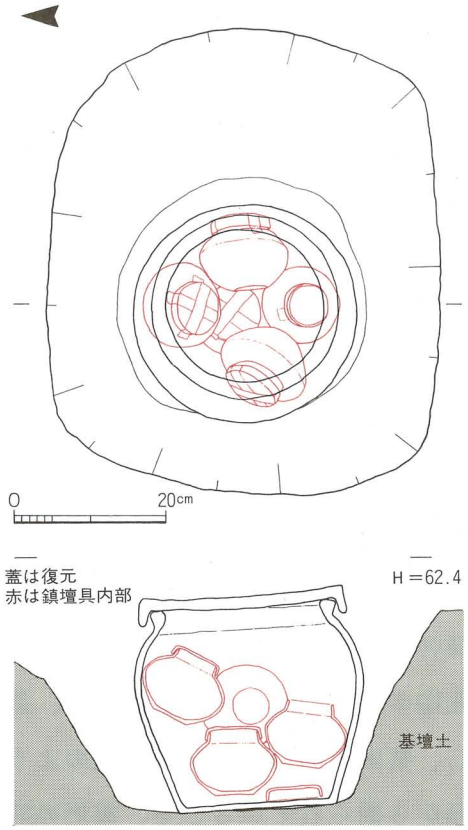


図48　江戸鎮壇具出土状況　1：10

面回廊の単廊部分の瓦敷きなどもこうした地覆石下に敷かれた瓦と認められる。

地覆石および平瓦のない部分についても、地覆石を据えるときに基壇縁をカットした線が残り、それらによって基壇規模が判明する。その規模は東西43.3m、南北22.2mとなり、これを『薬師寺報告』で採用している薬師寺の造営尺（1尺＝29.6cm）を用いると東西146尺、南北75尺となる。したがって、従来の成果を若干修正することになる。なお、『薬師寺報告』では南大門・金堂などの主要堂塔の遺構の座標を示し、そこから伽藍中軸線を計出しているが、講堂の座標はこれからかなり外れてしまう。実際に検出した遺構による講堂の中心の座標は X＝－147995.5 Y＝－19506.3 となり、これでは『薬師寺報告』に記す金堂の中心座標（X＝－148052.4 Y＝－19507.7）より1.4mも東に寄ることになる。そこで遺構の直上に復元された現金堂を再測量してみると、その中心はおおよそ X＝－148052.3 Y＝－19505.6 となり、講堂の座標との関係で不自然ではない。したがって、『薬師寺報告』で発掘時の座標を国土座標に変換する際に誤りが生じたのであろう。『薬師寺報告』の測量成果については再検討が必要である。

基壇の築成　今回の発掘部分はちょうど江戸時代の講堂基壇の下に「保護」されていたために残りがよく、重要な点が明らかになった。講堂周辺の地山は灰白色ないし淡い灰茶色の砂土で、講堂北辺から東辺にかけては奈良時代以前の流路の埋土と見られる灰黒土があり、これらの上におおよそ20～30cmほど整地を行い、基壇部分はその上に版築を行っている。掘込地業は認められない。版築はもっとも残りの良い部分で約30層、120cmに及ぶ。版築が約100cmに及んだ段

階で礎石を据え付け、さらに20cmほど版築をして上面を整える。基壇北端の中央やや東に、凝灰岩が5個据わっている。これは基壇上面の化粧であり、当初の敷石と判断した。敷石の方向からみて布敷である。したがって地覆石下端から敷石上面までの基壇高が約100cmとなる。

基壇版築の上面に近い部分には、厚さ約2cmのベンガラを敷いた真っ赤な層があり、その上には凝灰岩の粉を敷き詰めた白土の層が基壇一面を覆っている。これは版築の効果というよりも、独特の色彩に意味があり、版築の段階で何らかの祭祀を行ったのではないかとも考えられるが、なお類例の検討が必要であろう。

礎　石　創建当初の講堂は礎石建ち瓦葺きの建物で、礎石の据付穴と抜取穴を49箇所で検出した。礎石位置が江戸時代の講堂と重複するものが多いため、原位置に礎石は1個もなく、根石が残るのも一部に限られる。課題となっていた裳階の有無については、北面に6個所の礎石跡があり、他は削平されているものの四面に裳階がめぐっていたことがわかる。

身舎と庇の礎石据付掘形は一辺2.5m前後の隅丸方形で、深さは基壇土が最もよく残っている北端中央部で55cmを測る。一方、裳階の礎石掘形は直径1.3mの円形で、深さは65cmある。ただし、裳階の掘形は、身舎と庇のように基壇築成途中で掘形を掘るのではなく、版築終了後に上面から掘られているので、掘形の底のレベルとしては裳階のほうが若干高い。

礎石抜取穴の埋土は、江戸の基壇土と同じであり、礎石のうちのいくつかは19世紀まで原位置をとどめており、江戸の講堂再建時に抜き取られたと推定される。江戸時代の様子を描いた薬師寺伽藍古図の中には、講堂の位置に基壇のみ描き、そこに柱位置を示すものがあるが、これは当時における礎石の残存を示すのであろう。

また、礎石跡の間で各礎石掘形の四隅の方向に掘形一辺40cmほどの方形の掘形の小柱穴が並ぶ。これは講堂建設時の足場穴であろう。

建物規模　以上から、講堂の規模は次のように確定できる。平面形は四面庇にさらに裳階がつく形で、身舎は桁行7間梁間2間、桁行柱間寸法は15尺等間、梁間は17尺等間である。庇の出は桁行、梁間方向ともに10尺となる。裳階の出はこれまで6.25尺と推定されてきたが、6.5尺と見るべきである。したがって桁行総長が138尺、梁間67尺で、さきの基壇規模と合わせ考えると、基壇の出は4尺となる。

階段　階段は南北にそれぞれ3カ所づつある。凝灰岩製の階段の地覆石が北面には残っている。

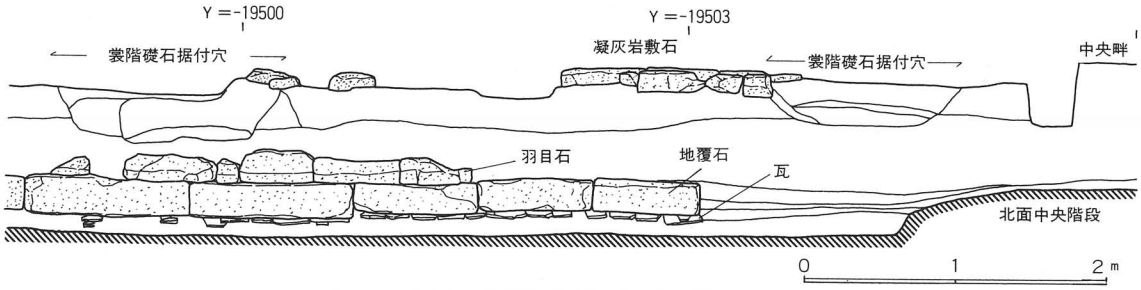


図49　基壇北面立面図　1：50

階段の出は110㎝（3.7尺か）である。基壇版築後に階段部分も含めて、長方形にカットして地覆石を据え、それから階段を造り足している。したがって、階段の中に隠れる部分にも一部地覆石がのこっている。とくに南面の東階段部分の地覆石はほとんど摩滅していない。北面中央階段では西側の凝灰岩製耳石が残る。

基壇の周囲　基壇縁から外側に約80㎝離れて玉石組の雨落溝がめぐる。溝は西南部分で最も残りが良く、内のりで30㎝を測る。また北側には、階段の位置に対応するように、玉石敷きの通路が３カ所にあり、北の食堂に続いている。石敷通路の幅は東が315㎝、中央が375㎝で、西は確定できない。南側には玉石の通路はない。

雨落溝を構成する玉石は、北側の階段の部分では階段地覆石の上にのっており、また、講堂西南部分では石組溝の外側に雨落溝側石の抜取と見られる痕跡があるから、創建当初のものではなく、時期の下るものである。また玉石敷きの通路についてもこれと一連のもので、時期が下る可能性があるが、本調査ではこの点については確定できなかった。

Ｂ　江戸時代の講堂

建　物　これまで建っていた江戸時代末期建立の講堂は桁行の柱間五間（総長19.5ｍ）、梁間五間（17ｍ）で、創建当初の講堂に較べて東西規模が約半分に縮小されている。その築造は、当時まで残っていた創建以来の礎石を抜き取り、基壇の東西をカットして削平し、残りの部分に土を積み足して新基壇とし、新たに礎石を据え直して建物を作っている。江戸時代の基壇土は暗褐色の砂質土で、厚さ10㎝前後の層をなしているが、それほどつき固めた様子はない。

礎　石　礎石は計30個で、大小さまざまであるが、重さ２ｔを越す大石もあって、全体的に大きい。礎石表面の柱座の加工は大別して以下の四種がある。１）表面を一辺約60㎝の方形に造りだし、十字に溝を切って柱の中心を示したもの（図51－５）で、中には墨書で番付を記す石

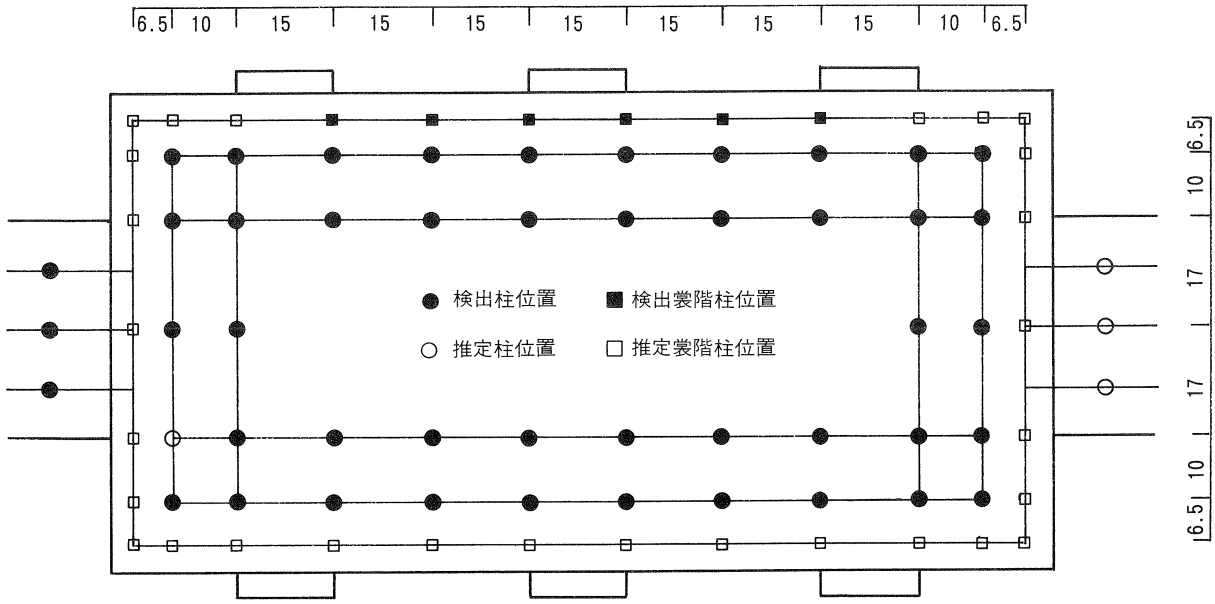


図50　創建講堂柱配置図

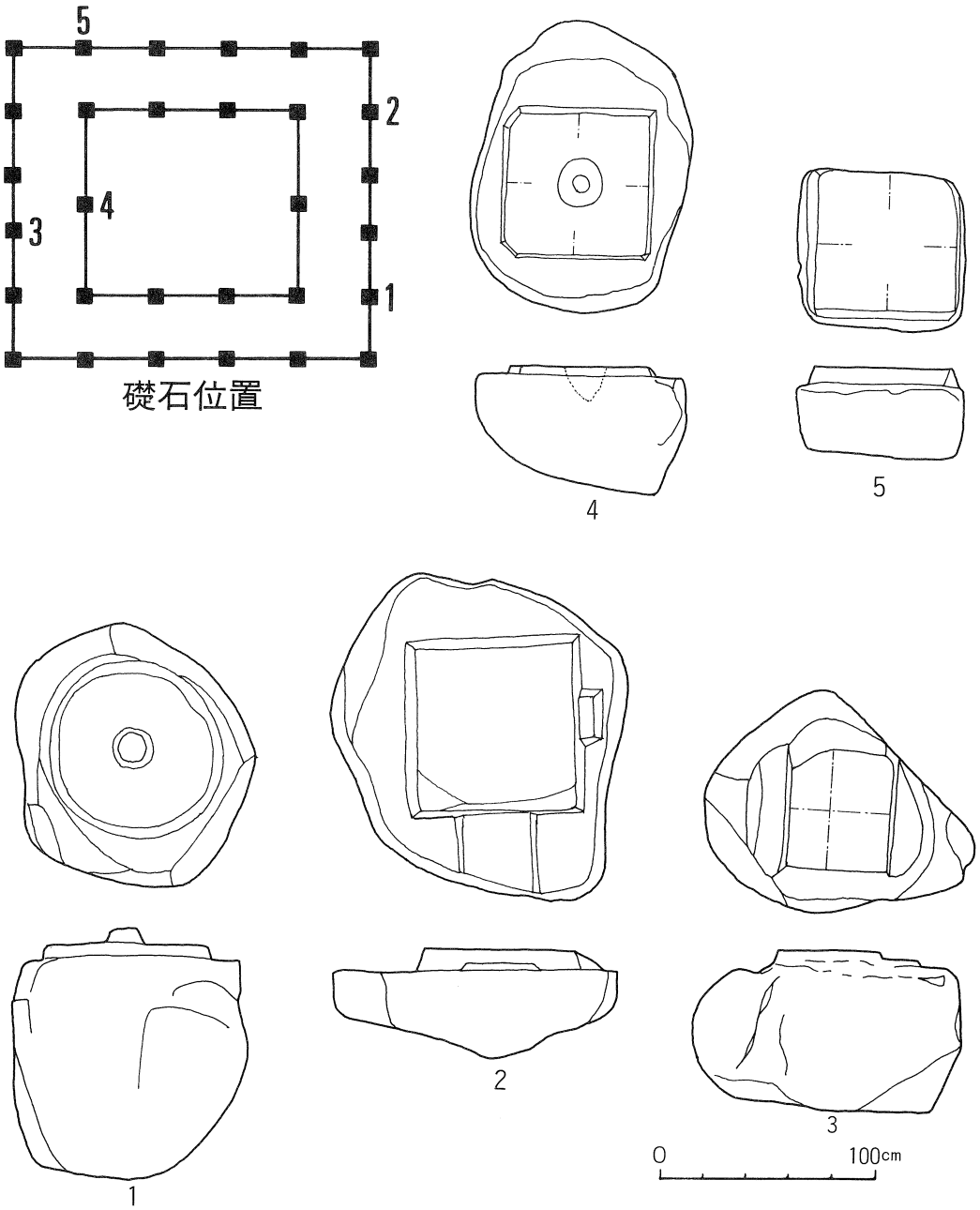


図51　江戸講堂礎石　3：100

もある。このタイプが最も多い。2）径約75cmの円形の柱座に径15cmのホゾを造り出す礎石が3個（図51－1）、3）径約65cmの円形の柱座に径20cm深さ15cmのホゾ穴をほる礎石が1個（図51－4）、4）一辺75cmの方形柱座でそれから二方向に地覆座を造りだした礎石が1個ある（図51－2）。1）の加工は江戸期のものであろう。中にはそれ以前の加工の痕跡が一部に残るものもあり（図51－3）、二次的な加工の礎石が多いと思われる。2）～4）は江戸再建以前の加工と推定され、複数の建物で使われていた礎石を転用したものと見られる。なお、4）の礎石は現在橿原市にある本薬師寺金堂跡に残る礎石の形と類似していることを付け加えておく。石質の詳細な検討はまだ行っていないが、現存する江戸の講堂礎石の中には、本来創建講堂に用いられていたもの、他から持ち込んだものなどがあり、その多くは表面を再加工し、一部は

加工を加えないまま礎石に使ったのであろう。礎石の据付掘形は西側柱部分のみ円形で、直径1.8m前後、深さ1.1m前後と深く、それ以外は一辺1.8m前後の方形の掘形、深さは0.6m前後と浅い。大小の根石を二ないし三段に敷いた上に礎石を据えている。

江戸の講堂には薬師三尊を安置するため、須弥壇を中央北寄りに築いた。東西約8.5m、南北約3.5mで高さは80cmある。須弥壇の下には鎮壇具が埋められている。（寺崎保広）

3　遺　　物

A　瓦磚類

次表のように大量の瓦磚が出土した。基壇の周囲に掘られた土坑ないし、近世の整地土から出土したものが多く、特に基壇北側の東西の土坑は瓦層が厚さ60cmにも及ぶ。瓦の年代は奈良時代から江戸時代に至るまであり、その種類も多様である。おそらく、江戸時代に講堂を再建する際に、周辺にあった瓦をまとめて廃棄したものであろう。

集計表の瓦のうち、6000番代の型式は奈良時代、薬師寺38～87および236～287が平安時代、それ以外は鎌倉時代以降のものである（『薬師寺報告』）。従来より、薬師寺の創建軒瓦とされてきたのは軒丸瓦6276A－軒平瓦6641Gのセットと軒丸瓦6276E－軒平瓦6641Iのセットで、前者

表10　第263次調査出土瓦塼類集計表

軒丸瓦				軒平瓦				丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	型式	種	点数	重量	2,906.4kg
6138	B	2	薬師寺120		2	6553		3	薬師寺246	6	点数	14,443
6225	E	2	147		3	6641	G	31	254	1	平瓦	
6235	Q	1	168		1		H	22	263	1	重量	5,818.5kg
6276	A	58	170		1		I	4	267	2	点数	39,245
	E	7	174		1		K	3	268	2	塼	
6284	L	1	178		1	6647	C	2	271	1	重量	5.6kg
6304	E	7	193		1	6663	F	3	285	1	点数	9
薬師寺38		3	196		1		H	4	287	1	凝灰岩	
39		32	巴		47		I	5	296	6	重量	32.9kg
40		6	型式不明		34	6664	K	1	303	1	点数	65
41		1	その他		1		O	1	305	1	道具・その他	
42		14				6682	F	1	306	6	鬼瓦	1
43		5				6685	F	1	309	2	隅切平瓦	1
47		1				6691	A	1	313	1	文字平瓦	1
54		1				6697	A	1	323	3	瓦製品	1
64		1				6763	B	1	343	1		
69		1				薬師寺236		11	355	3		
76		1				238		2	356	11		
86		3				240		6	360	1		
87		1				241		12	連珠文	1		
102		1				242		3	型式不明	25		
117		1				245		5	その他	9		
					243					209		

が本屋根要、後者が裳階用である。今回はこの他に軒平瓦6641Hも比較的多数出土している。ちなみに、移建か否かで問題となる藤原京の本薬師寺の創建瓦は、6276A－のは6641Hのセット（本屋根用）と6276E－6641Kのセット（裳階用）と考えられている。また、平安時代の瓦が奈良時代のそれに匹敵するほど出土しているのも特徴的である。仮に、今回出土した瓦の大半が講堂に関連するものだとすると、天禄消失後の10世紀の再建時の瓦ということができよう。

（寺崎保広）

B　平城薬師寺講堂江戸須弥壇出土の鎮壇具

嘉永３年(1852)に再建された講堂の須弥壇から出土した鎮壇具は、蓋を伴う広口の甕の中にほぼ同大の小壷が五つ、中央と東西南北に配されていた（小壷を東・南・中央・西・北の順で、①～⑤とよぶ)。

土器　鎮壇具を納めていた甕は酸化焔焼成の素焼で、内外面ともに轆轤ナデで調整され、口径25㎝・高さ26.5㎝を計る。胴部内面には後述の小壷を封じていた紙片が出土状態での東・西側に付着する。蓋も素焼で、口径28㎝・高さ3.6㎝を計る平坦な器形で、円盤上に口縁部を付した、手ずくねの粗製の作りである。焼きも甕に比して甘く、甕に本来的に伴うものではなく、急遽製作した感がある。

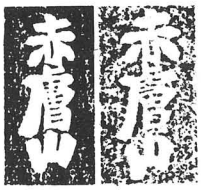
小壷は酸化焔焼成の素焼で、甕に比して焼成度はよい。最大径11.5㎝前後・高さ9.0㎝前後・口径6.4㎝前後を計り、算盤玉形の胴部に直立した1.4㎝の口縁をもつ、同一の器形である。外面は細かな轆轤ケズリで調整される。肩部外面から口縁・内面は轆轤ナデで調整される。
小壷の蓋も、身と同一の焼成で、最大径7.4㎝前後・高さ1.9㎝前後を計る同一の器形である。外面は細かな轆轤ケズリで調整され、内面は轆轤ナデで調整される。外面の頂部中央には「赤膚山」を記した印が押される。

これらの土器はすべて、赤膚焼であるが、小壷の器形は赤膚焼には認められず、鎮壇具埋納のための特注品と考えられる。

鎮壇具　鎮壇具の出土情況は、蓋は土圧によって破壊され、土砂が甕の内部に若干流入していた。五個の小壷のうち②には蓋がなく、口縁まで土が充満していた。他の四個体は蓋で閉じられており、幅1.8㎝の紙で十文字に封がされており、封は小壷の肩まで及んでいる。蓋のなかった②の肩にも、封の跡が残っていた。甕の中に小壷が安置された状態で、Ｘ線撮影を行うと、それぞれの小壷の中に二個の物体があるように確認できた。甕の中から五個体の小壷を取りだし、Ｘ線撮影を行うと、②は土が充満するだけであったが、他の四個体の小壷の内部には、物体二個がそれぞれに認められた。甕の内部の土砂を除去すると甕の蓋の断片も出土した。また、蓋がなされていなかった②の小壷の下には甕の底部に接して蓋が上下逆におかれていた。この蓋と小壷は直接接していない。この蓋と甕の間に詰まった土の中には、Ｘ線撮影で二個の物体が認められた。

それぞれの小壷を開封すると、内部には金箔で包まれた鉱物二個と、稲籾の炭化した暗褐色の細粒と米粒とが固まった状態で確認できた。しかし、これらの米粒は食用とする胚乳部はすべて風化しており、果皮・種皮等のヌカ層だけが残った中空のものである。土の充満していた②の中の土を除去すると、小壷の上部からは甕の蓋の断片が出土したため、上部の土は甕の蓋が割れた際の流入土である。底部には他と同様に、中空の米粒が残存し、木炭の小片も確認できた。それぞれの小壷に入っていた二個の鉱物は、分析の結果、水晶（石英）と紺色のカリウム鉛ガラスであった。また、甕の底部の二個の鉱物も水晶とカリウム鉛ガラスであった。水晶とガラスはそれぞれ同一個体を砕いたものと考えられるが、接合はしない。

以上の情況をまとめてみれば、それぞれの小壷には、稲籾と金箔で包んだ水晶・カリウム鉛ガラスが納められ、蓋をされ、一旦、紙片で十文字に封じられた。②の小壷の封を解き蓋を開け、籾の大半と水晶・ガラスを甕の底部にばらまき、蓋を上下逆にして南側に置き、中央に③の小壷を置く、②の小壷を蓋の上方にのせる、その後、順序は不明であるが、①・④・⑤の小壷を安置する。出土情況からみても、②の小壷は最後に納めることはできないため、このような安置の順序を想定する。そして、甕に蓋をのせる。小壷の出土した方位が東西南北にほぼ一致するため、甕を埋納坑に安置してから小壷を甕に納めたものであろう。



左『陶器考』模刻
右②蓋
図52　小壷蓋の印
1：1

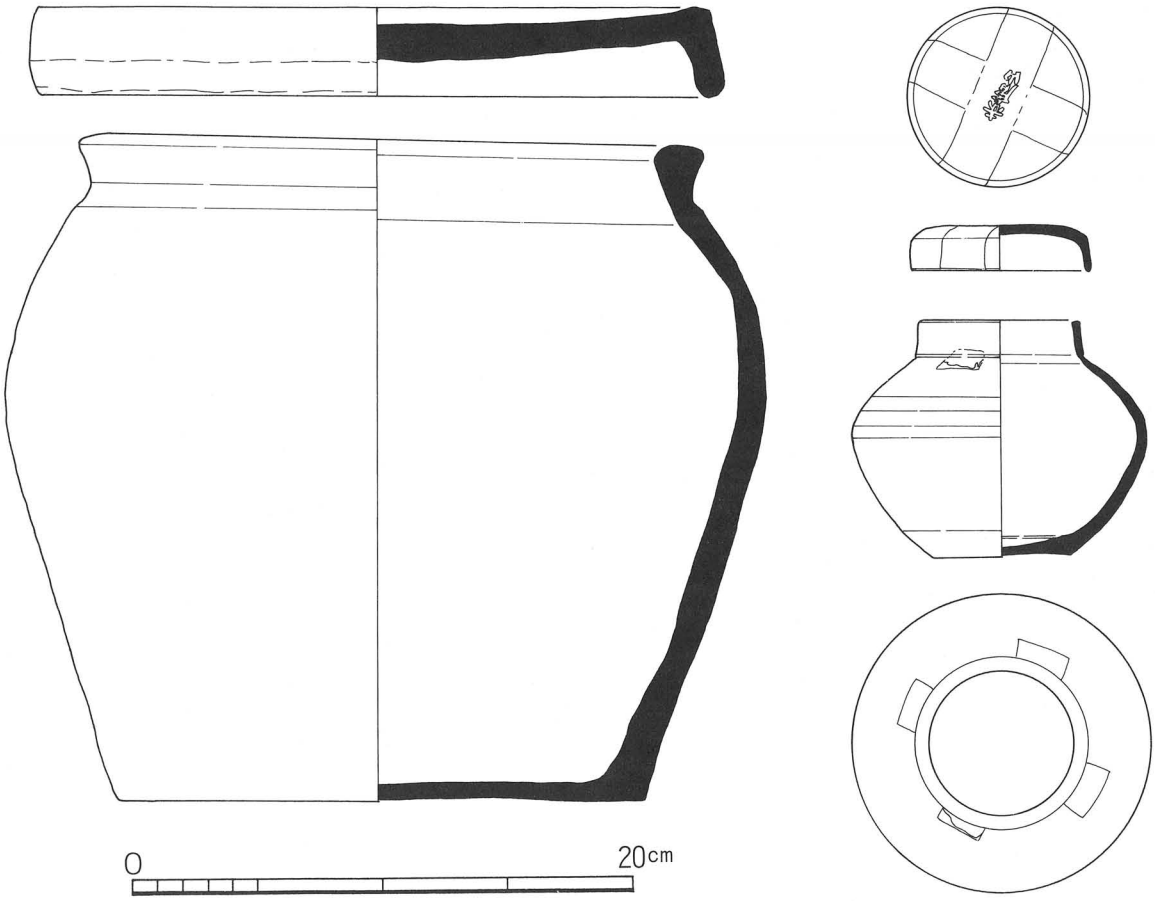


図53　薬師寺江戸講堂鎮壇具　甕・小壺

甕の内部の方位に則った小壷の配置から、当初、五穀・五宝など五行説に対応するものがそれぞれの小壷に埋納されていたと推定し、諸説ある五穀・五宝の配置関係の解明の一助になるものと期待したが、上記のように内容物はすべて同一であった。江戸時代の鎮壇具では、密教系のものが幾つかしられている。それらでは、輪宝を記した小皿を、建物の四隅・中央に配置して、五穀の粥をそれぞれに盛っていたことがしられているが、それらの儀法とは今回出土したものは明かに異なっている。今回出土した物の中で、五行説と関連すると考えられるものは、南側に置かれた②の小壷の中から出土した木炭であろう。この木炭は甕に蓋をのせ、閉じる直前に②の小壷の中に火をつけて入れた可能性が考えられるからである。火は五行説では南を象徴するものである。ただ、何故南側の小壷だけ一旦閉じた封を解き、内容物を甕の中にばらまき、さらに、火のついた木炭を投入したかについては、なんらかの儀礼を想定せざるをえないが、詳細については不明とせざるをえない。

それではこの鎮壇具が、いつ埋納されたかについて考えてみよう。講堂の建物自体の再建は1852年であるが、鎮壇具が埋納された時期については、須弥壇の構築に三度の機会が考えられるからである。一は三尊像を移転した際、すなわち、1780年11月９日から1783年３月15日の間である。詳しくみれば、安永９年11月９日（1780）に西院弥勒堂にあった三尊像を講堂跡に移転し、修復のための仮屋を作る届出が出され、翌年には３×３間（長さ８間×５間半）の規模の仮屋が講堂の中央部に造営されている。この間に三尊像が移転されていたならば、この間のある時期。仮屋完成後の三尊像移転ならば、天明３年３月15日（1783）から４月初旬まで三尊像は修理されているため、すでに移転は完了しており、仮屋完成から天明３年３月15日までのある時期とすることができる。二は文政２年６月12日（1819）の地震で、三尊像脇侍の首が落ちるが、この時には何故か三尊像は仮屋の外に置かれており、15日に本尊が仮屋に運び込まれる。三尊像が外に置かれていたのが須弥壇構築のためであれば、この時期。三は再建講堂の造営が始まり、その完成をみた、弘化５年～嘉永５（1848～52）年の間である。これらの三度の機会のうち、はたしていずれの機会とするのがよいのであろうか？

それを解く一つのかぎとなるのが、小壷の蓋に押捺された「赤膚山」の印であろう。この印は田内梅軒の『陶器考』（嘉永７(1854)年刊）によれば、「遠州」印とされるものであり、赤膚窯の寛政年間（1789～1800）の再興時以前とされる。この認識は嘉永５年の講堂再建と近接した時期のものであり、土器の製作年代を考える上で重要であろう。「赤膚山」の印は宝暦２年(1752) 製作と考えられる、「宝暦年製」を記す東大寺発注の油壷にも、異なる書体のものが押されている。また、この「遠州」印が押される赤膚焼の伝世品は、作風が古風なことも指摘されているのである（村上泰昭「赤膚焼の刻印」『赤膚焼』1991年）。

鎮壇具の埋納の時期は上記のように三度の機会があるが、史料上からはいずれとも決め難い。ここでは、赤膚焼の小壷の蓋に押される「遠州」印を重視し、その年代観から第一案の安永９

年11月19日から天明3年3月15日までの埋納と考えたい。すなわち、三尊像の西院弥勒堂から講堂跡地への移転に際し、講堂基壇に須弥壇が築かれたと考えたい。また、これらの赤膚焼の土器は寛政年間再興以前の赤膚焼の生産を考える上でも重要な資料となろう。

なお、その他注目すべき遺物として二彩椀1点がある。（立木　修）

4　おわりに

発掘調査から明かになった創建講堂の規模を『薬師寺縁起』と比較すると、裳階を除いた柱間総長が桁行125尺（37m）、梁間54尺（16m）となり、ほぼ縁起の記述に合致する。金堂については、複数の所伝を列記するが、裳階を除いた全長にほぼ一致する記述もあるので、縁起の書き方として、裳階を除いた寸法を記すという原則があったのであろう。

前記の文献史料からうかがわれる講堂の変遷からすれば、①創建講堂、②貞元再建の講堂、③安永の仮屋、④嘉永の講堂の四種の遺構が残っている可能性が考えられるが、実際には①と④が明かになったのみで、②と③については明確な遺構を検出できなかった。

金堂の発掘によると、同規模で再建する場合に、それまで残っていた礎石を用いて、上に建物を新たに建てているから、②の再建講堂も①と同じ規模とし、基壇と礎石をそのまま利用したのではないかと推定する。ただし、その際に縁起に「今壁」と注記するように、連子窓を壁に改めるなど部分的な変更を行い、また講堂周囲の石組の雨落溝や石敷通路など、当初に遡らない遺構はあるいはこの時の造作であろう。

また、③についてはどの程度の仮屋なのか、手がかりがないが、須弥壇下に埋められた鎮壇具の年代が注目される。赤膚焼の刻印により、製作年代が寛政以前だとすると、それはちょうど③の時期と合致するからである。つまり、③の時に三尊をこの地に移座する段階である程度基壇を土盛り整形して、須弥壇まで築いており、その後本格的な建物の建設に移行したものかも知れない。

今回の調査によって、薬師寺の主要伽藍の発掘は終了した。創建講堂の規模が確定し、新たに基壇高や基壇築成状況が判明し、今後の再建に有効なデータを提供でき、また古代寺院研究にとっても良好な資料を得ることができた。（寺崎保広）

Ⅱ－10　頭塔の調査　　第264次

頭塔の今年度の石積修理復原範囲は、北半部西面の基壇および塔本体石積のB段からG段までである。石積の解体に際し、塔本体石積に２ヶ所（A,Bトレンチ）、基壇に１ヶ所（Cトレンチ）の発掘区を設け、下層頭塔の石積、基壇構築の状況等を調査した（図54）。以下に各調査区ごとの成果、石積解体に伴う新知見、およびこれまでの調査成果と合わせて復原した下層頭塔の規模、上層との関係などについて述べる。

１　遺　　構

Ａトレンチ　上層G段石積から約1.5m内側に入ったところで下層第１段石積を検出した(図55)。下層第1段石積は東面と同じく石積前面に2段の階段状石積を有していたようである。ただ残念ながらここでは下層石積の前面にあるはずの下層基壇上面石敷を確認することができなかった。保存状態が良好な上層石積を残したままの断割り調査であり、下層基壇上面が上層基壇上面より60cm近く低いことを確認したにとどまった。上層石積内部は、東、北面同様丁寧な版築によっ

図54　第264次調査区位置図　１：150

て突き固め、築成されていた。

Bトレンチ　西面第1段中央石仏の裏側を断ち割る形に設けた発掘区である(図56)。ここでも下層石積か、と考えられる石積を発見したが、東面中央石仏裏側とは形態が異なること、想定される下層基壇上面に対し検出した石積下端が合わないなど、問題が残った。

平面位置は上層G段石積から約1.7m内側であり、Aトレンチの下層石積と結ぶと下層は上層に対して北で西に1度強振れる。この上下層の振れの関係は角度に多少の差はあるものの東面、北面と同様である。一方、東面中央石仏裏側位置における下層石積は仏龕状を呈していたが、この部分では直線状であり、仏龕の形態をとっていない。また、石積の前面には石敷があった。当初この石敷を下層仏龕内部の石敷かと考えたが、石敷をはずし断面を観察すると石敷は上層石仏（西面第G段中央石仏）の背面に直接接しており、上層石仏の設置と一連の課程で積土内部に敷かれたものと判断した。

またBトレンチ内下層石積の下端の標高は約111.1mであった。これに対して北に約7m離れたAトレンチ位置における下層基壇上面高は110.15m前後に想定される。したがってBトレンチの石積は1m近く下層基壇上面から浮き上がっていることになる。

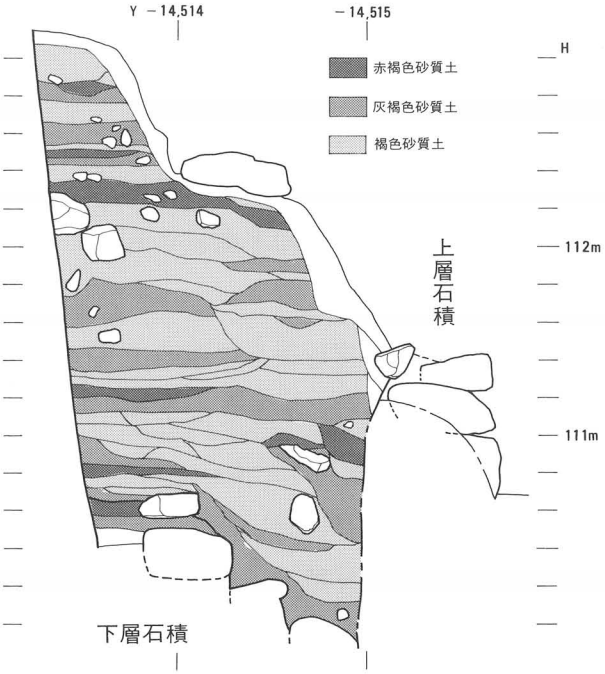


図55　Aトレンチ南壁土層図　1：40

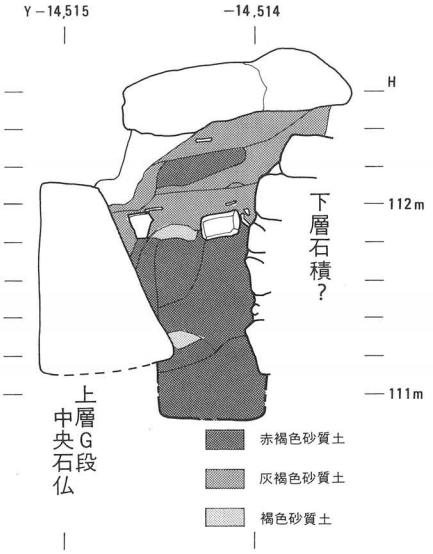


図56　Bトレンチ北壁土層図　1：40

こうしたいくつかの不可解な事実からすると、この石積は下層ではなく、上層の築成過程で築かれた内部の土止め施設の可能性が高い。

Cトレンチ　西面基壇中央部に設けた断割りトレンチである(図57)。西面基壇石積が階段状の石積であったことは、第199次調査（1988年度）で明らかになっていた。しかしこの基壇石積が上層に伴うものであるのか、下層までさかのぼるものであるのかは不明であった。今回、断割り調査の結果を踏まえて西面基壇の復原を行ったが、残存石から復原できる基壇上端のレベルと上・下層の塔本体石積最下段のレベルとの関係から見て、この階段状基壇は下層頭塔の時期に構築されたものと推定した。これは基壇最下段の積石内部から発見された後述の須恵器杯の年代観とも矛盾しない。

基壇内部の積土は上層塔本体内部の版築に比べ、やや粗い。地山から得たと思われる赤褐砂礫土を主体とした版築状の積土であり、東面基壇で見られたような堅く叩き締められた状態ではなかった。

石積基底石は赤褐砂礫土の地山上に積まれた約25㎝厚の整地土上面（標高108.5m）に乗っている。

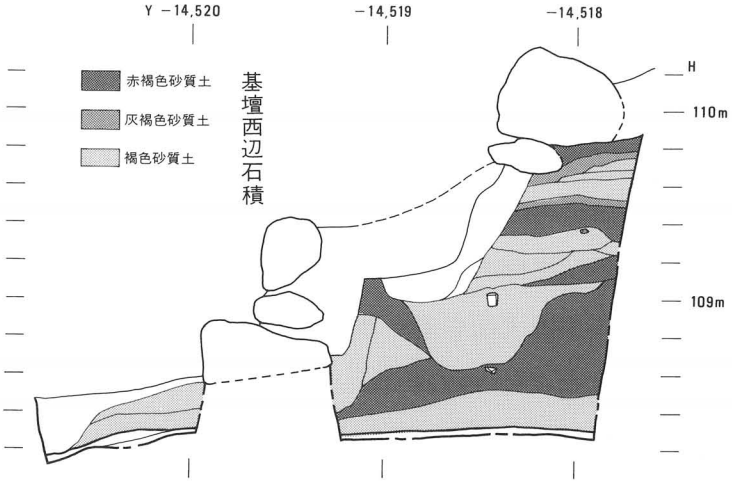


図57　Cトレンチ北壁土層図　1：40

2　遺　　物（図58）

基壇および塔本体積土に混じって瓦と土器が出土した。

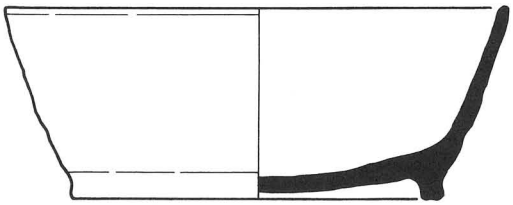


図58　第264次調査出土土器　1：2

土器の中で顕著なものに基壇最下段積石の内部から出土した須恵器杯ＢⅢがある。胎土には黒色粒子が多く含まれ、焼き上がりは淡褐色である。須恵器杯Ⅰ群～Ⅵ群のいずれにも属さない。そのため時期判定には慎重を要するが、形態的な特徴から奈良時代後半～末のものと思われる。

瓦はおもに上層塔本体積土から出土し、その傾向も過去の調査結果と同様である。軒平瓦では6732Ｆが多く、19点出土した。

3　まとめ

下層頭塔の規模　西辺で下層塔本体石積を確認したことにより、下層頭塔の東西幅が確定した。約21m（71小尺）である。上層塔本体第1段の東西幅が24.2m（82小尺）であるから、下層から上層の作りかえに際し、3.2m（11尺）大きくしたことになる。

旧地形と基壇との関係（図59）　頭塔は東から西へのびるやせた尾根の先端部に位置している。今回の調査で西面基壇下における赤褐砂礫土の地山面の高さが標高108.3mであることが分かった。これに対応する地山面の高さは東面基壇下では109.1m、北面基壇西寄りでは108.8mである。西面では地山面の上に整地土が乗るから、旧表土は取り除かれたとしてもこの地山面は本来の旧地表面に近いと考えられる。一方、東面基壇下の地山面上には整地土がなく、地山の上には中世に基壇を改修した時点の表土と考えられる厚さ10㎝弱の腐植土があり、この上に直接中世期の基壇石積が乗る。西に整地土があるということは平坦面を造成しようとした結果であろうから、元々西より高い東側では旧地表面は削平された可能性がある。下層頭塔の構築に際し、東を削り、西に盛土し、約２％弱の西下がり勾配をもつ平坦面が造成されたと推定できる。この上に下層の基壇が築かれるが、できあがった下層基壇の上面も塔本体石積北辺部で見ると、同じく約２％の西下がり勾配をもっている。一方、上層基壇の上面はほぼ水平に造

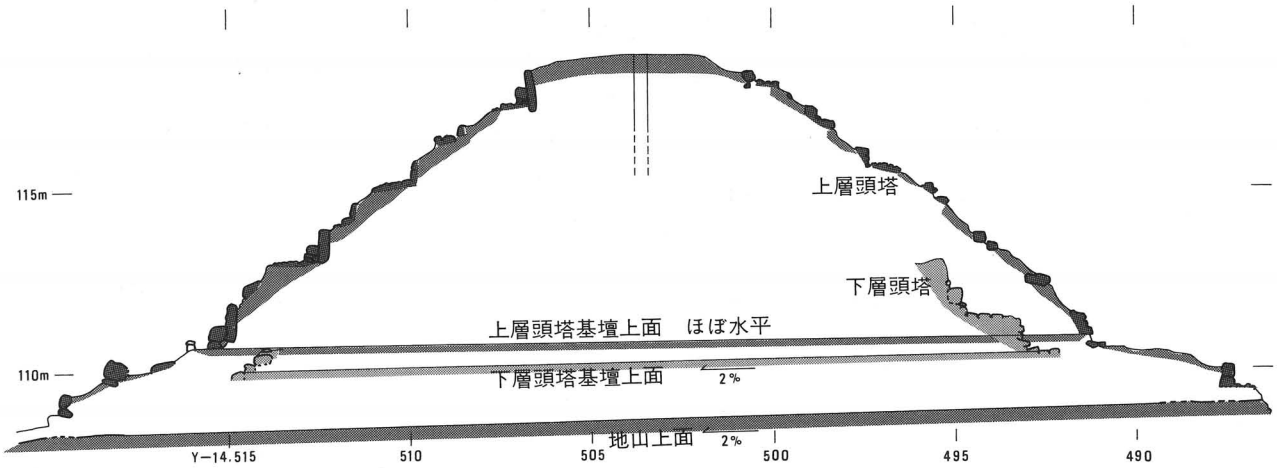


図59　頭塔東西断面図

成されている。下層から上層の作り替えに際し、西下がりであった基壇上面を水平に直したのである。想像を加えれば塔本体石積上面も下層頭塔では基壇と同様に約２％の勾配で西に傾斜していたのではないか。それを上層では塔全体が水平になるよう造り直したと推定できる。

（高瀬要一）

表11　その他の発掘調査一覧

次　数	遺　跡　名	概　　要
226－補	法隆寺	井戸掘り下げ。喜多院東面築地断割。
258－11	内裏北外郭北方	溝１（奈良時代）。
258－ 4	左京一条二坊十坪	溝１、柱穴２、土坑１（奈良時代）。
258－ 6	左京一条二坊十坪	柱穴１。
258－ 1	法華寺	柱穴２（奈良時代）。溝２、小穴多数（近世）。

写真１　第259次調査全景（造酒司南門と宮内道路　東から）　　撮影　佃　幹雄

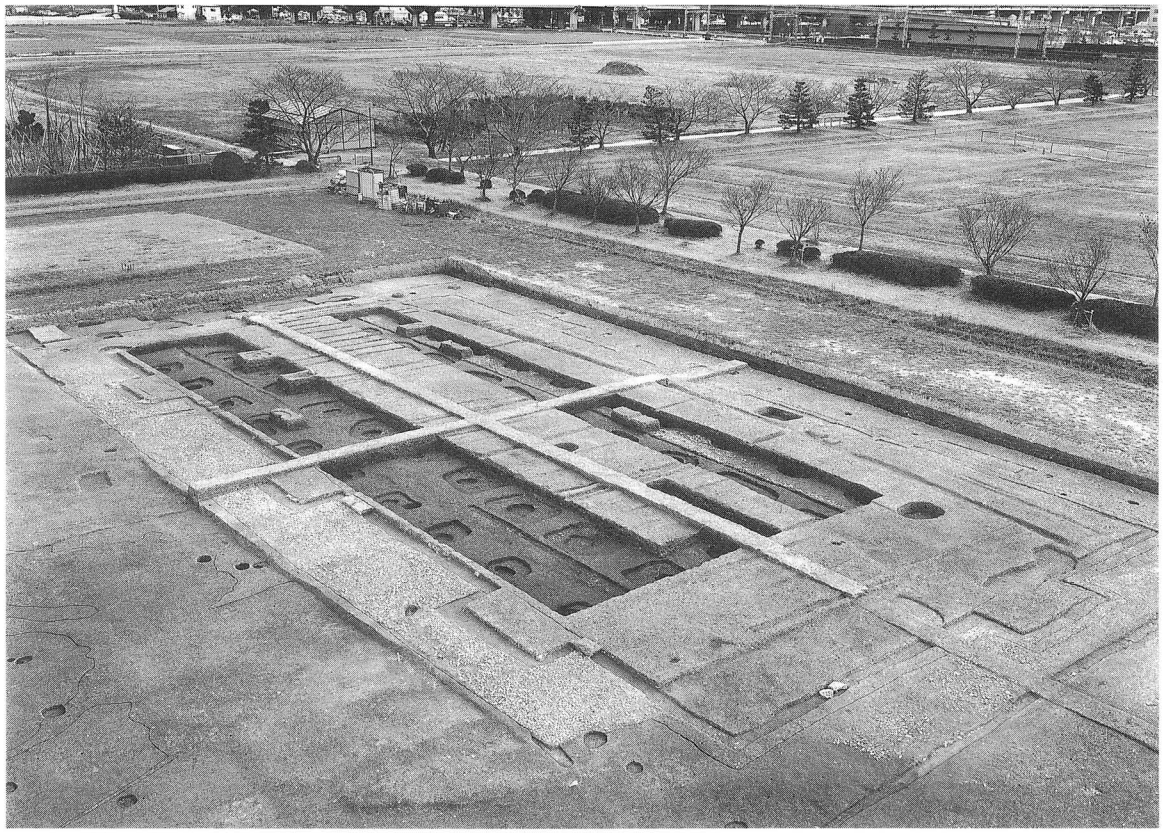


写真２　第261次調査全景（第二次朝堂院第六堂　北西から）　　撮影　牛嶋　茂

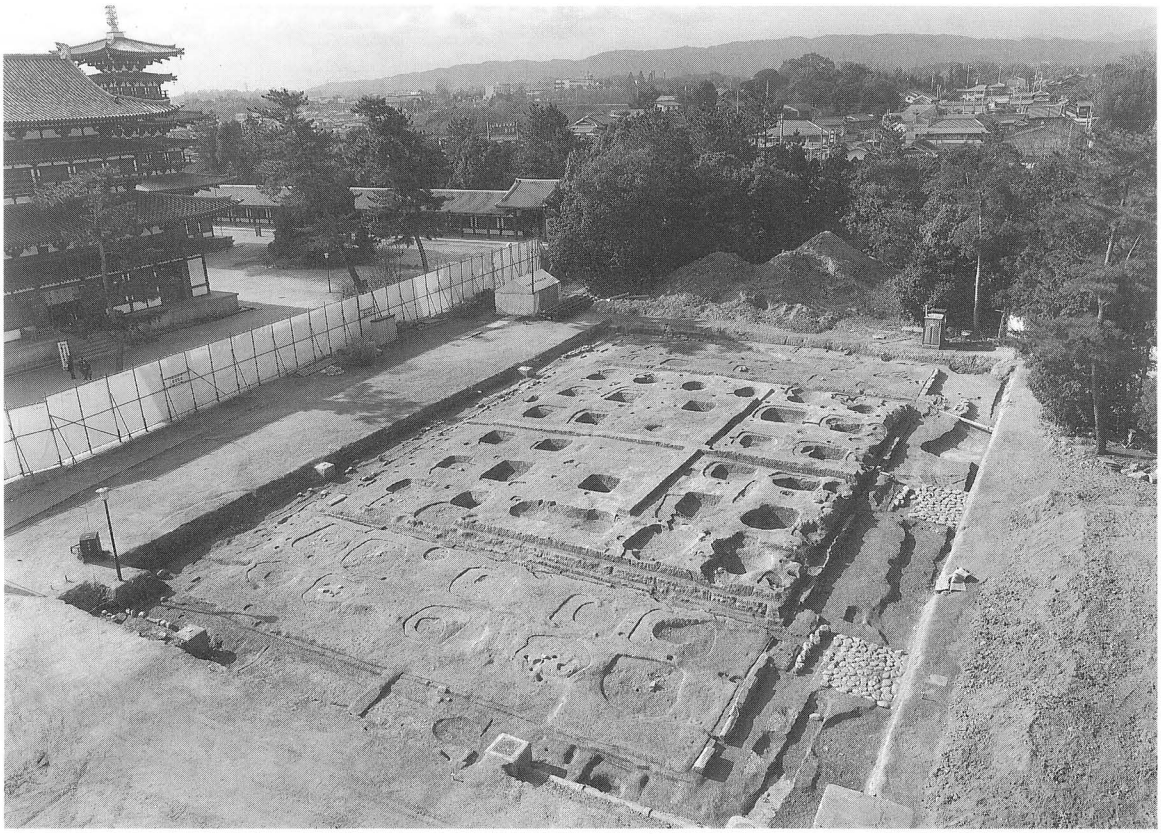


写真３　第263次調査全景（薬師寺講堂　北東から）　　撮影　佃　幹雄

写真４　第265次調査全景（第二次朝堂院南門　南から）　　撮影　牛嶋　茂

１９９５年度
平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報

1996年６月

編集・発行　奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

〒630　奈良市二条町２－９－１
Tel　0742－34－3931

ANNUAL REPORT OF EXCAVATIONS IN NARA PALACE SITE APR. 1995—MAR. 1996

June 1996

CONTENTS

Page

Chapter I Excavations in Nara Palace site 3

1 Office of Brewing (*Sakenotsukasa*) 4

2 6th hall of eastern area in Halls of State (*Chôdô-in*) 22

3 Imperial Audience Hall (*Daigokuden*) 30

4 Southern gate at Halls of State (*Chôdô-in*) 31

Chapter II Excavations in Nara Capital area 39

1 Ichiniwa Tumulus 40

2 Kidoriyama Tumulus 43

3 7th block of first ward on third street, the eastern sector (1) 45

4 7th block of first ward on third street, the eastern sector (2) 47

5 8th block and minor avenue of first ward on third street, the eastern sector 52

6 15th block of first ward on third street, the eastern sector 53

7 10th block of first ward on third street, the western sector 59

8 Garden of Daijō-in temple 60

9 Lecture hall of Yakusi-zi temple 68

10 Zutō stupa 80

Division of the Heijo Palace Site Investigations,
Nara National Cultural Properties Research Institute